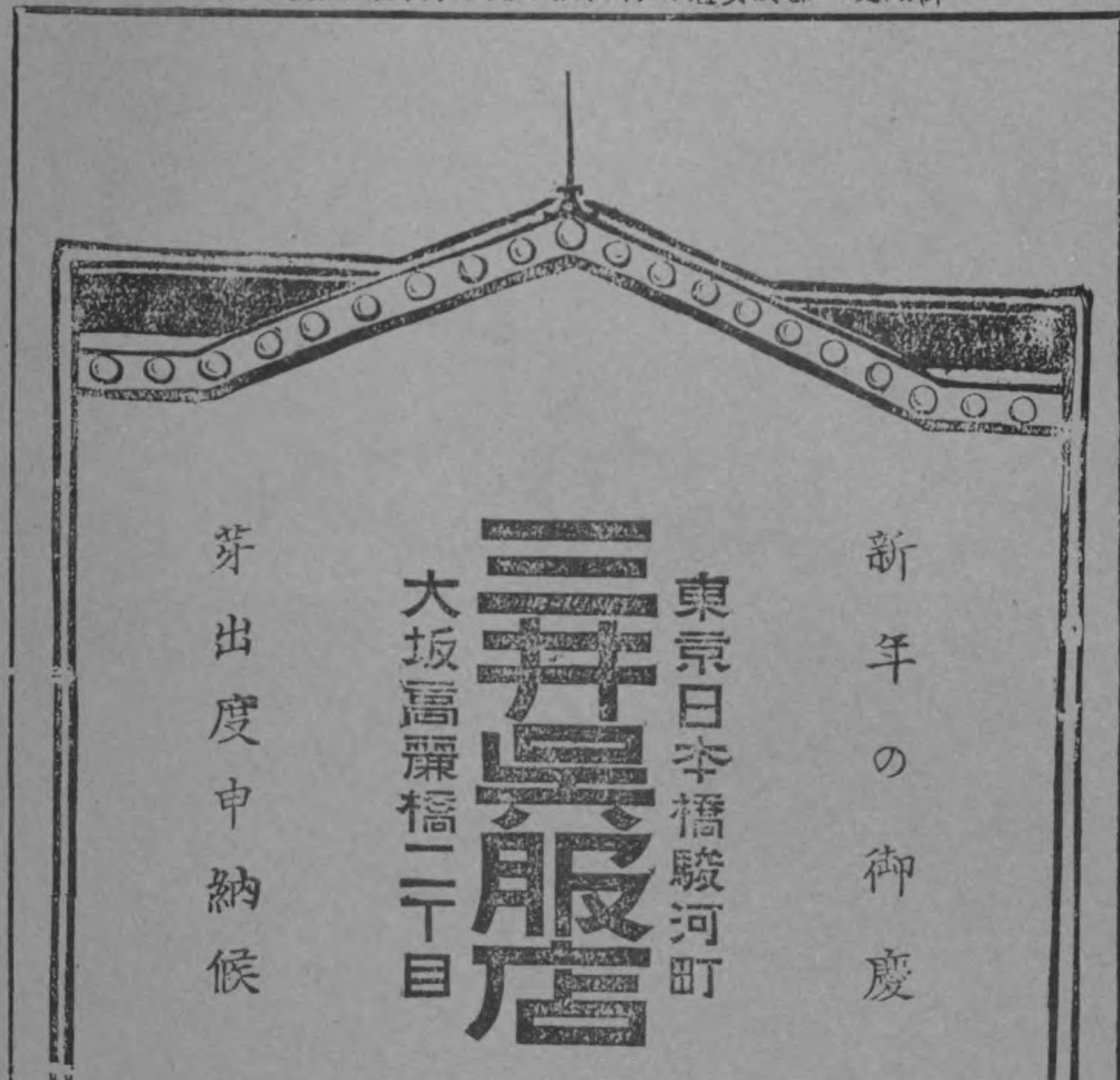

女鑑
第十四年
第貳号

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候



御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

驚林軍醫總監發明

りうまちす根切

梅毒根切

複方克快丸

半劑試み大効なければ決して服す可らず

◉五劑三圓五十錢二劑一圓五十錢送四錢

五年十年長病二劑服し全快す

複方克快丸は其効驚くべし克快丸に三倍す

責任調劑…順天堂合資會社長…植木彌一

本店東京市淺草區なみ木町
支店大阪市高麗橋松屋町通

順天堂合資會社

全快禮狀時に新聞掲載す……一劑七十五錢半劑卅九錢

冬期進物用無比の佳品

◉米國醫科大學教授博士ホフマン氏發明

◉日本東京木村病院長ドクトル木村順吉氏證明

温体布

原名ホフマンスベルト

（改正減價）

角形 並製壹圓四拾錢 特製壹圓九拾錢

胴巻 並製貳圓八拾錢 特製四圓七拾錢

送料各十錢

特効

肺病、胃病、子宮、血の道、僂麻質、貧血、肝臓、腎臓、喘息、麻痺、消渇、病後衰弱、冷症、老衰、寸白、其他冷より起る諸病殊に子なき人に懐姙せしむる奇効あり且つ姙娠中用ふれば胎兒健全旅行者に最適

本品は各國醫學界に最も有名なるホフマン氏の發明に係る發温劑を藥綿にて包み其外面を絹布にて蔽ひたる工造なり之を肌身に付着し置けば藥劑の奇効に據り忽ちに温氣全身に及ぼし毫も寒冷を覺しめざるは從來の懐爐温石綿等の比に非ず且つ本品は藥物より發温するものなれば火氣の害毒を避け其使用するに當りて湯火を以て温むる抔の手數なく又永年温度の減ずる患ひなし故に使用最も輕便にして虚弱者老人、姙婦、旅行者冷症の人には缺くべからざる前代無比の温體要具なり

東洋一手發賣元

（商標登記）ベルト商會

東京市京橋區三十間堀三丁目十四番地

（電話新橋三八六七番）

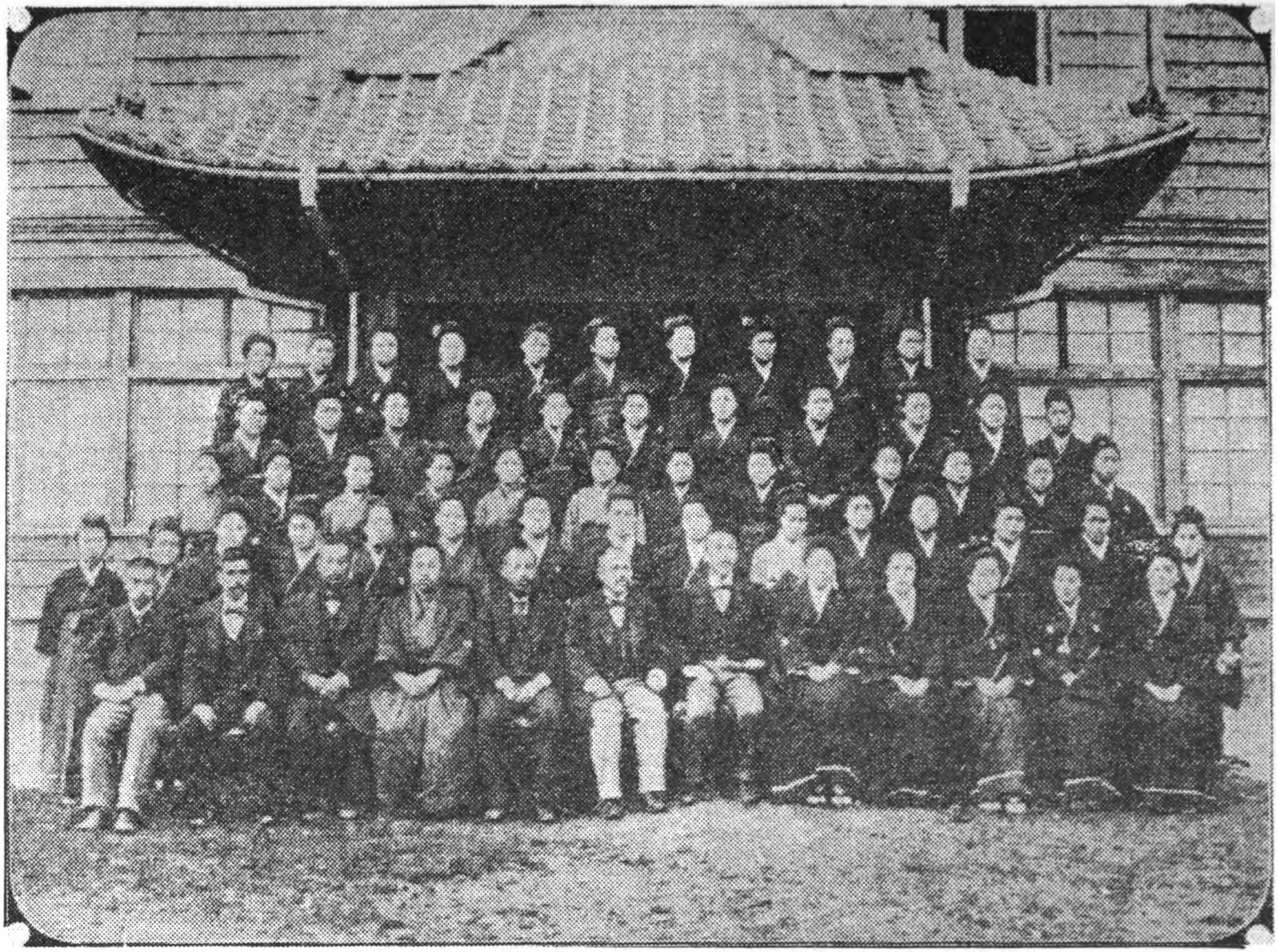
女鑑 第拾四年第貳號 目次

定價
一冊 金拾錢
六冊三ヶ月分 前金五拾七錢
十二冊半年分 前金壹圓拾錢
廿四冊一年分 前金貳圓拾錢
全國無遞送料

廣告料
五號活字廿三字詰一行 金參拾錢
半頁 金八圓
一頁 金拾貳圓
表紙一頁 金拾六圓
(色刷は特に御相談に應ず)

明治三十七年一月十四日印刷
明治三十七年一月十五日發行

編輯兼發行人 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 渡邊楽一
印刷人 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 河本龜之助
發行所 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 國光社
(電話新橋二六九三番)
(電話新橋 特 八八番)

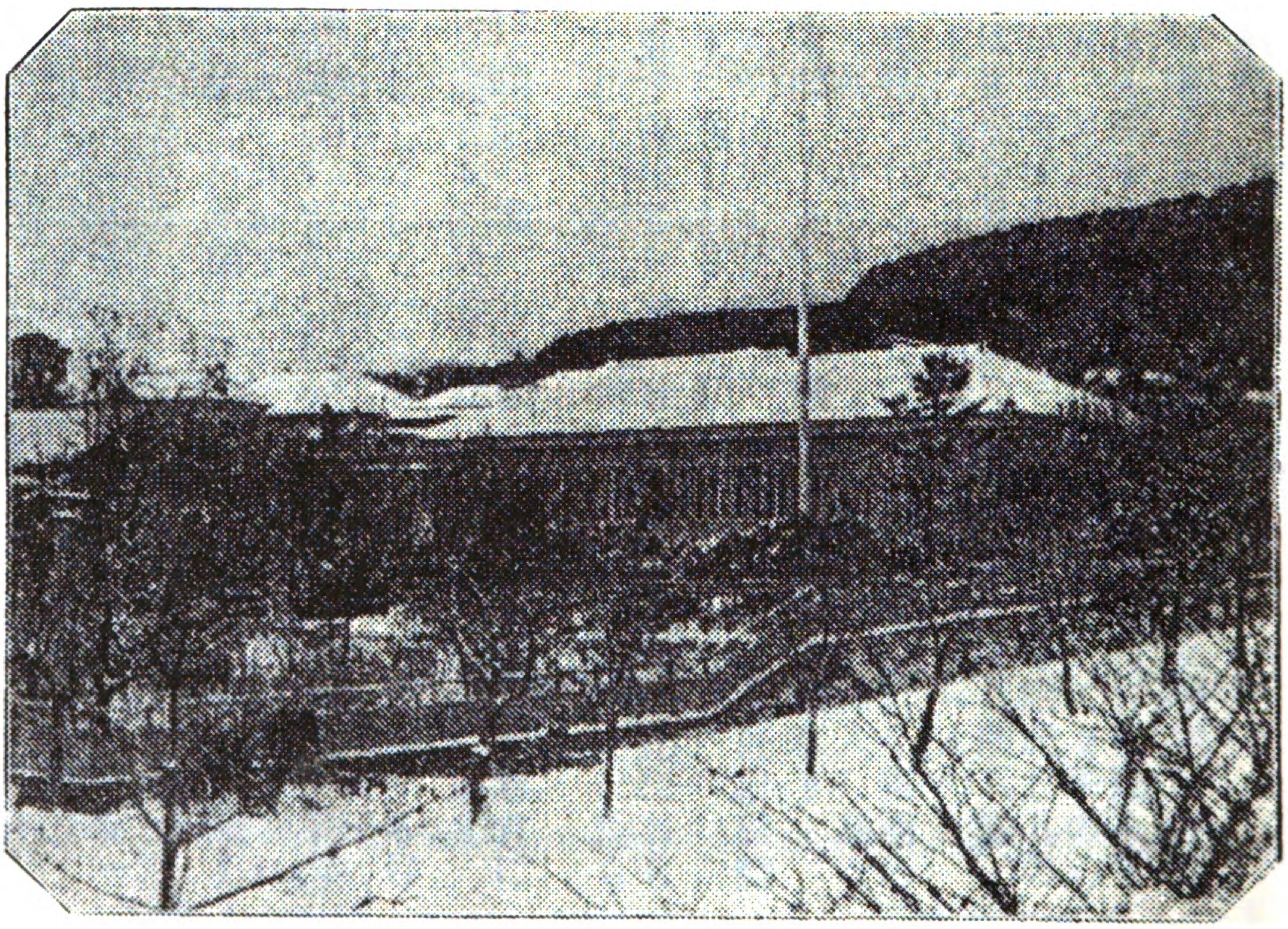


栃木高等女學校技藝專修科第一回卒業生

女鑑兼題投稿優等者



河田いし子



函館の雪景

國光社發行

明治三十七年 女生日記

定價　上製三十錢　並製二十錢　郵税各四錢

●各新聞好評●

◎東京日々新聞評　體裁の優美なる意匠の巧良なる一見女學生の好日記なるを認むるものは此日記なり卷中日々の欄外に天氣と寒暖とを記入するの場所を設け古今東西の金言、俚諺、詩歌、英和對譯等にして女子の心得となるべき材料を挿入し且つ女學校案内、女子職業案内等を附記し其の實益と興味とを兼ね供へたるは在來の日記と大に其選を異にする所貴婦、令孃、女學生等新年第一に机上に飾らるべきは恐くは此日記ならんか

◎都新聞評　築地國光社より發兌したる女生日記は日々の欄に古今東西の金言、俚諺、詩歌、英和對譯など女子の心得となるべきものを挿入し且女學校案内、女子職業案内等を附記しありな生に適したる好日記帳なり

◎二六新報評　這回築地國光社に於て發兌したる女生日記は意匠嶄新體裁優美にして一見如何にも女生に適したる好日記なり（以下略す）

◎日出國新聞評　（前略）實益と興味とを兼備せる事普通日記の比にあらず貴婦人、令孃女學生諸子の机上新年第一に飾らるべきは此優美に愛らしき日記なるべし

◎東京朝日新聞評　學校及び職業の案内其他女子須要の事項を其卷首に掲げ教訓行事等有益なる項目を記せり體裁優美女生及家庭の實用に適す

◎報知新聞評　意匠嶄新體裁優美にして一見如何にも女生に適したる好日記なり卷中日々の欄には古今東西の金言、俚諺、詩歌英和對譯など女子の心得となるべき種々の材料を精選して挿入し且女學校案内、女子職業案内等をも附記しありて實益と興味とを兼備せること普通日記の比にあらざれば貴婦人、令孃、女學生諸子の机上新年第一に飾らるべきは必ず此の優美なる可愛き日記なるべし

◎平民新聞評　日記も色々出來たが女學生日記は此冬の新案で是れは一アテ當てるであらう別に變つた事もないが可愛らしく善く出來て居る

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

幸田露伴編

再版



菊判袖珍總クロース製本頗優美

柳浪氏の鏡のうらは春曉鶯を聴き、素影氏の歸省は夏雲奇峯多く、煙村氏の傑作は秋風索寞、鶴伴氏の初陣は雪華濱紛たるに似たり、編者露伴子題していふ、これは不老門中の春夏秋冬なれば、見る人心ゆたかに欣賞し玉へかしと、以て本書の内容如何を知るべし。製本亦美麗にして殆んど珠玉の如し、机上の粧飾として燦然彩を發するを見ん。

飯沼珠城畫

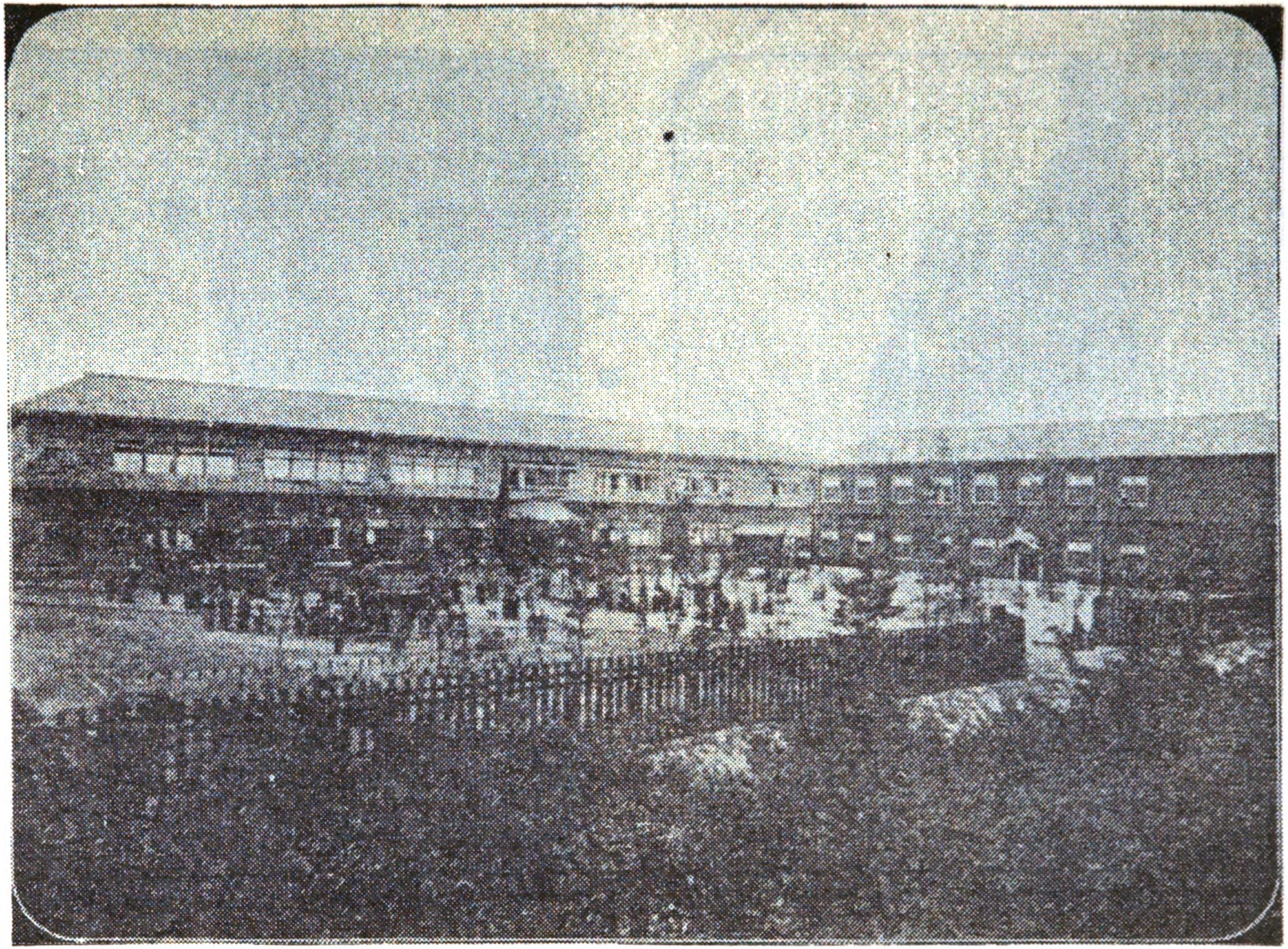
全壹册
定價五十錢
郵税金四錢

森鷗外著 ●長宗我部信親 新刊
菊判半切 定價拾錢 郵税二錢

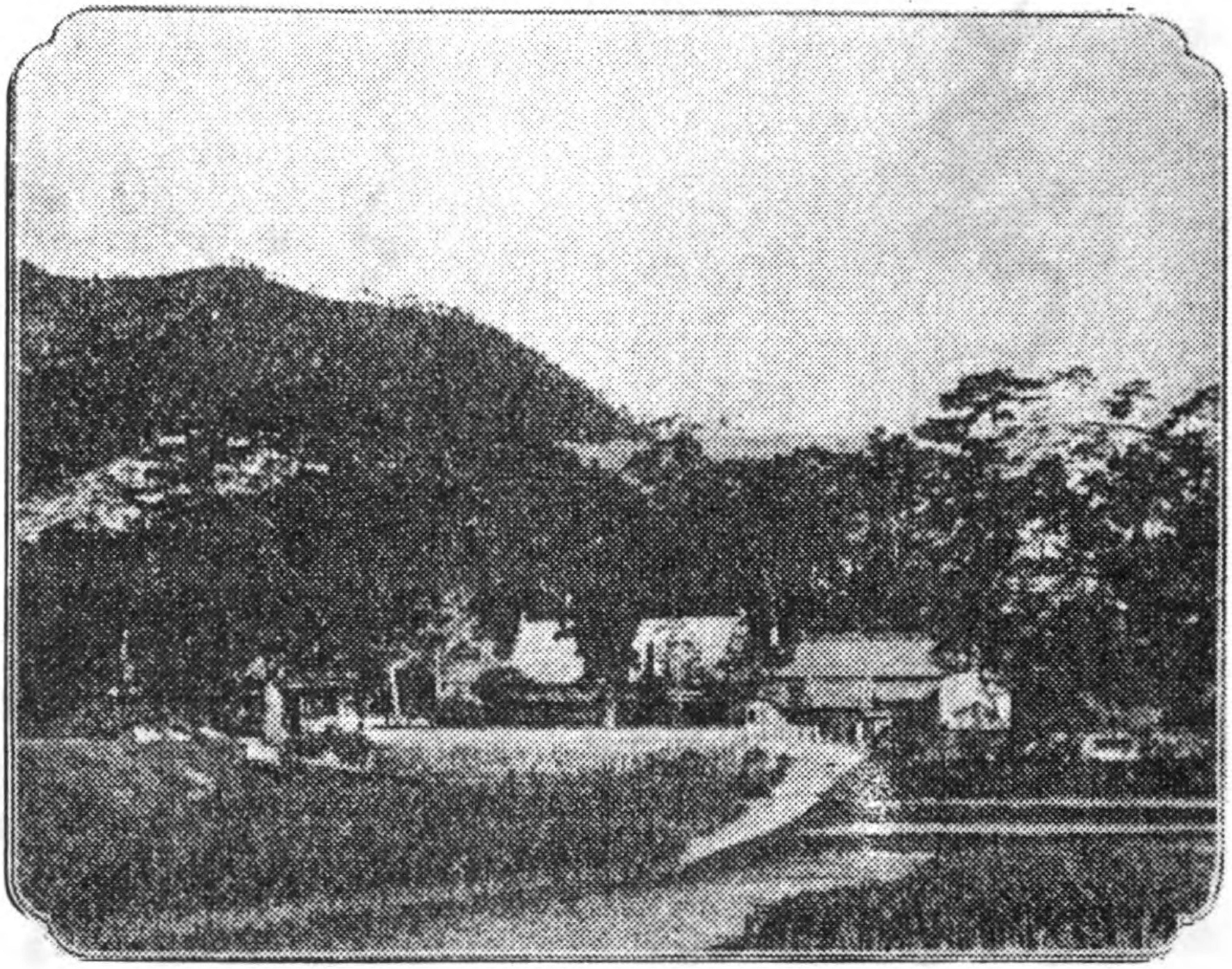
塚原澁柿著 ●山崎合戰 再版
菊判洋裝美本 定價卅九錢 郵税六錢

堀内新泉著 ●女樂師 再版
菊判洋裝美本 定價卅五錢 郵税六錢

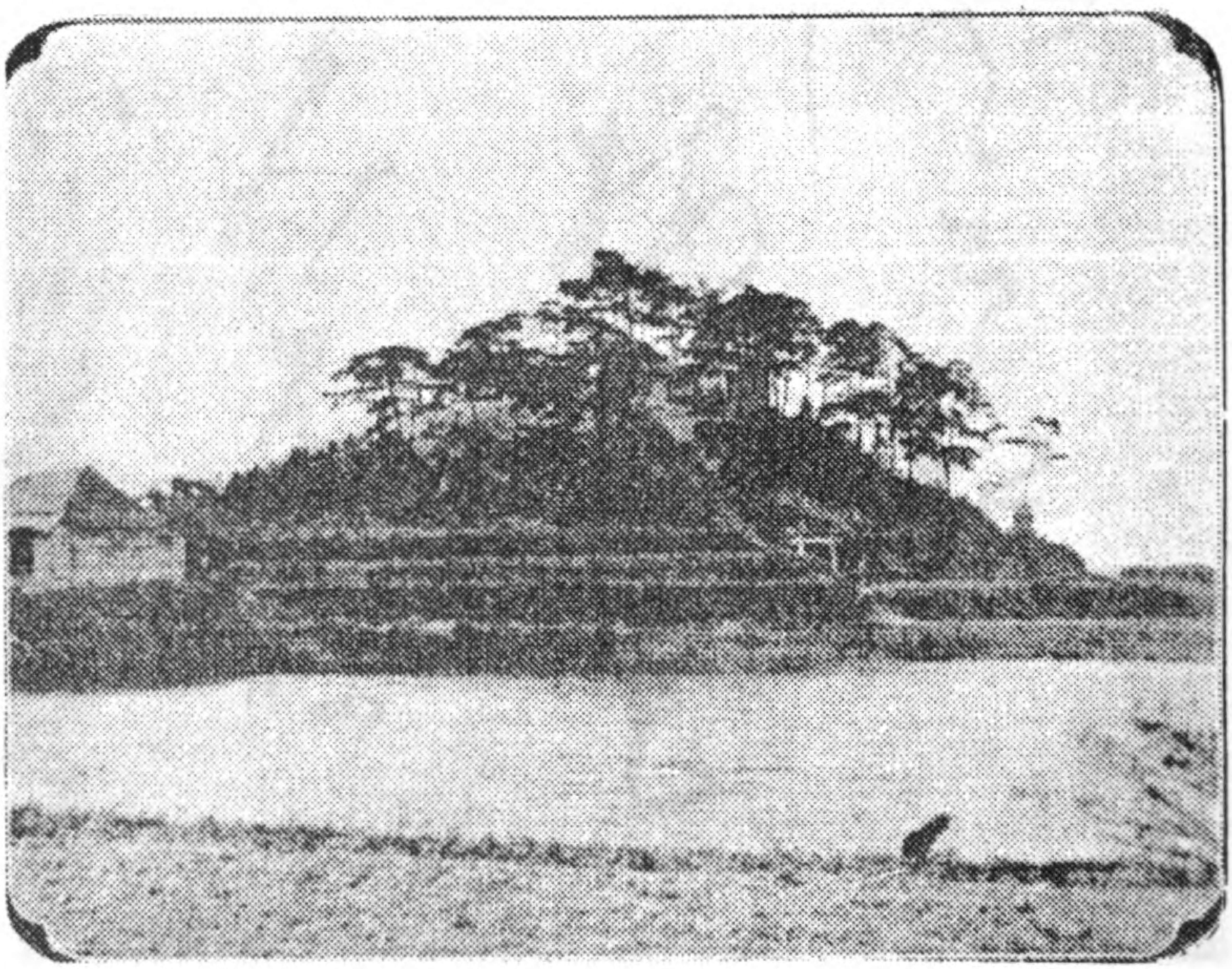
發兌元 東京築地 株式會社 國光社



長野縣伊奈高等女學校



讃岐富田丸山



同釋王寺

春の夜のやみは
あやなし梅乃花
いろこそ見えね
かやはかくるる

宮里三木枝子書

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

弘田正郎編

豪吟集

嗚呼断腸の詞、絶命の辭みな是れ當年の志士仁人が義を唱へ身を殺して國家の爲に灑ぎたる熱血の餘沫にあらざるなし之を秋風落日の前に吟じ之を寒月冷烟の中に誦じなば爲んぞ又毅然壯剛の勃然として起らざるを得んや

安部正人編纂

泥舟遺稿

定價四十五錢
郵税八錢

菊判洋装大和綴

高橋泥舟先生は幕末の名士にして、また明治昭代の逸民也。其の言行の超凡脱俗なる、誰れか嘆賞せざらむや、先生徴さるれども朝に仕へず赤貧に安んじて志を高うし、首陽の蕨、逕の菊を友として、詩文和歌に思を遣ること三十有餘年、本書は則ち其の全集にして、一面には先生の非凡の高士なるを窺ひ得べきと共に。又一面には幕末の眞事情を知るを得べし。加ふるに先生の經歷及び逸事等、編者先生に親炙して聞きしところのものを掲げたれば、先生の面目風采の躍如として紙上に顯はるゝを見るべし

村上濁浪譯述

鐵血宰相語錄

四六判洋装定價卅錢郵税四錢

●本書は公の一世に於ける逸事を編纂したるもの或は「ヂスレリー」と握手し或は「ゴルチヤコフ」と歡晤し或は「ナポレオン」を揶揄し忽ちにして熱火の修羅場となり忽ちにして樽俎の和局を現し忽にして閑[illegible]なる家庭となる其間躍如として公の風丰面目を描き出して餘あり

宮崎滔天著

三十三年の夢

●滔天とは何人ぞ彼は哲學者にして豪傑の資を兼備せる一種異様の人物也少壯家を辭し交遊十餘年或は支那に遊び或は暹羅に航し或は南洋に渡り其胸中抱懷する哲學的理想に據て直に地上に施かんと欲し畫策經營する所一二にして足らざる也唯憾む天時人事共に未だ可ならず菲島の獨立に參與して一蹶し風雲を南清に捲いて再蹶し半夜燈前無端失笑して回半生夢覺めて落花を閲ふと乃ち筆を呵して三十三年の經歷を叙す(定價卅三錢郵税八錢)

發兌元 東京築地 株式會社 國光社

女鑑

第拾四年
第貳號

女子問題の趨勢

一代の趨勢は、それ猶ほ濫觴の水の溪流となり、大河となりて、遂に蒼海に入るが如きか。激しては波瀾を揚げて急湍となるも一時なり、滙しては停滯して深淵となるも亦一時なり、一時はたゞ一時にして已むのみ、永久の狀態にはあらざるなり。源泉混々として晝夜を舍かざるものよりして、之を觀れば、波瀾や、深淵や、又何かあらむ。唯蒼茫たる大洋の我を歡待するを見るあるのみ。

夫れ女子問題は現今の我國に於て、多くの解決を試みられつゝある大問題なり。而して未だその結論の歸着するところを見ざるなり。故にその方針尙定まらずして、主義自ら動搖するを免かれざるも亦宜なり。或者は進歩の方針を執りて、叨りに歐米婦人の行爲に摸倣せんとし、或者は守舊の主義を固持して頑として日本在來の婦德を全うせんとし、或は折衷の說を唱へて、わが短

を捨て、彼れの長を取らんといふもありて、その説くところを異にし、枘鑿相容れざるの看ありといへども、女子問題に就きて熱心研究せんとするは、乃ち相同じ。

試みに一葉の新聞紙を把て、その記事を讀まば、女子問題に關する事項の、多きは數欄、少きも數十行の紙面を塡めざるはなし。而して是れ啻に都下の新聞紙のみならざるなり。大阪、京都の新聞紙のみにあらざるなり。地方の各新聞、片々たる雜誌小冊子の類に至るまで、殆んどみな轍を同うせざるはなきなり。

されば女子問題は、現今我國に於ける、最も大なる問題なるべく、一時流行の熱に浮かされて、譫語を吐くものさへあるは、偶々以てその大勢を卜知するに足るべき也。或新聞紙が當世百人娘の看版の下に、妙齡女子の肖像と經歷を掲げて理想女子の標本としたるが如き、或は淫靡なる小說を載せ、墮落女學生の半面を描きて、家庭の好讀本と稱へたるが如き、又は刑餘の惡婦を歡迎して、爭うてその消息を傳へ、世人の好奇心に投せんとしたるが如き、本氣の沙汰とは思はれ難き節なきにあらざるも、他の一面を見れば、家庭に關する諸々の問題を研究し、家政處理のことより、料理裁縫のことに至るまで、凡て說明を與へ、或は社交上に於ける女子の位置を論じ、或は各女學校を訪問し、其の學校の特質を究めて、女學生敎養の方法を明にするが如きは、女子の爲に貢献するところ寔に鮮少ならずといふべし。又た各書肆が近來發兌する書籍の中に於て、女子の二字を標榜せるもの、甚だ多くして、間々如何がはしきものあると共に、碩學大家の筆を

染むるものあるを見るが如きは、現代大勢の赴くところを證して餘ありといふべし。
思ふに此の趨勢は、歩一歩を進捗して、やうやく其の歸結を見るに至るべきは、恰も溪流の大河となり、大河の遂に海に入るとその趣きを同うせずんばあらざるべし、而してその歸結の幾年の後にあるべきやは、今之を豫知するに由なしと雖も、一たび此の時期に到達しなば、女子教育の主義、方針は自然に一定すると同時に、もろ〳〵の婦女問題が、明かに解決せらるべきは、決して疑を容るべからざるなり。
然りと雖も、日中すれば必ず傾き、物盛んなれば必ず衰ふとかや、女子問題が、斯の如く、國家及び社會問題よりも、熾盛を極めつゝ、進捗する間には、或は激して波瀾を揚げ、或は沈滯して深淵となるが如きことなきを期すべからず。例へば去る二十一年に於ける舞踏會時代の反動の如き、或は一昨年に於ける女學生攻撃當時の有樣の如きは、則ち是れにして、今日以後と雖も復びかゝることなきを保すべからざるなり。たゞ一盛一衰一浮一沈の中に、滔々たる時代の趨勢は、斷えず進歩して、遂に其の歸結を見ずんば休まざるなり。予輩は速に急湍を駛せ、深淵を過ぎて、大海に入り、女子問題の解決されて、眞正なる理想の、現代女子の上に現實せんことを希ふのみ。
この頃女子問題の將來に就きて、深憂を抱く人あり、來りて予輩に愚見を問はる、乃ち記して以て、答へに換ゆと云ふ。

論叢

高等女學校教育の要旨

第三高等女學校々長　小林盈

左の一篇は、客冬十一月一日東京府立第三高等女學校保護者懇談會の席上に於て、同校長小林盈氏がものせし演説の梗概を摘錄せしものにて女學生徒保護者一般の心得ともなる可きものなれば、玆に之を掲載す。

私は玆に本校の教育の趣旨に付て、殊に保護者諸君に御協力を願はねばならぬ事がありますから、其事に付て御話しする積りです、抑も女子も男兒と同じく人類であり、日本臣民の一員であるから、人類として、將た又日本臣民の一員として教育するには別に男兒と異なる事は無い筈です、けれど、今玆には單に女子の側面に付てのみの事を申上るのです。

先づ本校教育の第一義は、一口に約して云へば、女子らしき女子を養成するのが目的です、されば、溫順貞淑にして慈愛ある、本邦婦人の美德を發揮せしめんと務むるは勿論ですが、是の事たる、單に之を口にする計りでは、何等の効も有りませんから、苟くも此趣旨に反するの行爲は、嚴に之を矯正せん事を期するのです、其れで希くは、諸君の家庭に於ても、同一の趣旨を以つて、御監督あらん事を望みます、例へば父母長上の命令に從ふとか、弟妹を優さしく愛撫するとか、行儀作法を高尚にするなど云ふ事の如き、其實行の場合は、學校に於けるよりも、家庭に於ける方が多いのですから、常に之を監督して實行せしむるのは諸君の責任です。

併し乍ら、如何に温順貞淑を望み、如何に優美閑雅を欲するも、徒らに女子を抑壓して卑屈ならしめ又女子を以つて一つの飾り物たらしむるが如き、因循固陋の教育主義は、本校の斷じて排斥する所です故に女子と雖ども、十分の勇氣あらしむ可く、十分の耐忍力あらしむ可く、又た十分の進取的氣象あらしめねばなりません、彼の深窓に育ちたるお姫樣の如く、單に引込み一方で、人前に出ては口もロクには利けず、滊車に乘るにも、自分で切符も買へず、荷物も預け得ぬやうでは、今後の婦人として、活世界に處する事は出來ないのです、ソコデ私は、平素生徒諸子に向つて云ふのです、貴孃がたは、眞綿で包んだ玉のやうになければならぬと、其意は、十分に優さしく柔らかであつて、腹の底には堅い水晶のやうなものが無ければならぬと云ふのです、則ち優さしいからと云つて、若し己に無禮でも加ふるものゝある場合には、直ちに起つて之に抵抗する丈けの勇氣が無くてはならぬ、之を要するに、本校教育の趣旨は、お轉婆たらず卑屈ならざる其中間に於て、適當なる、中正なる、人物を作り上げたいと云ふのです、唯だ恐るゝのは、本校生徒の年頃は、動やもすれば生意氣になり易い頂上ですから、其等の點は、御互ひに十分の注意を加へねばならぬ事と思ひます。

次ぎに、本校教育の第二義は、有用にして、良妻たり、且つ賢母たるに足る可き人物を養成せん事を期するのです、抑も一家の盛衰は、一に主婦たるものゝ、家政の執り方如何に因るので、殊に子女の教育の如きは、主として母たるものゝ責任にあります、故に本校の教育は迂遠に失せず、如何にせば、人の妻として、人の母として、適當なる人物を作り得可きかと云ふ事に苦慮して居ります、されば、平素本校に於て、生徒に教室若しくは庭園の掃除をなさしむるが如き、是等は決して小使の手傳ひをなさしむるのではありません、他日自から襷掛けとなつて、勝手元又は坐敷のはき掃除を、好んでするやうな氣

國光社發行

明治三十七年 女生日記

定價　上製三十錢　並製二十錢　郵税各四錢

各新聞好評

◎東京日々新聞評　體裁の優美なる意匠の巧良なる一見女學生の好日記なるを認むるものは此日記なり卷中日々の欄外に天氣と寒暖とを記入するの場所を設け古今東西の金言、俚諺、詩歌、英和對譯等にして女子の心得となるべき材料を挿入し且つ女學校案内、女子職業案内等を附記し其の實益と興味とを兼ね供へたるは在來の日記と大に其選を異にする所貴婦、令孃、女學生等新年第一に机上に飾るべきは恐くは此日記ならんか

◎都新聞評　築地國光社より發兌したる女生日記は日々の欄に古今東西の金言、俚諺、詩歌、英和對譯など女子の心得となるべきものを挿入し且女學校案内、女子職業案内等を附記しあり女生に適したる好日記帳なり

◎二六新報評　這回築地國光社に於て發兌したる女生日記は意匠嶄新體裁優美にして一見如何にも女生に適したる好日記あり（以下略す）

◎日出國新聞評　（前略）實益と興味とを兼備せる事普通日記の比にあらず貴婦人、令孃女學生諸子の机上新年第一に飾らるべきは此優美に愛らしき日記なるべし

◎東京朝日新聞評　學校及び職業の案内其他女子須要の事項を其卷首に掲げ致訓行事等有益なる項目を記せり體裁優美女生及家庭の實用に適す

◎報知新聞評　意匠嶄新體裁優美にして一見如何にも女生に適したる好日記なり卷中日々の欄には古今東西の金言、俚諺、詩歌英和對譯など女子の心得となるべき種々の材料を精選して挿入し且女學校案内、女子職業案内等をも附記しありて實益と興味とを兼備せることと普通日記の比にあらざれば貴婦人、令孃、女學生諸子の机上新年第一に飾らるべきは必ず此の優美なる可愛き日記なるべし

◎平民新聞評　日記も色々出來たが女學生日記は此冬の新案で是れは一アテ當てるであらう別に變つた事もないが可愛らしく善く出來て居る

御注文の節は女鑑廣告に據りし旨御附記被下度候

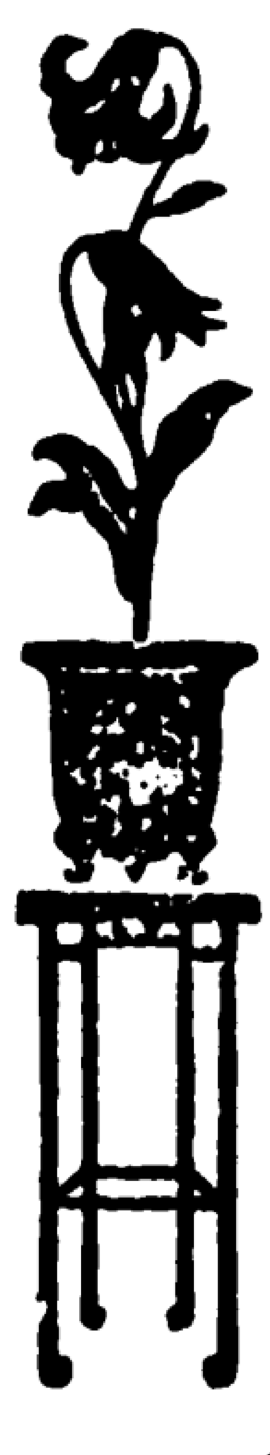
伯爵東久世通禧君題字
高等教育會々員 湯本武比古君序
東京感化院長高瀨眞卿講述

學校家庭

修身一夕話

菊版洋裝美本上製定價六十錢郵稅八錢
並製定價三十八錢郵稅六錢

本書は修身倫理の大綱を說き東西古今の偉人碩儒の事蹟を言文一致體に叙述せしものにて、趣味饒多近來稀有の好書なり



伯爵副島種臣題辭
從二位尾崎忠治題辭
鹿川宮內默藏著述

王學指掌

菊版總クロース全一冊
定價金壹圓郵稅金拾錢

王學の吾人心身の修養に大益あることは既に天下識者の認むる所にして。今更論辯を要せじ。而るに從來この學に志すもの。三輪執齋考定本の傳習錄に由りてこれを講究すと雖。奈何せむ該書は雜錄體にして。初學この學の統緒を繹ぬるに便ならず。本書は著者が古傳習錄及文錄等より。この學の講究に最も必要なる條項を擇び。系統的にこれを編纂し。部門を道體學術の二類に分ち。その內又各目を種別し。これが義解と評語とを施したれば。一讀の下直ちにその要領と下手の方法を理會するを得べし。且つ開卷には王子の本傳を掲げて。子の人となりとその事功の詳なるを記す實に近世王學を修むるもの丶一大好書なり。世の志士幸に一讀の榮を賜へ

內藤耻叟序 文學博士栗田寛著

天朝正學

菊判洋裝 定價三十五錢 郵稅四錢

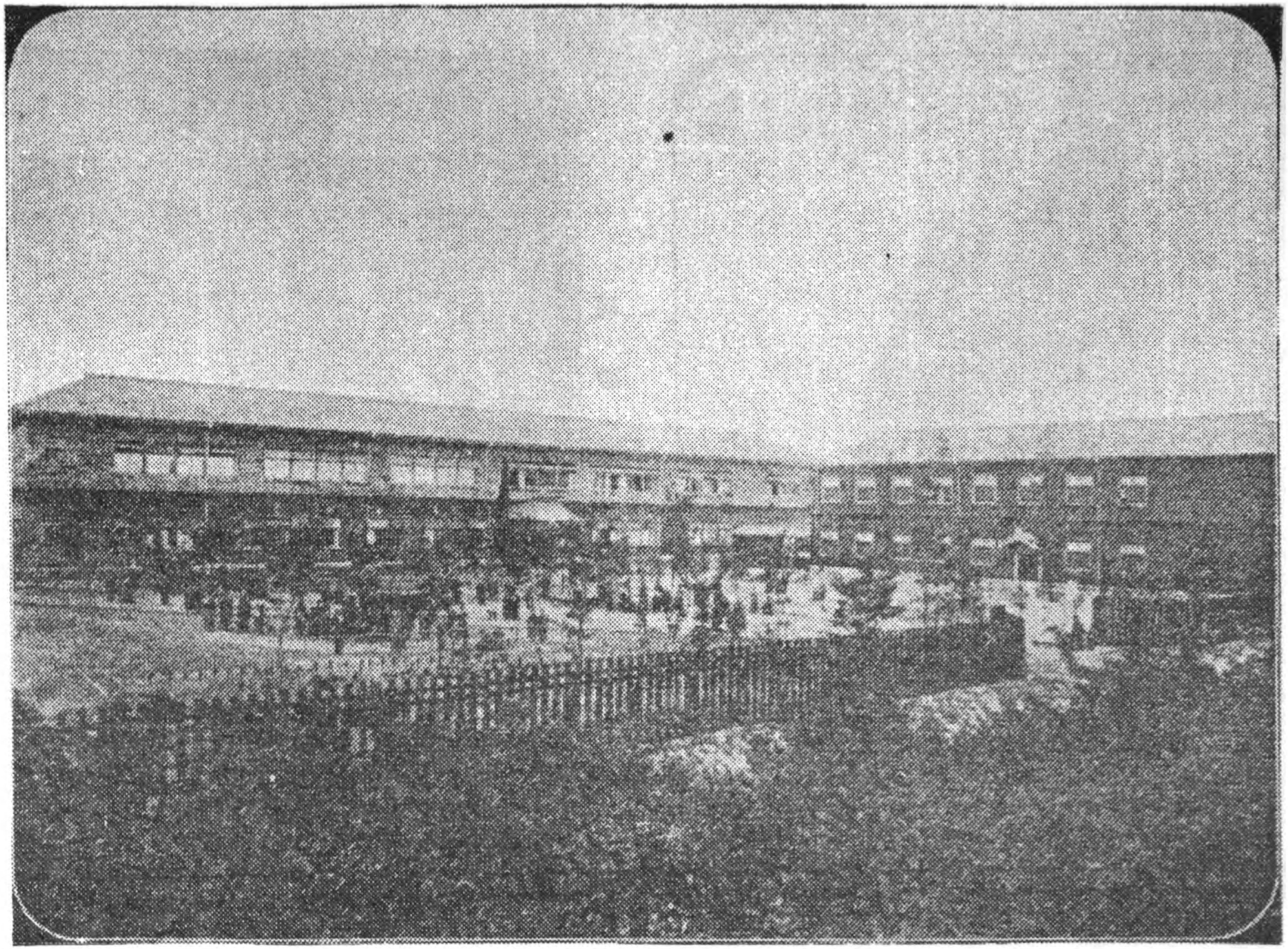
紫洲甲秀輔編

德川の孔明

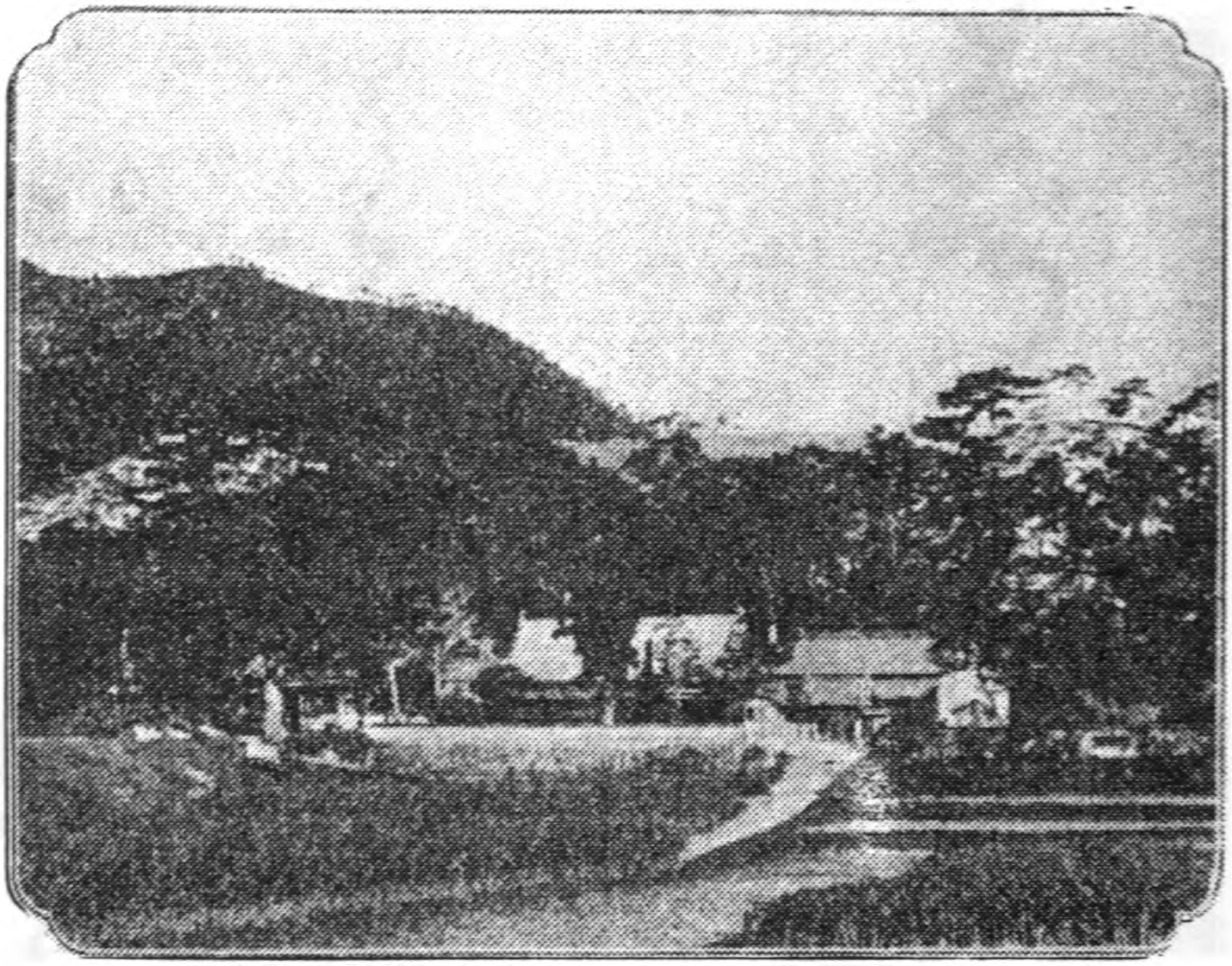
定價郵稅共十五錢

發行所 東京築地二丁目 國光社

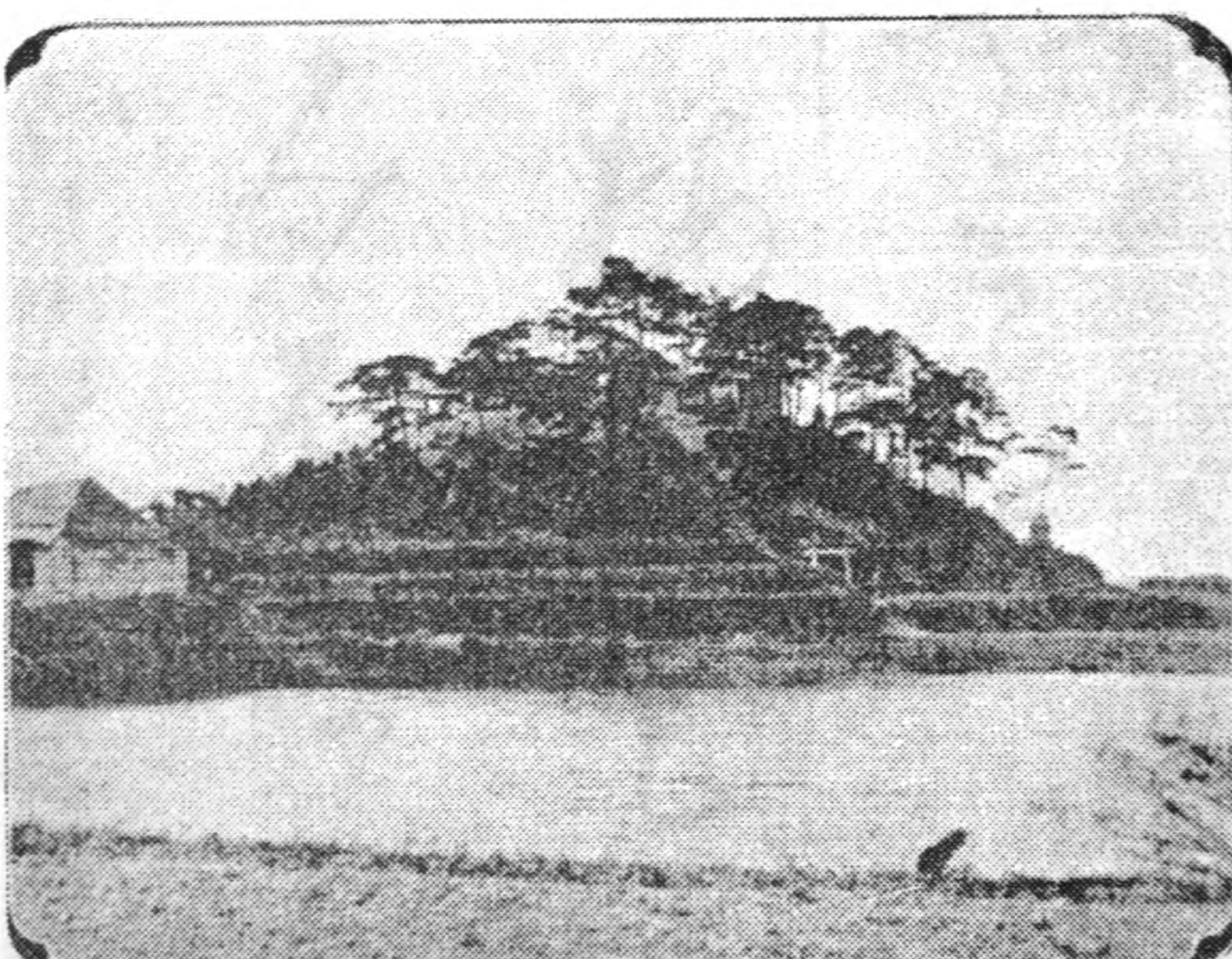
御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候



長野縣伊奈高等女學校



讃岐富田丸山



同釋王寺

春の夜のやみは
あやなし梅の花
いろこそ見えね
かやはかくるゝ

宮里三木枝子書

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

塚原澁柿園著

歴史小説

小牧合戰

再版

小堀鞆音 鏑木淸方 畫

菊判洋裝定價五十五錢郵稅十錢

豐太閤を龍に譬ふれば東照公は以て虎に比すべし、龍吟すれば雲起り、虎嘯けば風生ず、小牧山大合戰は此の獰龍猛虎の拏攫なり、山岳震撼して波濤洶湧せるの壯觀は決して他人の能く萬分が一をも寫し得る所にあらず、塚原澁柿先生學問該博にして最も近古の戰史に精しく豐臣德川兩公の事蹟に深く意を注ぎ闡幽顯微の功一にして足らず、前古未發の秘密を探索し以て正史の遺漏を補ふ、特に長久手の大殺を以て其原因嬋娟たる一位の美人にありとせる如き奇想天外より來れるものと謂ふべし、且其口繪は目下歷史畫界の泰斗と仰がるゝ小堀鞆音氏挿畫は同鏑木淸方氏の筆になるもの、文章と相須て英雄美人の眞面目を發揮せり。

((各新聞大好評を博す))

七版

紅塵庵俗禪譯

獄之花

彩色濃美口繪挿入
總クロース菊版美本
正價金五十錢
郵稅金八錢

三版

山崎忠和君

三版

文久物語

菊判洋裝
定價廿八錢
郵稅六錢

發兌元 東京築地 株式會社 國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

弘田正郎編

豪吟集

嗚呼斷腸の詞、絕命の辭みな是れ當年の志士仁人が義を唱へ身を殺して國家の爲に濺ぎたる熱血の餘沫にあらざるなし之を秋風落日の前に吟じ之を寒月冷烟の中に誦じなば爲んぞ又豪懷壯圖の勃然として起らざるを得んや

村上濁浪譯述

鐵血宰相語錄

四六判洋裝定價卅錢郵稅四錢

●本書は公の一世に於ける逸事を編纂したるもの或は「ナスレリー」と握手し或は「ゴルチヤコフ」と歡晤し或は「ナポレオン」を揶揄し忽ちにして熱火の修羅場となり忽ちにして樽俎の和局を現し忽にして閑[illegible]なる家庭となる其間躍如として公の風采面目を描き出して餘あり

安部正人編纂

泥舟遺稿

定價四十五錢 郵稅八錢

菊判洋裝大和綴

高橋泥舟先生は幕末の名士にして、また明治昭代の逸民也。其の言行の超凡脫俗なる、誰れか嘆賞せざらむや、先生徵さるれども朝に仕へず赤貧に安んじて志を高うし、首陽の蕨、遶るの菊を友として、詩文和歌に思を遣ること三十有餘年、本書は則ち其の全集にして、一面には先生の非凡の高士なるを窺ひ得べきと共に。又一面には幕末の眞事情を知るを得べし。加ふるに先生の經歷及び逸事等、編者先生に親炙して聞きしところのものを揭げたれば、先生の面目風采の躍如として紙上に顯はるゝを見るべし

宮崎滔天著

三十三年の夢

●滔天とは何人ぞ彼は哲學者にして豪傑の資を兼備せる一種異樣の人物也少壯家を辭し交游十餘年或は支那に遊び或は暹羅に航し或は南洋に渡り其胸中抱懷する哲學的理想に據て直に地上に施かんと欲し[illegible]する所一二にして足らざる也唯憾む天時人事共に未だ可ならず菲島の獨立に參畫して一蹶し風雲を南清に捲いて再蹶し半夜燈前無端失笑して因半生夢覺めて落花を懷ふと乃ち筆を呵して三十三年の經歷を叙す（定價卅三錢郵稅八錢）

發兌元 東京築地 株式會社 國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

水主天姚著

千古之冤魂 石田三成 及其時代之形勢

四六判洋裝定價卅錢郵稅四錢

勝てば即ち官軍負くれば即ち賊のみ。理非往々にして轉倒し、曲直或は顛逆す。天道漠々、世事茫々慨嘆せざるべけんや。三成六條河畔の露と消えしより三百有餘年に及ぶもその冤枉は依然として、伸雪する能はざるなり。著者乃ち、明快痛切の筆を操て當年の形勢を描出し、東西の兩雄たる家康と三成とを較論批評するや。恰も法官の刑を斷ずるが如く、毫も假借宥恕を須ゐず、一褒一貶、一黜一陟の間、文舞ひ句踊て千古の功罪を眼前に見るの思ひあり、汽車關ヶ原を過ぎて、欝葱たる松尾南宮の諸山を望みし者、此書を繙いて當年の事蹟を思はゞ、眦裂け、腸斷たざれば已まざるべし、蓋し近來の快著なり。



在法科大學 太田七郎著

江川坦庵

四六判 和裝美本 寫眞銅版數葉 壹部定價 金參拾錢 郵稅四錢

著者は曾て『帝國文學』に「岳南の奇才」と歌はれし。狩水生。主人は幕末の碩儒安積艮齋をして「文武兼備明略超倫」と驚嘆せしめし徳川武士。舞臺は近世史中最も興味饒き安政嘉永の幕府時代一清灑の文警拔の識一韮山代官の傳記として讀むも可一部の幕末史として見るも可、新文明の發達史として見るも亦可なり。道義頽敗して士氣を挑へる今日世人若し武士道の理想的人物を知らんと欲せば――學生若し日本固有の模範的武士に泰西的紳士の品格を加味したる崇拜者を求めんと欲せば――婦人若し徳川武士の理想的家庭を知らんと欲せば此の書は決してパンを求むるものに小石を與ふるものにあらざる也。

發兌元

東京京橋區築地二丁目

株式會社 國光社

女鑑
第拾四年
第貳號

女子問題の趨勢

一代の趨勢は、それ猶ほ濫觴の水の溪流となり、大河となりて、遂に蒼海に入るが如きか。激しては波瀾を揚げて急湍となるも一時なり、滙しては停滯して深淵となるも亦一時なり、一時はたゞ一時にして已むのみ、永久の狀態にはあらざるなり。源泉混々として晝夜を舍かざるものよりして、之を觀れば、波瀾や、深淵や、又何かあらむ。唯蒼茫たる大洋の我を歡待するを見るあるのみ。

夫れ女子問題は現今の我國に於て、多くの解決を試みられつゝある大問題なり。而して未だその結論の歸着するところを見ざるなり。故にその方針尙定まらずして、主義自ら動搖するを免かれざるも亦宜なり。或者は進步の方針を執りて、叨りに歐米婦人の行爲に摸倣せんとし、或者は守舊の主義を固持して頑として日本在來の婦德を全うせんとし、或は折衷の說を唱へて、わが短

を舍て、彼れの長を取らんといふもありて、その說くところを異にし、枘鑿相容れざるの看ありといへども、女子問題に就きて熱心研究せんとするは、乃ち相同じ。

試みに一葉の新聞紙を把て、その記事を讀まば、女子問題に關する事項の、多きは數欄、少きも數十行の紙面を塡めざるはなし。而して是れ啻に都下の新聞紙のみならざるなり。大阪、京都の新聞紙のみにあらざるなり。地方の各新聞、片々たる雜誌小冊子の類に至るまで、殆んどみな轍を同うせざるはなきなり。

されば女子問題は、現今我國に於ける、最も大なる問題なるべく、一時流行の熱に浮かされて、譫語を吐くものさへあるは、偶々以てその大勢を卜知するに足るべき也。或新聞紙が當世百人娘の看版の下に、妙齡女子の肖像と經歷を掲げて理想女子の標本としたるが如き、或は淫靡なる小說を載せ、墮落女學生の半面を描きて、家庭の好讀本と稱へたるが如き、又は刑餘の惡婦を歡迎して、爭うてその消息を傳へ、世人の好奇心に投せんとしたるが如き、本氣の沙汰とは思はれ難き節なきにあらざるも、他の一面を見れば、家庭に關する諸々の問題を研究し、家政處理のことより、料理裁縫のことに至るまで、凡て說明を與へ、或は社交上に於ける女子の位置を論じ、或は各女學校を訪問し、其の學校の特質を究めて、女學生敎養の方法を斷にするが如きは、女子の爲に貢献するところ寔に鮮少ならずといふべし。又た各書肆が近來發兌する書籍の中に於て、女子の二字を標榜せるもの丶甚だ多くして、間々如何がはしきものあると共に、碩學大家の筆を

染むるものあるを見るが如きは、現代大勢の赴くところを證して餘ありといふべし。

思ふに此の趨勢は、步一步を進捗して、やうやく其の歸結を見るに至るべきは、恰も溪流の大河となり、大河の遂に海に入るとその趣きを同うせずんばあらざるべし、而してその歸結の幾年の後にあるべきやは、今之を豫知するに由なしと雖も、一たび此の時期に到達しなば、女子教育の主義、方針は自然に一定すると同時に、もろ〳〵の婦女問題が、明かに解決せらるべきは、決して疑を容るべからざるなり。

然りと雖も、日中すれば必ず傾き、物盛んなれば必ず衰ふとかや、女子問題が、斯の如く、國家及び社會問題よりも、熾盛を極めつゝ、進捗する間には、或は激して波瀾を揚げ、或は沈滯して深淵となるが如きことなきを期すべからず。例へば去る二十一年に於ける舞踏會時代の反動の如き、或は一昨年に於ける女學生攻擊當時の有樣の如きは、則ち是れにして、今日以後と雖も復びかゝることなきを保すべからざるなり。たゞ一盛一衰一浮一沈の中に、滔々たる時代の趨勢は、斷えず進步して、遂に其の歸結を見ずんば休まざるなり。予輩は速に急湍を駛せ、深淵を過ぎて、大海に入り、女子問題の解決されて、眞正なる理想の、現代女子の上に現實せんことを希ふのみ。

この頃女子問題の將來に就きて、深憂を抱く人あり、來りて予輩に愚見を問はる、乃す記して以て、答へに換ゆと云ふ。

論叢

高等女學校教育の要旨

第三高等女學校々長　小林盈

左の一篇は、客冬十一月一日東京府立第三高等女學校保護者懇談會の席上に於て、同校長小林盈氏がものせし演説の梗概を摘錄せしものにて女學生徒保護者一般の心得ともなる可きものなれば、茲に之を掲載す。

私は茲に本校の教育の趣旨に付て、殊に保護者諸君に御協力を願はねばならぬ事がありますから、其事に付て御話しする積りです、抑も女子も男兒と同じく人類であり、日本臣民の一員であるから、人類として、將た又日本臣民の一員として教育するには別に男兒と異なる事は無い筈です、けれど、今茲には單に女子の側面に付てのみの事を申上るのです。

先づ本校教育の第一義は、一口に約して云へば、女子らしき女子を養成するのが目的です、されば、温順貞淑にして慈愛ある、本邦婦人の美德を發揮せしめんと務むるは勿論ですが、是の事たる、單に之を口にする計りでは、何等の効も有りませんから、苟くも此趣旨に反するの行爲は、嚴に之を矯正せん事を期するのです、其れで希くは、諸君の家庭に於ても、同一の趣旨を以つて、御監督あらん事を望みます、例へば父母長上の命令に從ふとか、弟妹を優さしく愛撫するとか、行儀作法を高尚にするなど云ふ事の如き、其實行の場合は、學校に於けるよりも、家庭に於ける方が多いのですから、常に之を監督して實行せしむるのは諸君の責任です。

併し乍ら、如何に温順貞淑を望み、如何に優美閑雅を欲するも、徒らに女子を抑壓して卑屈ならしめ又女子を以つて一つの飾り物たらしむるが如き、因循固陋の教育主義は、本校の斷じて排斥する所です故に女子と雖ども、十分の勇氣あらしむ可く、十分の耐忍力あらしむ可く、又た十分の進取的氣象あらしめねばなりません、彼の深窓に育ちたるお姫樣の如く、單に引込み一方で、人前に出ては口もロクには利けず、滊車に乘るにも、自分で切符も買へず、荷物も預け得ぬやうでは、今後の婦人として、活世界に處する事は出來ないのです、ソコデ私は、平素生徒諸子に向つて云ふのです、貴孃がたは、眞綿で包んだ玉のやうになければならぬと、其意は、十分に優さしく柔らかであつて、腹の底には堅い水晶のやうなものが無ければならぬと云ふのです、則ち優さしいからと云つて、若し己に無禮でも加ふるものゝある場合には、直ちに起つて之に抵抗する丈けの勇氣が無くてはならぬ、之を要するに、本校教育の趣旨は、お轉婆たらず卑屈ならざる其中間に於て、適當なる、中正なる、人物を作り上げたいと云ふのです、唯だ恐るゝのは、本校生徒の年頃は、動やもすれば生意氣になり易い頂上ですから、其等の點は、御互ひに十分の注意を加へねばならぬ事と思ひます。

次ぎに、本校教育の第二義は、有用にして、良妻たり、且つ賢母たるに足る可き人物を養成せん事を期するのです、抑も一家の盛衰は、一に主婦たるものの、家政の執り方如何に因るので、殊に子女の教育の如きは、主として母たるものゝ責任にあります、故に本校の教育は迂遠に失せず、如何にせば、人の妻として、人の母として、適當なる人物を作り得可きかと云ふ事に苦慮して居ります、されば、平素本校に於て、生徒に教室若しくは庭園の掃除をなさしむるが如き、是等は決して小使の手傳ひをなさしむるのではありません、他日自から襷掛けとなつて、勝手元又は坐敷のはき掃除を、好んでするやうな氣

風を養成したいからです、故に家庭に於いても、同樣の趣旨を以つて、朝夕適度に家事を手傳はせらる事は、本校の最も望む所です、自分の食膳を、其の儘突き出して學校に出掛けると云ふ事でなく、自ら自分の膳椀の始末をなし、自ら自分に辨當を詰て出掛くるやうにさせたいのです、現今學校に於て修學する時代は、學校の事のみを專門にさせて、家事などは手傳はせぬ方が宜しいなどゝ考へらるゝ家庭もあるやうですが、是は他日人の妻たり、母たる女子をしつくるには、適當の考へとは思はれません。又節儉の美德を養ふと云ふ事は、殊に注意を要すべき事です、されば服裝などは、十分に質素ならしめ成る可くは一般に綿服を着するやうにさせたいのですが、處によつては、紬位ゐは差支へないとして、餘り贅澤に傾むくのは嚴禁したいものだと思ひます諸君の家庭の程度よりすれば、其等以上のものを着用せしむるのが相當かも知れませぬが、修學中は家庭相應と云ふ事よりも、生徒たる身分として適當なる程度に止めたいのです、殊に流行を追ふなど云ふ事は甚だ惡るい、假令へば、肩掛けとか、靴とか、髮飾りなんどは、折り〳〵流行が變はるやうですが是等は寧ろ流行に後くれがちと云ふ位ゐにして居れば宜しいのです、斯く云へばとて、女子の事ですから、身始末則ち身嗜みと云ふ事を、疎そかにせよとは望みません、身始末は適當にあつさりと、成る可く上品なる裝ひをなす事が望ましいのです、例へば髮の如きも鬢を長くひき出し、油をゴテ〳〵と附けて結ふのは好くありませんが、さればと云つて、櫛の歯も入れず、蓬々とさせて居るのは、女子として疎野の譏りを免れませぬ則ち華美ならず疎野ならざる中間に於て、質素にしてしかも上品であると云はるゝやうにさせたいのです、又學校用品の買入れにしても、若し濫費するではないかと見認めらるゝ場合は、適當に取締まられん事を望みます、其他裁縫用の材料の如きも、動ともすれば贅澤に流れ易いやうですが、是等に付ても御注意を願ひます。

次ぎに又、本校敎育の第三義として、殊更らに申上げたいのは體育の事です、抑も身體の健康を要するのは、男女共に異なる事はありませんが、殊に一家の主婦たるものが、若し不健康であつたなら、啻に本人の不幸なるのみならず、一家族の不幸は此上もない事で、詮ずる所、其の家庭の和暢春の如くなるも、陰欝秋の如くなるも、唯だ其の主婦の健否如何による事は、世間に於て實際に能く目擊する所です加之虛弱なる母胎より、健康なる子女の生るゝ道理はありませんから、子孫を健全ならしめんと欲せば、必ず先づ其母たる人の身體を健康ならしむるの必要があります、殊に又子女の健否は其父よりも反つて母に似る事が多いやうですから、今日の女子體育は、未來我國民の體格上に、大關係を及ぼすものと云はねばなりません、故に目下體育の必要は男兒よりも反つて女子の方が切實と云つても宜しいかと思ひます、されば本校に於ては、最初より此事を確信して、大ひに運動を奬勵して居ります、諸君に於ても何卒其旨を諒せられて、御協力を願ひます、併しながら物には各々弊害の相伴ふもので、運動を十分にすれば、活潑にして快活なる、勇氣あつて耐忍力に富める婦人を作り出す事は出來ますれど、其弊や過まつてお轉婆となるの恐れがありますから此點に付ては、御互ひに十分の注意を拂はねばならぬ事と思ひます、故に本校に於ては、生徒に運動をなさしむるにしても、運動其者は十分に活潑ならん事を要しますも、相當に規律を守らせ、運動の前後に於ける禮儀作法等は、嚴格に守らする事を務めて居ります、又運動過度と云ふ事は、恐る可き害を來たすものですから、學校に於ては其れと見認むる時は、怠らず注意を與へて居りますが、此點に付ては家庭に於ても十分の御注意を願ひます、殊に特種の病氣あるもの、假令へば心臟が惡るいとか、脚氣があるとか云ふやうなものは、運動を全然禁止するの必要がありますから、其等の事の判然したものは、學校でも體操課を休ますやうにして居りますが、

多數の事ですから、間には手落ちの無いとも云へません、故に是等の病氣のある向きは、直ぐに保護者より御申出らるるやうに致したいものです。

其他尚ほ一二の希望を述べますれば、學科復習の事です、學校から歸つて後、既習の學科を時々復習するの必要なるは勿論ですが、之も多くて一日に一時間か、若しくは二時間位ゐに止めたいものです、又學校の課業以外に、種々の事を稽古せしむる向きもあるやうですが、是等は餘り過度に失しない方が宜しからふと思ひます、一日の中に、琴も習はせ、生花も習らはせ、茶も習らはすると云ふやうに、一時に多くの事を敎へ込むのは宜しくありません、又一つ婆心ながら申上げて置きたいのは、本校生徒の年齢は最も大切な時期であつて、斯の妙齢の時期に於ける評判は、實に一生の幸不幸の岐るゝ分岐點でありますから、保護者諸君に於ても、品行上の事に付ては、何卒十分の御注意ありたいもので、若し一旦面白からぬ評判を取るやうな事があつては、其者の不幸は申す迄も無く、兩親は勿論延いては本校の名譽にも係はる事となりますから、決して等閑にされません、故に他に信書を發するとか、又は他より信書を受取るとか云ふ場合には、家庭に於ては必ず父母尊族の承認を得せしむるやうにしたいものです、其他夜間の獨り歩きなどは嚴禁すべき事で、又學校の往復なども、成る可くは學友同伴するやうにしたらば、宜しからふと思ひます。

之を要するに本校敎育の趣旨は、德育に於てはお轉婆たらしめず、卑屈ならしめざる範圍内に於て、女子らしき女子を作る事を目的とし、智育に於ては、他日有用なる良妻たり賢母たるに足る可き人物を養成する事を務め、體育に於ては、女德を害せず、過度に陷らざる區域に於て身體を健康ならしむる事を務むるので、是が則ち本校敎育の三大趣旨ですから保護者諸君に於ても此點を十分に御承知あつて、内外相應じて力を一にするやうにしたならば、敎育上著るしき効果を呈する事となるであらふと思ます。

女子は教育學を學ばざるべからず

阿多廣介

女子は自然の教育者なり、則ち教育者たらざるべからざる義務を有す、孔子も釋迦も女子の產みし所にして、孟母三遷の教は、人口に膾炙せる教育談なり然るに世の婦女にして教育の眞義を解釋せるもの少く、世に賢婦人と稱せらるゝもの、若くは俊才名士の母たるものと雖ども唯無意識に子女を養育したるものにして、教育の理法を明かにし、之れを實行して奏功したるものにはあらず、畢竟兒童の天性と、家庭と、社會の境遇とが影響して生じたる偶然の結果と謂はざるべからず、總て事業をなすに當りて偶然と僥倖とは、世の發達せざる時代には行はるべきも、文明の時代に於ては、萬般の事皆必ず科學の理法に基き、原因結果を明かにし、手段方法を講じ、苟も偶然と僥倖とに依賴すべきものにあらず、されば教育の道も自ら理法の存するものなれば、教育の天職と義務とを有せる女子の、必ず教育學を研究して以て、其の子女養育上に應用するの覺悟なかるべからざるなり。

更らに詳說すれば、教育とは兒童の身體と德性と知識とを完全に發達せしむることにして、其目的を達するには、第一父母は其の心身共に完全に成熟するを要し、第二には父母は兒童の心身發育の狀態を知悉し、第三には父母は兒童の心身發育の狀態に應じて、之に適合すべき手段方法を施さゞるべからず、而して此の三つの者を研究するに、第一人世の目的を定むる倫理學を講じ、第二に人間の身體と精神の狀態を知る生理學と心理學を究め第三に智識を啓發すべき教授學を學ばざるべからずと雖ども之れ等の眞理を知悉するは、專門學者にあらざれば、一朝一夕に成し得べきにあらざるのみならず、又實用上必須にあらざるを以て、之等の學科を總合して、一の

科學となしたる教育學を研究するときは、自ら教育の理論と實際とを知り、而して之れを實地子女の教育上に應用するときは、即ち始めて文明の母たり、賢婦人たるの道に達するを得ん。

然るに我邦女學校の狀態を調査するに、女子の本分たるべき子女教育の方法を教ふべき教育學を課したる學校は、極めて少數なりしを以て、余は多年或は口にし、或は筆にして、高等女學校に教育學を必須科として加ふべきを唱道したりしが、漸く昨年の文部省令によりて、其素志を達したり、然れども昨年中に於ては、未だ多く之れを實施したるものあるを認めず、之れ授業時間の配當に困難なりしと、教師に適任者なきと、及び適當なる教科書なきとに職由したるものなるべしと雖も、女子教育の大任を負ふ所の校長は、困難を排し、或は他の學科の授業時間を減ずるとも、生徒の卒業するまでには、必ず此學科の一端にても學ばしめ置かざるべからず、而て其の教師の如きは現在の高等女學校教師にして師範學校に於て學びたる其學力にて充分なるのみならず、高等師範學校卒業生其他教育學の免許狀を得たるものも少からざれば、其内より適任者を撰拔すれば茲足る譯けなり、教科書は女子用として編纂したるもの皆無なりしも、既に一二は出版されたるものあり、されば各高等女學校に於ては、必ず來年度より此の學科を必須科として課せざるべからず。

斯くて女子に教育學の必要なることは、高等女學校に必要なるのみならず、一般の婦人たり母たるもの必ず研究せざるべからざるものなるが、既に人に嫁し、又は職業に從事せるものは教師に就きて學ぶの餘裕なかるべきも、適當なる教育書を購ふて一讀するときは己れの子女教育上必ず釋然たることを自ら發見するに至るべし。

況んや又今日は女子も、相當の職業を求めざるべからざる譯けにて、而して中等以上の女子の職業としては、小學校教員たるは尤も高尚にして、又其天性に適するのみならず、社會も亦尤も歡迎しつゝある

ことなれば、高等女學校以上の學力あるものが、教育學を講究するときは、直ちに正教員として採用するに至るは明にして文部省普通學務局長たる澤柳氏の如きも實際前號の女鑑に於て其奬勵をなしたるにあらずや、されば女子に教育學を講究せしむるは實に一擧兩得の策なり、之れ余が女子は必す教育學を學ばざるべからざることを唱道する所以なり。





史談

英國士道物語の著者 クレーク夫人

落花生

英國士道物語即ち紳士ジョン、ハリファックスの著者たるクレーク夫人の名は、其の著書と共に高く、歐洲の讀書社會には嘖々として傳へらるれど、我邦人の間には未だ其の名を知らぬがいと多かるらし。然るに近頃英國士道物語を愛づるもの我邦にも尠なからず出で來ぬと聞きければ、こゝに少しく夫人の話をものしつ。

夫人は千八百二十六年英國のストーク、アッポン、トレントと云ふ處に生れ、幼名をヂナー、マリア、マロックと呼びぬ。夫人のマロック時代こそ實に小說的なれ。父は學識才能の優れたる人と聞えしが、何故にや母を待つこと無情かりければ、マロック漸く長ずるに及びて、父が虐遇を憤り、母を愛する熖々の情に驅られて、遂に雄々しくも孱弱く病身なる母と未だ幼けなき二人の弟を伴れて父の許を飛び出しつ。己のが雙肩に三人の世話を背負ひ、流行の物語本扨ては多少眞面目なる出版物など書き綴りて辛くも母弟を養ひぬ。夫人がこの時代は實に艱難辛苦云はん方なかりしかど、少しも屈することなく常に少女らしく快活にして而して豪俠なる敢爲に富み、氣を負ふ青春の婦人をしていよゝ剛健ならしむるものありき。

夫人は大いなる趣味と感情とを以て愛すべく歌ひヂヤムバー、ジャアナルの爲めに詩をものし又散文の一著作をも其れに寄せたることあり。されどヂナー、マリア、マロックが小說家として初めて世に打つて出でたるは千八百四十九年の事にして、其の作はオ

ヂルヴイース(Ogilvies)と題する物語なりき。其の後四年の間に阿利穢、家族の首長及びアガサの良人の三篇を公にせり。されども女史の名は未だ讀書社會に知られざりき。其の一躍して赫々の名聲を博するに至りたるは則ち千八百五十七年彼の紳士ジョン、ハリファックスを公にせし時にぞある。士道物語の一度び世に出づるや、啻に英國の讀書社會を風靡せしのみならず、佛蘭西、獨逸、伊太利、希臘及び露西亞等の各國に飜譯せられ、到る處の讀者より之れを讀みて愉快と利益とを得たりてふ讃辭を著者に寄せ來るもの引きも斷らざる樣なりき。

女史をしてかくも一時に名聲を博するに至らしめたる士道物語を脚色するに方り、女史が想を構へ來れる話こそ面白けれ。

女史は中古風の家屋と寺院とを見る毎に、之を描きて物語の背景たらしめんと心に期しつ。千八百五十二年の夏とかや、一日女史はクラレンス、ドベルなる人と共にチユークスベリーに馬車を驅りぬ。折しも驟雨颯と降り來りければ、とある天蓋ひせる園徑に逃げ入りて暫時雨歇を待ちつゝありしに、一人の男兒の晴々したる顔容の而かも身には垢穢き襤褸を纏ひたるがチヨコ／＼と駈來たりてまた園徑の入口に雨宿をなしぬ。ト見る、對ふの市街書記の家の窓より一少女の顔を出し、襤褸を纏ひたる男兒を可愛想なる面色してつく／＼と眺め居しが、やがて其の姿の消ゆるよと思ふ程もなく下の戸口の開くと共に件の少女、段梯の處に現はれ出で、男兒を麾きて一片の麵麭を取らせぬ……………

紳士ジョン、ハリファックスを讀みしものは必ず記臆せん。この光景が即ち物語の序開きをなせることを。其の後三十四年を經て、クレーク夫人がチユークスベリーに往きし時、己が物語の光景に引合はせんとて、幾百の人々が其處に訪ひ群れるを見て、我れながら一驚を喫したることありと云ふ。

この物語によりて大成功を得てより二年の後、女史は「エ、ライフ、フオア、エ、ライフ」なる小説を出せしが、或者は之れを評して士道物語よりも佳作なりと云へり、女史は又著作の傍ら諸種の新聞雑誌の寄書家として詩文をものせしが、家庭雑誌類に於て女史の名程親まれたる者はあらざりき。千八百六十四年女史は文學上の功勞を認められ年金六十磅を下さるゝこととなりぬ。而かも女史はこの年金は手を着けず、己れより薄命なる著作家の用に供せしこそいみじけれ。

千八百六十五年、女史はマクミラン出版會社の社員なるジョルヂ、リリー、クレークと結婚しぬ。其の際女史は全く一面の識もなき人々より多くの祝詞と



贈物とを受けしが、匿名にて送り来れる多くの贈物の中にて、ジョン、ハリフアックスと刻銘せる金製のペン軸ほど女史を喜ばせしものなかりしとぞ、女史は千八百八十七年十月十二日ケントのショートランドなる自分の住居にて永き眠に就きぬ。女史が臨終の際の光景こそいとゞ哀れを催すものなりけれ。折しも養女が近々に結婚すとて家内は忙はしげに、而かも嬉々として其の用意の最中なりしが醫師より病人の爲め可成く静かにするやうにと命ぜられければ、養女が人生の門出を及ぶ限り華やかに且つ晴々しくなしぬべき總ての準備はこれが爲めにいとゞ妨げられぬ。夫人は囁くが如く徽かに、自分に如何なる事のあるとも

それが爲め結婚を延ばさぬやうにと乞ひたる後、ほとんど人事不省に陷りたれど。樂しさの外に何をも知らぬ家内の者どもは少しも其れに驚かざりき。十月十二日の朝良人クレークは事務に出で行かんとするに臨み、夫人に親しき別れを告げしが、蟲の知らせといふものにや、平常の告別よりは一層親しかりければ、養女は之れを見て可笑がりしに、夫人も流石に笑を浮べ、結婚してから隨分長くはあれど、我等は尚ほ相ひ愛する仲なりと答へしとかや。嗚呼これぞ良人が夫人の唇より聞きたる最後の言葉なりきクレークは午後に至り匆々と樂しき家に歸り來り、門に醫者の馬車のあるを見て、胸打ち驚かせしに、御者出で來りて、令夫人は最早縡切れ給へりと告げぬ、つと家に入れば夫人は自分の室の長椅子に眠り其の周圍には家内の者ども懼れと驚きとに色靑ざめ何れもわなく\/と震ひ居たり、吁、香魂既に去て呼べども還らず……夫人は午後雜多の見舞人に接せしが、人々の去りたる後良々わりて呼鈴を鳴らし、家人を呼びて危篤く思ふ旨を告げしかば、家人は驚きて助力を求めけるが夫人は長椅子に臥し數分間呼吸に苦める後、微かに、ア、モー四週間生きて居ら
い、い、か、い、い、か、い、、、い、い、い、い、
れたら、けれどモー仕方がない、モー關はんの聲を洩らしつ、而して萬事休しぬ。

○　○　○　○　○　○　○

クレーク夫人の小說及び小話には、前に擧げたるもの丶外、主婦と下婢（千八百六十三年作）、基督敎徒の迷想（千八百六十五年作）氣高き生活（千八百六十六年作）、婦人の王國（千八百六十九年作）、我母及我れ（千八百七十四年作）、若きジャーデイン夫人（千八百七十九年作）、彼れの小さき母（千八百八十一年作）トムミー孃（千八百八十四年作）アーサー王（千八百八十六年作）等あり。其他論文には人生よりの研究、一婦人の婦人觀、敎會外の說敎及び簡明の演說等あり。少年書類も又尠からず。詩の多くは千八百八十一年に出版せられたる三十年詩集に載せられたり。

學藝

更科日記摘撮（つゞき）

文學士　境野天華

東は野のはる〲とあるに、東の山際は、比叡の山よりして、稲荷などいふ山まであらはに見え渡り、西は雙の岡の松風、いと耳近う心ぼそく聞えて、内にはいたゝきのもとまで、田と云ふものゝひたひきならす音など田舎の心ちして、いとをかしきに、月の明き夜などはいとおもしろきを、ながめあかしくらすに、知りたりし人、里遠くなりて音もせず。便につけて何事かあらんとつたふる人に驚きて、

おもひ出でゝ人こそ問はね山ざとの
　まがきの秋に秋風ぞ吹く

都に着きて後、作者の住居の有様を述べたものである。文情動くばかりの寫しかた、何とも云へぬ妙味が籠りて居ると思はれる。別に解釋する迄もないかも知れぬが、ざつと云つて見やう。住居の前は見はるかす所、比叡の山から稲荷山あたり迄一面の田で西に當りては雙の岡があり、岡の上の松風が何時も琴の調べかときこゆるのは、心細いほど哀れに身にしみる、折しも田には秋の收穫前の事で、鳥などの鳴子を引く音が絶えず聞ゆるので、都近い處も丸で片田舎の面影がある。此の眼前の眺め、月明の夜などは一入であつて、誰ぞに見せたいと思はるゝとであるが、折よくは知る人も訪ねて呉れず。都も此の邊り迄引込んで居ては、知る邊の人も打絶え便りもして呉れぬがどうした時か、只今如何御暮しなさいますと云つてよ越した人があつたのに、世間の人はまだすつかり自分の事を忘れてしまひはせぬのだと思

つて、如是いふ歌を綴んで贈つた。こうして寂しく暮らして居ると、態々思ひ出して訪ねて來て呉れる特志の方も御座いませぬが、人間からは訪ねられずとも、山里の事で、籬根の秋の葉には秋風が何時もそよ〱と吹き通ふて呉れ、寂しい中にも幾分か其方に慰む所もありて日々と暮らして行くことです。」と訪はぬを恨むやうな、自ら慰むるやうな、情致深い歌である。

光源氏ばかりの人は、この世におはしけるやは。薫大將の宇治に隱し居ゑ給ふべくもなき世なり。あなものぐるほしや。國にて物語を僅にしても、はか〲しく、人のやうならんとも念ぜられず。この頃の世の人は、十七八よりこそ經よみ行もすれ。さること思ひかけられず。辛うじて思ひよる事は、いみじくやんごとなきかたちありさま、物語にある光源氏などやうにおはさん人を、年に一度も通はし奉りて、浮船の女君のやうに、山里にかくし居ゑられし、花紅葉、月雪をながめて、いと心ぼそげに、めでたからん御文などを、時々待ち見などこそせめと思ひつゝけ、あらましとにも覺えけり。

此の一節は作者の空想を記したものである。作者はまだ京に上らぬ前から、一種の希望があつた。それは京都に上りて思ふやうに物語を讀んで見たいと云ふ願であつた、已に京都に上り、思ふ通り物語を讀むことが出來るやうに成つたら、今度は又一種妙な空想に魅せられることになつた。それは外でもない物語の中で一番面白いと思はれる源氏物語の中で、こんな立派な人が世にあらうかと思はれる程あやなして書いてある光源氏、こんな完全な人はとても此の世の中には見つかりさうもない。又光源氏の御子其の實は柏木と女三の宮との間に出來た彼の薫大將が、浮船の女君を宇治の山里に隱くして置かれたと云ふ物語にあるやうなことはとても今の世の中にはありさうもないのである。こんな事考へる自分は、實はどうかして居るのではなからうか。僅か田舍に

居たころ、物語では能くして居たことなれど其功德で、浮舟のやうにならうとも思はれない。又今頃の人はやつと十七八頃から、佛典も讀み、行ひも勤むるものであるから、年若くて薫のやうな殊勝な考を以ておいでの男もなからう。物語のことは到底作りことで實際にはあるべからざることであると幾度も思つて見るが、矢張り何處やらに物足りぬ心がする、自分はかういふ空想を描いて樂しんで見た。假りに物語にある光源氏のやうな立派な方があつたとして例へば彼の薫に思はれた浮舟の君のやうな具合に、山里に置いて貰らつて、年に一度ばかりでよい。お顏を見せて下さつて、其外は、春の花、秋の紅葉、又は月のよきにつけ、雪が降つたと云つて、自分一人心細く眺め暮らして居る處へ、都の方より御使者がまゐりて、ありがたい便りを頂くことが折々あると云ふ具合に出來て居たら、どの位嬉しからうと到底出來ぬと知れたことを考へては獨り慰めて居つた。

空想の子よ。とは此の日記の作者に冠らせたい所である。然しながら一般に平安朝の女子は此の種の果敢ない空想に生きて居たのではなからうか。只作者によりて此の空想が尤もよく、修飾なく、裸體的に表はされたのではあるまいか。光源氏！今日の眼から見たら如何にも缺點のある、非難すべき男性である。然し理性に乏しかつた平安朝の女性には、只理想的の男性として、吾が佛とも命とも仰がれたのである。源氏物語の作者、紫式部の考に光源氏が果たして理想的の男性として取られてあつたかは疑問であるが、（自分は決してさうでないと思ふ）一般に平安朝の女性の考の向け方は更科日記の此の條が尤も能く云ひ表はして居るものと思はれる。果敢ない、物哀れな所は見えるが、強い確乎とした所は見えぬ是れ恐らく平安朝の女性の一般の性格であつたらしく思はれる。人は其の理想とする所によりて略其の人の人格なるものを定めることが出來るとすれば、此の種の斷定も强ち無理とも云へまい。

母いみじき古代の人にて、「初瀬にはあなおそろし、

奈良坂にて人にとられなばいかゞせん。石山、關山越えていとおそろし。鞍馬はさる山、ゐてゐでんいとおそろしや。親のぼりてともかくもと、さしはなちたる人のやうに煩はしかりて僅に清水に率て籠りたり。

此の條に於ては、平安朝時代の人の、器宇の小さかつたとが遺憾なく表はされて居ると思ふ。初瀬も石山も平安の京から幾くらも距れた處でない。鞍馬山をさる山と云つて無暗に怖しがり、やつとの事で清水詣でと落付くわたりは、幾何にも弱々した所が表はれて居て、當時の人達はこうも非活動の者であつたらうかと驚かれる。こんなとであつたから、彼の光源氏は僅に都の外、須磨明石の浦に流され、詫住ゐをしたと云つて、死ぬほど悲しがり、心細くしの秋風に泣いたのも別に不思議な事とも思へぬ。元來日本國民と云ふのはこう意氣地の無い者であつたらうか。決してさうとは云へぬ。黒潮に乘つて、萬里の波濤を開拓したのは我が日本國民である。國民がかうまで神經質に、情なく弱りて居たのも當時の生活の狀態から來たもので、元來剛健な國民であつたことは疑はれぬ。神代記の天の岩戸の前に舞つた天鈿女命はどうであらう。三韓まで推し渡られた神功皇后はどうであらう。境遇ほど人を感化する力の强いものは無い凡て、人は善くも、惡くも、强くも弱くもするのは是である。

心もとなく思ふ源氏を、一の卷よりして、人もまじらず几張のうちに臥して、ひき出でつゝ見る心地、石の位も何にかはせん。晝は日くらし、夜は目の覺めたるかぎり、火を近くともして、これを見るより外の事なければ、おのづから名などはそらにおぼえ浮ぶを、いみじき事に思ふに、夢にいと淸げなる僧の、黄なる地の袈裟着たるが來て、法華經五卷を疾く習へといふと見れど、人にも語らず、習はんとも思ひかけず。物語のことをのみ心にしめて、我はこのごろわろきぞかし、さかりになりなばかたちもかぎりなくよく、髮もいみじく長く

なりなん。光源氏の夕顔、宇治の大將の浮船の女君のやうにこそあらめと思ひけるころ、まつはとはかなくあさまし。

此の前には叔母に當る人の許より兼々熱望して居つた源氏物語五十餘卷を櫃に入れ其外の物語を取り添へて、贈つて來たことを記してある。所謂讀書の趣味に心を奪れて、興に任かせて夜晝讀み續けた。世の中に石の位と云ふありがたい物があるが、それも此の讀書の樂に比べて見たら云ふに足りないことだと云ふあたり、作者の心の恍惚たりし狀態を表はして居ます。法華經讀むことは當時の風習でした、然しそれも一方に源氏を讀む面白さに心を奪はれて居たので、夢の御託も知らぬ顏に握りつぶし、頻りと讀み耽りたと云ふので、此の作者の心の狀態が愈々明白になりて居ります。最後に今に自分の容貌もよく成るだらう、そしたら光源氏に思はれた夕顏の君のやうに、若くは薫大將に思はれた浮船の女君のやうな身分になることの出來やうと出たあたりは

如何に作者が、前にも申した通り空想の子であつて影を描き、形を思ふて自ら慰めて居たかと云ふことが分ります。源氏物語と限らず好く出來た文學詩歌一切には凡て一種の魔力があるので、讀者は知らず知らず、其の作中の人物に自分をあてはめて考へることに成る。今日でも例へば天外子の魔風戀風が出て後は、青年男女の口頭に、やれ初野の、芳江の東吾の、と謳はれることがあるやうに、文學が善き感化も與へ、惡い感化も與へる所から、若い者には小說を讀ませてはならぬとか、關まはぬとか、種々の議論も出ることです。更科日記の作者も御覽の通り餘程源氏物語熱に浮かされて居るやうですか、小說を讀むならば其丈の覺悟があつて、ちやんとした理性の判斷を鈍ぶらさぬやうにして讀んで貰らひたい。只浮々とした考で讀んではとんでもないことに成ります。作者は此の條の最後に於て何と申して居りますか。若い考から、こんな空想にばかり耽りて居たのを思ふて見れば、實につまらぬ事であつた。

懺悔すべきことである！

四月晦日がた、さるべき故ありて、東山なる所へうつろふ。道のほど、田の苗代、水まかせたるも、植ゑたるも、何となく靑み、をかしく見えわたりたる山の、かげくらう前ちかく見えて、心ぼそくぞあはれなるゆふぐれ、水鷄いみじくなく、

　たゝくとも誰か水鷄のくれぬるに
　　山路を深くたづねては來ん

是より以下少しく、作者の自然を寫す筆致に就て見やう、即ち以下に引く所は抒景を主とした所である、東山、移る道々の景色、夏の初の事であつたので、苗代の床に水が一杯に來て、中には早や植ゑ付の濟んで居る所もあつたが、何れも靑々として涼しさうに水に寫つて居る景色が何とも云へぬやうであつた東山一帶は段々と日の沈むにつれて黑く翳つて來ると云ふ心細い夕暮に、水田近い所の事なれば水鷄が頻りと鳴いて居ると云ふ寂しい所であつた。

（歌）幾くら戸を敲かうが、日も暮れ果てた今頃に、山路深く入り込んで居る所へ訪ねて來る人がある筈もない。水鷄よ、門をたゝく水鷄よ。さうたゝかれては自分は愈寂しさが堪へ兼ねる。

歸りて、夕日けざやかにさしたるに、京のかたものこりなく見やらるゝに、この雫に濁る人は、京にかへるとて、心苦しげに思ひて、又つとめて、

　山の端に入る日の影は入りはてゝ
　　心ぼそくも眺めやらまし

靈山から宿に歸りた頃は、日も傾き、入り日がぱつとさして來て居るのに、京都の方が、此處からは全然見晴るかされる。先に雫ににごると云ふ歌を詠んだ人（雫に濁る人と云ふは例へば何源氏にも宇治十帖中の君の事を、晝寢の君とあるやうなもので、源氏の場合では中の君が晝寢をして居つたことを記して直ぐ後に晝寢の君と記してある）は今から京都へ歸りて行くと云ふことである。寂しくなる、どうしやうと思はれたが、それを耐らへて、

（歌）山の彼方に日は入りて仕舞つた。せめて貴方で

も滯りて下さるならと思つても、それも叶はぬ。貴方は私を振り棄てゝ京へ歸りてお仕舞ひなさる。私は貴方が歸りてお出なさる影を見送りて、獨り寂しい此の住居に殘らねばならぬことだ。

念佛する伴の、曉にぬかづく音の尊く聞ゆれば、戸を押しあけたればほの〲と明けゆく山ぎは、こくらき梢どもきりわたりて、花紅葉のさかりよりも、何となく茂りわたりたれば、空のけしきもくもらはしくをかしきに、杜鵑さへいと近き梢にあまたゝびないたり。

誰に見せたれにきかせん山里の
この曉もをちかへる音も

此の一節は殊に、平安朝時代の文章、其の抒景的方面の好例と云つて好からう。

眠を覺まして、見れば、枕もと近く念佛の聲が聞ゆる。これは近い所の出家が朝のお勤めをするのであつてあまりその聲が尊いので、そつと臥床を出で、戸を押しやりて眺めて見た。夜は今うつすりと明けかゝつて居て、山の邊りは木々の梢も煙に罩められて明白には見分けられぬと云ふ夢のやうな景色。どうも好い景色で、春の花よりも、秋の紅葉よりも、此の茂りに茂りて居る一帶の樹梢の朦朧とした所の情致、何と云つて稱へたら好いか。それに、近い所の梢のあたりに杜鵑が來て聲惜しげなく幾度も鳴いて居る。

(歌)此の好い曉の景色、誰ぞに見て貰ひたい。此の往きつ、返りつ、鳴いて居る杜鵑の音を誰ぞに聞いて貰ひたい。然し殘念な事には自分の外には誰も居らぬから、致方もない。

二年はかりありて、又石山に籠りたれば夜もすがら雨ぞいみじく降る。旅居は雨いとむつかしきものと聞きて、蔀押しあけて見れば有明の月の、谷の底さへ曇りなくすみわたり、雨と聞えつるは、木の根より水の流るゝ音なり。

谷川のながれはあめときこゆれど
ほかよりけなるありあけの月

石山寺に參籠したことがあつたが、夜中雨が降つて居る。旅の雨ほど難儀なものはあるまひと思つて蔀の戸押し明けて見たら、雨と思ひしは木の根を洗ふ溪川の音、隈なき有明の月が谷底まで照らして澄み渡りて居る立派な景色、

(歌)雨と聞いたのは溪川の流、意外にも有明の月までてり渡りて居る。

曉に なりやしぬらんと思ふほどに、山のかたより人あまた來るおとす。驚きて見やりたれば、鹿の椽のもとまで來てうち鳴いたる、近うはなつかしからぬもの丶聲なり。

秋の夜のつまこひかぬる鹿のねは
遠山にぞきくべかりけれ。

曉になつたらうかと思はる丶頃、まだ枕につきながら聞いて居ると、山の方より大勢の人が、住居の方に近よりて來るやうな音がするので、今頃と思つて出て見たら、あらぬ鹿の一群が、椽先近く來て居るので、あつた。餘り近よりて鳴くのを聞いては 一向に面白くない。

(歌)小男鹿の妻戀しさに堪へで鳴く其の聲は悲しく身にしみ入るやうであるが、それも餘り近い所で鳴いては何の風情も無い、遠い山の奥で鳴くのを餘所ながら聞いて居るのが好い。

抒景の方面は略以上の例を以て味はふことが出來たと思はれる。今是に次いで一寸抒情の方面を附加して見やう、そして不完全ながら更科日記の紹介は了られたものとして筆を擱きたい。

年はくれ夜はわけかたの月かげの
袖にうつれるほどぞはかなき

いく千たび水の田芹をつみしかど
思ひしことの露もかなはぬ

此の二首は、作者が一時宮仕へをして居つた時に詠だので、二首ながら心細い感情が能く表れて居る。年末にもなりて、冬の夜の月は氷りつく許りに曉は倘更、寒さは身にしみ透るばかりである。自分の身の上は如何なるものかと思ひ返して見れば、果敢

ない、便りない宮仕の女で、とりつき所もないのは丁度此の今頃の曉方の月にも比べねばならぬ。如何にも寂しい、寂しい身分である。

若い時分から、色々と願を持つて居てゐ丶のこうのと考へたこともあつたが、今に何一つ願ひ通りになりはしない。隨分と自分丈は骨を折りて、眞心を込めて上へも仕へたつもりではあるが、不過は身の不束の結果であらう致方もない。」水の田せりを摘むとは呂氏春秋に昔信夫あり芹を摘んで食ひ、美味とし、是を君侯に献せりと云ふ故事から出て、君を愛する者の志を形容する辭となつた。「献芹之微誠」とは屢用ゐらる丶所の言葉である。

しりたる人の、近きほどに來てかへりぬと聞くに

まだ人のしらぬ山べのまつ風も

音して返へるものとてそきけ。

兼々知りて居る人が、つい自分の宿の近所まで訪ねて來たが、どうしたのか自分の所へは立寄りて呉れなかつたので、

(歌)峯の松風でさへいつも軒に吹き通ふて、呉れるのに、貴方には又どうしたつれないお心で、素通りになすつたのか、

月もなく花もみざりし冬の夜の

心にしみてこひしきやなぞ。

作者の繼母に贈りし歌、あのお別れいたした夜は冬の事とて、別段月を一緒に見たと云ふでもなく、又樂しい花見をしたと云ふではないのに、今日になる迄ちつともあの夜のことは忘れが出來ません。能々其夜の事が身にしみて居るものと見えて、自分ながら譯の分らぬ程であります。

世の中の憂きもつらきもをかしきも互に言ひかたらふ人、筑前にくだりて後、月のいみじう明きにかやうなりし夜、宮に參りて、あひては露まとろまず、ながめあかし丶ものを、戀しく思ひつ丶寢入りにけり。宮にまゐりあひて、現にありしやうにてあると見て、うち驚きたれば夢なりけり。月も山の端近くなりにたり。さめざらましをと、い



とゝながめられて、

夢さめてねざめのとこのうくばかり
　戀ひしと告げよ西へゆく月

自分に取りては大事な、何事も腹の底から明かしあつて居た人があつたが、筑前の國に行つて仕舞つた後、或る夜立派な月夜に當つて、彼の人がまだ京に居た時、丁度こういふ月夜に内裏へ行つて、逢つて互に話をしては眠むることもしないで、いつも夜を明かすことがあつたにと思つて、其の人の上を思ひやりながら、何時となく眠むりて仕舞つた。餘り色く色と考へた故でもあらう、夢に其人の事を見て、丁度昔内裏に居た時のやうな氣がして覺めて見れば夢であつた。月は西の山の端に落ち懸つて居る。あゝ夢なら覺る所では無かつたと頻に悔しくて堪らぬ。あゝ

(歌)貴方の事を夢に見て、覺めて昔のことが思ひ出されて、あゝ戀ひしいと獨りで泣き沈んだと今西海の彼方に居らるゝ我が友の許へどうか托言を賴む。西へ落ちゆく所の月よ。

【完結】

THE MOTHER OF BARON IWASAKI.

By A. Miyamori.

"Diligence is the mother of good luck."

Over half a century ago, at the time of the Tokugawa rule, there lived in an out-of-the-way village in the province of Tosa a physician called Keizō Ono. He had a blooming daughter Miwa by name, who at eighteen years of age was married to a poor *goshi* * living not far from her village. She it is who is the subject of the present sketch.

Her husband Yajirō was in straitened circumstances at the time of their marriage, and the case became still worse two or three years afterwards when two sons—Yatarō and Yanosuke—were born to them. But Yajiro, being an easy-going and at the same time large-minded man, troubled not his mind over his poverty, nor felt he any inclination towards an endeavor to better his condition. Accordingly the young wife had to take upon herself the major responsibility in matters of domestic finance. She exerted herself in various ways to make both ends meet—holding the plough by day and driving the shuttle at night. Even with so much care and toil on her part, the family were barely kept on the hither side of starvation, rice gruel chiefly constituting their regular fare. As if her lot were not unhappy enough, Miwa's parents died at this time, leaving almost nothing to her two brothers, who were both still in their teens. Since the brothers were as yet unable to support themselves, she determined to contribute something to their livelihood. Hence every evening, her own day's work being finished, she proceeded to the brothers' house where evenings of labor at the loom or at the spinning wheel earned the few pence necessary for their support. Then, late at night, quite exhausted by toil, she retraced her way home, a distance of about two miles, carrying the infant boy Yanosuke on her back. This she continued to do for years.

The iron-willed woman's courageous struggle against poverty and misfortune was not in vain. By the time her sons had reached the period of youthood, the family had long been raised above the wretched level of a rice gruel fare and were eased of the coarser household duties by the ministrations of a man-servant and a maid. But Yajiro was not destined to see the successful career which after years had in store for his eldest son. At the time of manhood's best vigor he went to the

grave, profoundly mourned for and missed by a sorrowing family. But the young widow's firmness of spirit was not daunted by this bereavement, which served only to stimulate her to more strenuous efforts towards comfort and ease. Not long after the unfortunate event, both sons were sent to receive their education to Kōchi, the capital of the province.

At this time the Tokugawa dynasty had begun to lose its hold on the hearts of the Japanese nation. Excitement was running high throughout the country over "reverence for the Throne and the expulsion of foreigners." The clan of Tosa had espoused the Imperial cause and was determined to see the Tokugawa government overthrown and the Emperor restored to actual sovereignty. Under the circumstances, it is natural that Yataro and Yanosuke, who were full of youthful spirit, were seized with loyal enthusiasm and joined the standard of the Imperialists.

After some years the civil war came to an end and peace was restored throughout the country. Mr. Yataro Iwasaki who had abandoned politics and tried his abilities in business enterprises, was fortunate enough to have accumulated by this time a moderate fortune, and the family went to live in Tokyo. But the mother's prudence and industry were not in the least abated and no change was seen in her manner of housekeeping. Later, when Mr. (afterwards Baron) Iwasaki had established the Mitsubishi Steam-ship Company and, having attained to great affluence, was extensively known as "the King of the sea," it might have been expected of her to yield gracefully to a life of luxury. Yet she not only did not indulge in luxury but she was by no means idle. She still wove and spun whenever she could. She used to say, "However rich my family may become, I can never forget the bitter taste of poverty. I do not think there is any work easier than woman's work. Moreovor, I am quite used to wearing cotton clothes, and no material is so well suited to me as cotton." Thus the aged mother of the richest man in Japan never abandoned spinning and weaving nor was she ever dressed in silk to the day of her death, which took place in March, 1900.

Madame Iwasaki exercised great strictness towards the younger members of her family. If her grand-sons hesitated to go to school because of rain or snow, the venerable lady would approach them whip in hand and

say, "Who can be so foolish as to dislike to go to school? Such a child can never become a great man in the future. Thereupon they would fetch their books and hasten to school. One of her great grand-children when bitterly crying would stop the moment he heard, "Hush! here comes grand-mother!"

* A kind of samurai who lived away from the castle-town of his liege lord and cultivated the land.

岩崎男爵の母堂

『勤勉ハ幸福ノ基ナリ』

今を距る五十餘年の昔し、徳川幕府の頃、土佐の國の片田舍に小野景藏と云ふ醫師ありけり。彼に一美女あり美和と云ふ、十八歳の時程遠からぬ處に住める貧しき郷士に嫁したり。此婦人こそ此編の主人公たる人なれ。

美和女の良人彌次郎氏は結婚の當時貧困なりき、而して兩三年の後、二子彌太郎彌之助生まるゝに及びて一層の貧窮を加へたり。然れども彌次郎は人と爲り豪放磊落にして、毫も貧窮を意とせず、其の境遇を改良せんとするの念少しもなかりき。故に美和女は一家財政の事に關して、責任の大半を自から負はざるべからず。是に於て彼女は晝は田畑を耕し夜は機織をなし、其他種々の仕事に從事しつゝ、生計を營みけり。斯の如く勤勉努力するにも拘はらず、家族のものは粥を常食として、僅かに飢を凌ぎ得るのみなりき。美和女の不幸は更に加はりぬ。彼女の兩親は此時死して、其の二人の若年の弟には遺産殆どなし。而して弟は獨立の生活を爲す能はざりしを以て美和女は彼等が衣食の資を得んと決心したり。是に於て毎晩己れの仕事を終へたる後、弟の家に赴き或は機織を爲し或は絲を紡ぎなどして彼等の爲めに僅か計りの錢を儲けたり。それより夜更けて後、身心疲勞せる時、幼兒彌之助を背負ひて一里ほどの路を辿り己か家に歸りぬ。斯の如きこと數年に及びぬ。

美和女が貧困と不幸とに對する苦鬪はいかでか其効あらざらんや。彌太郎彌之助の二子若者と成りたる頃は既に久しく粥食の苦境を脱し、下男下婢各一人を雇ひて稍氣樂なる生活を爲すに至りぬ。然れども良人彌次郎氏は長子彌之助氏か後年の出世を見るに及ばず、男盛りの年齡に於て黄泉の客となり、遺族の悲嘆は一方ならざりき。然れども年若かの寡婦は此不幸の爲めに絶望せず、益々奮勵して家道の隆興を計りぬ。彌次郎氏死して後間もなく二子を學問修業の爲めに、城下高知に送りたり。

此の時に當りて徳川幕府は漸く民心を失ひ、尊王

攘夷の說全國に行はれ天下騷然たり。土佐藩は勤王黨に左袒し、幕府を倒し王政を復古せしめんと謀る。天下の形勢斯の如くなれば血氣旺なる彌太郎彌之助の兩氏が勤王の念勃勃して勤王軍に投じたるは自然の數と謂ふべし。

　數年の後內亂鎭定して全國平和となりぬ。岩崎彌太郎氏は是より先き政治に干與するを止め身を實業界に投じ苦心したる結果此時既に相應の財產を作り、居を東京に移すに至りぬ。然れども母堂の節約と勤勉とは少しも減ぜず、其の家政の方針には更に變ずる所あらざりき。其の後岩崎氏が三菱郵船會社を創立し富者の身と成り海上王として天下に知らるるに及んでは、如何に勤勉なる母堂も奢侈の生活を爲すならんと思ひきや、彼女は啻に贅澤をなさゞりしのみならず少しも怠惰に流れざりき。暇あれば機を織り絲を紡ぐこと依然舊の如し。母堂常に云へり『私の家族は如何に金持になつても私は貧乏の味は決して忘るゝことが出來ません。女の仕事よりも樂な仕事はありません。又私は木綿の衣服を着るに慣れて居ます、木綿ほど私の身に適するものはありません』と。斯くて日本隨一の富豪たる岩崎家の高齡の母堂は明治三十三年三月卒去せらるゝに至るまで、機織と紡糸の仕事を廢せず又絹布を纏はざりき。

　岩崎刀子は其家族の子女に對しては甚だ嚴重なりき。雨天の日若くは雪ふる日孫兒が登校を躊躇する時は刀子鞭を取て彼等に近づき云ひけるは『學校へ行くことを嫌うやうな馬鹿者は誰だ。そんな子供は後にエライ人間には決して成れないぞ。』是に於てか彼等は書物を携へ學校へ向けて急ぎ行けり。刀子の曾孫の一人は大に泣き叫べるときと雖『ソラおばーさんが來るよ』の一語を聞く時は忽ち泣き聲を止めたり。





家庭と新聞紙

贄田江東

總て物事の發端起源の時代には、其の目的も仕組みも、單純なるものなれども、やうやく進歩發達するに連れ、次第に、複雜となり、派手となり、本來の目的以外に、色を添へ、艶を附け、手段も講じ、意匠を加へ、其の發端起源時代の物と比較すれば、恰も別物の如し、衣服の如きも、其初めは、只だ、身を蔽ひ、寒暑を防ぐの目的にて、漸やく、麻布の類もて、用足りしも、發達進歩に贅澤好奇心を加へ果ては、今日の如く、三井、白木屋の陳列品さへ、われの、これのと、物足らぬ如きを、口走り給ふ貴婦人、令孃さへ是れあるに至れるなり。

今玆に論ぜんとする新聞紙の如きも亦た然り、西洋諸國にて、初めて新聞なるもの、創起されし時には、とても、今日の歐米新聞の面影など、一分一厘も認むべくもあらず、近き時代に至り十八世紀末の倫敦タイタムの如きも、其の書き振り、體裁は、淡泊枯淡にして、議論こそ確かなりしも、全體に於ては面白くも、甘くもなかりしと云ふ、其他の、かひなで新聞の如きは推して知るべし、是れ他なし、前に云へる如く、物事の初期時代には、其目的も仕組みも單純にして、只だ實用に適すれば足れりとするが故なり、我邦の新聞とても然り、明治初年の新聞、弘文通誌、東京日々新聞、讀賣新聞など、何れも、艶なく彩色なく、趣味なき一個の通信機關に過ぎざりき、然るに、社會の進歩、文運の發達に連れて、日進月歩し、今日の如く、記事の詳密報道の迅速てふ

實用方面に一大進歩せしのみならず各紙、何れも、小説、詩歌、俳諧、記行、謎々、果ては、棋將棊のことなど、あらゆる方面に亘りて、粹を拔き、奇を鬪はせ、其雜報とても、普通の書き振りにては、讀者の腸を抉ぐり、目を牽く能はずとて、所謂三面記事に、全力を注ぐ樣など、新聞記者の骨折りの程も察せらるゝなり、是くの如にして、所謂、實用の目的以外に、力を効たさゞれば、面白くなしとて、購讀者の減ずるまでも、複雜進歩の域に達したり、是れ、新聞其物の上より云へば、進歩には相違なきも社會の風俗人心の及ぼす影響、殊に家庭に對する結果としては、其の新聞紙の性質如何を撰ばざるべからざるの必要ありと信ず、功能、大なれば、其の弊害も隨つて、亦た大なればなり。

予の淺き智識を以てすれば、同じく、新聞と云ふも、各國、夫々、幾分の調子、趣味、書振りを異にして居るが如し、其中にて佛國の新聞は奇警にして皮肉なることを載するもの多く、米國の新聞は、其の社説などには、餘り重きを置かずして、所謂、タウン、ゴシップ(雜報)を澤山に載するもの多く、中には、エロー、ペーパア(黄紙新聞)と稱するものゝ如きは隨分、中傷讒誣を事として、忌はしき處爲を試むるものあり。佛米の新聞に反して、壯重堂々と、品位を尙び、責任を重むずるは、英國新聞の特徵なり、吾輩は、英國の新聞紙が、如何にも、其の調子に於て、趣味に於て、態度に於て、紳士的なるを重むずるものなり。

然るに、此の比較的、眞面目なる英國新聞とても其種類多きが故に、中には隨分、如何しき性質のもの、現はれ出で來りたるは悲むべし、數年前に、英國の國會議員ジョン、バーンスと云へる人、英國新聞に關して論ずらく、此の堅固なる英國の國民道德を破壞して、巖礁の上に難船するの危害を與ふるものは、我が英國の今日に流行する、ハーフ、ペンニー、ペーパー(凡そ我國の二錢に當る安新聞)なり、吾人は此の種類の新聞紙を全滅せざるべからずと、

英國の新聞に對してすら、此の非難あり、況んや、米國の黄紙新聞をや、而して我國の新聞紙は如何ジョン、バーンス氏に見せしめば如何、更らに其の家庭に及ぼす影響は如何、是れ、實に一家の主婦たるものゝ心得べきことならん。

吾等は、勿論新聞紙の總てを非難するものにあらず、又た、其の効用を認めて、何れの家庭――十圓取の雇人、工場通ひの職工の家庭にも、毎朝、鈴の音して、一葉の新聞紙の配達されんことを望むものなり、然れども、牛乳の中にも、無菌牛乳と云るが、毎朝配達せらるゝ如く、新聞紙も亦た、其の無菌にして、清健有益なるものの、各家庭に配達されんことを熱



望するものなり、人の肺腑を重むずる如く、又た其の道徳精神を大切にせんことを望まざるを得ず。

我國の新聞紙の或るものに對しては、吾等は遺憾ながらジョン、バーンス氏の言を應用せざるを得ず、見よ、其新聞の記事を、公人私人の身の上に關する批評、報道の無責任にして、毒々しき筆、諧謔の文を弄し、其人の名譽體面が如何に毀損さるゝも一向平氣なるは、格別、珍らしきとならず、而して其所謂、三面記事と云ふ者に至ては、藝妓の内幕、遊冶郎の馬鹿さ加減等を淫靡惰落の筆にて、描き出して、下等讀者の好奇心に投じ、矯正の筆を揮はずして、寧ろ不品行を奬勵し、甚しきに至つ

ては、他の秘事弱點を暴露連載し、若しくは、記載せんとして、云ふに忍びざる事をする者さへ尠からずと聞く、其の紙面記事の純潔ならざるは、素より怪むに足らず、そも此種の新聞の家庭に及ぼす惡結果は如何あるべきぞ。

新聞紙上に娯樂分子を加へたるは大に好し、其の雜報なるものに、艶を添へ、文を飾るも亦た好し、不逞の徒を懲らし、權門を戒むるも、其の清潔なる目的と、正直なる筆とを以てすれは、吾等の却て大に望むところなるも、今日の如き、新聞紙にては、不可なり、試みに思へ、其の家の主人公に、多少の不品行ありとするも、そを紙上に爬羅剔抉し、面白可笑しく、嘲けるが如く、罵るが如く、書き立てられなば、其の本人は兎も角、妻子たる者の身に取り如何につらかるべきぞ、況んや、之れが爲めに、夫婦の間に風波を生じ、平和なる家庭に一道の暗雲を捲き起こす如きは、世間其例に乏しからず、新聞を面白くして、購讀者を增さんが爲めに他人の家庭を犠牲にするが如きは、不德も亦甚しきものなりといふべし。

且つ又た、家庭に於ける新聞の種類に因りて、其の家庭の模樣、程度、趣味なんど、推し量からるゝものなり、予の實驗する所に依れば、米國に於ける品位ある家庭にては、其の購讀する新聞紙も亦た、自から品格ある眞面目なるものを撰ぶなり、曾つて、某地へ旅行の途次、滊車の中にて、美々しく裝ふたる貴婦人體のもの同車したることあり、吾等は一向に、由緒ある人の妻君にもやと思ひたるに、傍にありたる二名の若者は、互に私語きて、われは賣春婦なるべし、容子態度のみならず、ポリス、ガセット（警察事故新報）を讀み居ればなりと、果たして然りしや否やを知らざりしと雖も、ポリス、ガセットなんど云へる下等の新聞は、貴婦人の購讀すべきものにあらずとの一事は之れを見るも明かなり、婦人の箝め居る指輪の形、意匠は其の婦人の人格を表はすなどさへ云ふことに比較せば、其購讀する新

聞を見て、自から、其人を察するを得べし。

人は其の近きものに染み易きものなり、新聞紙は毎朝必ず家庭に出入する一個の知人なり、教師なり先覺者なり、之れを讀むものは、知らず、識らず、浸潤、感染して、幾分かの影響を心的に印象するものなれば、能く〳〵心して、其の新聞の種類を撰み、立派なる家庭をして益々す、其の光を放たしめよ。

裏店に於ける 歳晩の家庭

内田茂文

泣ても笑つても今日一日と押し詰つた大晦日。中流以上の社會は、三四日以前に門松は飾り付けられ、最早新玉の年を迎ふる支度出來上りて、春待つ計りに澄したもの、實に年の内に春は來にけりの歌の意は、是等をや言ふならん。其歌の味噌一と漉しも越し易からぬ、年の底に溜りし大晦日に出會した、裏店の九尺二間社會ほど哀れ深きものはあらじ。母ちやんお正月には宜い着物を着るんだねと、娘に念を押さるゝ、母親の肚の裡の計畫は、良人が夜の二時三時まで夜業仕事をした稼ぎは、悉く家賃と米代と、炭薪の煙りに當がふ豫算。自分が師走に成つて内職に稼ぎ込んだ裁縫の仕事賃は、高が三圓に纏らぬ金、女の子には假令一反一圓の二子なりとも新調して着せたし、帶はメレンスにした處で僅に四五十錢を要すべく、表付は及ばずともフラシ天位の鼻緒をスゲし下駄は穿かさねば、近處の娘友達に對しても、肩身が狹かろう、殊に上から下まで氣の注き廻る女の子の事。身を切る樣な苦しい意地も張らざるべからず。斯る費に殘り少なの其内から、賃餅の注文は所詮及ばざるも、印し計りに出來合の延餅一枚位は、求めて雜煮の用意も爲さねばなるまじ。何を措ても店受の親分へは、砂糖袋の義理を缺いでは濟まず。四日目からは兎も角、三ケ日の間は、軒に注連は張らずとも、裾からお飾りを下げ度はなし。年の瀬に

似て流れ掛りし質受の勘定も、元利積れば驚く程に上り居るを、平素着と入替るも利足の足を出すは是非なし。搗てゝ加へて共同井戸の古流しを、年と倶に新らしく修繕せんと差配からの廻し觸れ。一棟長屋で各戸の頭割が、十二錢五厘と云へど、此場合には一圓に向ふ大金。全體差配の禿頭がなどゝ、井戸端の口に上るも無理ならず。前門虎の口を逃れて後門また狼の尻尾を踏む心地。一難送り去つて一苦來る。大世話の修羅戰場に立ちて、一から十まで萬事の切盛り、一切の振割りは、總て家庭の女王が身に負へる責任なるべし。一夜明くれば、歌留多、遣羽子に、如何に面白き春を娛まんなど、除夜の鐘と倶に樂しみの數々を數ふる社會の婦人も、等しく是れ同性の婦人なり。去り乍ら團欒和合の神は、特り綾羅錦繡の袖にのみ宿るものにあらず、九尺二間の裏店の裡にも目出度春は來るべし。白粉の中にも憂苦を包みし淋しき容貌あれば、胼皸の指先にも樂しく愉快なる追羽根にはつかるゝなりけり。

嬰兒の保護（つゞき）

ドクトル　淺田繁太郎

一　營養法に就ての注意

小兒の營養法を分ちて天然營養法及び人工營養法の二つと致します天然營養法とは母乳又は乳母の乳を以て養ふものを云ひ人工營養法とは動物の乳汁及其他の食料を以て養ふものを申します

天然營養法

母乳、嬰兒の營養料としては母乳ほど最良きものはありませぬ併し若し母體に疾病あるか又或る原因によりて乳汁の性質不良となるか又は其性質善良なるも乳汁の分泌減少なるときは斷然是れを廢めるか又は他の營養法を以て其不足を補はなければなりませぬ然て其授乳を廢すべき母體の疾病は

腺病　肺勞　癌腫　脚氣　癲癇　新

鮮の黴毒　貧血症　乳房炎　乳頭部の慢性潰瘍及び極めて强度ヒステリー等であります

但し急性熱性病にして乳汁の分泌に障害なき間は之れを廢するに及びませぬ。

乳母の乳　母乳に次て良好なる營養料は乳母の乳汁であります併しながら適當の乳母を得るは甚だ難き事であります然て此乳母の撰擇は素より醫師の鑑定を要するものでありますけれども此に大要を掲ぐれば左の通りであります乳母は身體强壯にして年齢二十歳より三十五歳の間なるを要す老若共に其範圍を脱すべからず。

乳母は一二回出產し乳兒を養ひしものを良好とす是哺乳の方法及び守護等に熟練したるものなればなり。

乳母は市町に育ちしものより村落に育ちしものを良好とす。

乳母は其出產時哺乳兒の出產時と大なる差違あるべからず就中若き乳汁（分娩後日尙淺きを云ふ）を以て長じたる乳兒を養ふは不可なり。

乳母は其性質溫和なるを要す憤怒し易きものは是に適せず。

授乳者（慈母并に乳母）の食物、　授乳者の食物は通常の混合食譬へば米飯麥飯パン及び牛肉鳥肉魚類豆腐及び野菜（大根人參芋馬鈴薯葱百合等）の能く煮たるものを適宜に取交用ゐてよろしけれども可及的牛肉鳥肉及び魚類等の如き滋養に富みたるものを多く取る事が必要でありまして鹽辛き乾物多量の漬物及び香料物（唐辛わさび）等はよろしくありませぬ。

離乳、　小兒の離乳期に就ては諸家の說一定してをりませぬけれども大抵十一ケ月乃至十二ケ月を以て適當の時期としてあります本邦にては二歲又は三歲になりても乳汁の出る間は飲ませて置く者が多いが是は甚だよろしくありませぬ尙又母體が次回の妊娠を致しますれば勿論離乳せねばなりませぬ。

人工營養法、　人工營養法は慈母に事故ありて授乳

し難くそふして乳母を得る事の出來ない場合に止むを得ず之を行ふものでありますけれども實際においては此方法に由らねばならぬ場合が非常に多いのであります左右して之に供する食料は色々澤山ありまして其内馬乳、山羊乳等

最良きものでありますが實際常用に供する事は出來ませぬ故に此には牛乳及び牛乳製劑のみを掲げて其他は省きます。

牛乳、 市中に販賣する所の牛乳中には種々等差があつて其性質一様でなく濃厚ものあり稀薄ものあり脂肪に富めるあり又脂肪至て少なきものがあります宜しく吟味して充分宜き牛乳を求めそふして其れに由て養育ねばなりませぬ。



牛乳消毒防腐并に保存法、 牛乳中には間々黴菌を混ずることがありますから必ず先殺菌法を行ひ然て又牛乳は極めて腐敗れ易きものであります依て之が腐敗を防ぐことが最も必要であります然て又此二ツの目的を達するには市中に販賣する所の牛乳防腐器を以て四五十分乃至一時間煮沸すれば宜しいのであります之は其防腐器内の瓶數個の中に牛乳を入れそふして其器中に水を入れ蓋をして煮沸まする装置であります又極めて簡單輕便の法は先毎朝一晝夜に要する牛乳を取り之を數個の小瓶（一回に用ゐる分を一瓶となすこと）に分ち脱脂綿を以て堅く栓をなし之を釜又は飯蒸器に入れて通常茶碗蒸を製する様にして四五十分乃至一時間煮沸するのであります然て其瓶を釜の中より出し冷き個所に置けば翌朝まで腐敗れることは

ありませぬ。

牛乳稀釋の比例、　牛乳は人乳に比し蛋白脂肪及び鹽類多く水分及び糖分少なし故に水及び糖分を加へて母乳と約ぼ同じ樣に致さねばなりませぬ然て其稀釋法及授乳量は乳兒の年齢に應じて差違がありますから左に其標準を示しておきます。

年齢	一回牛乳量	煮沸水或ハ麥煎汁一回量	砂糖一回量	混合液一回量	一晝一夜回數
三週以内	二十瓦	六十瓦	三瓦	八十瓦	八回
一ヶ月間	三十瓦	七十五瓦	四瓦	百〇五瓦	八回
二ヶ月間	四十瓦	八十瓦	五瓦	百二十瓦	七回
三ヶ月間	六十瓦	九十瓦	六瓦	百五十瓦	七回
四ヶ月間	八十瓦	九十瓦	七瓦	百七十瓦	六回
五ヶ月間	百瓦	百瓦	八瓦	二百瓦	六回
六ヶ月間	百二十瓦	八十瓦	同	二百瓦	六回
七ヶ月間	百四十瓦	七十瓦	同	二百十瓦	六回
八ヶ月間	百六十瓦	六十瓦	同	二百二十瓦	六回
九ヶ月間	百八十瓦	五十瓦	同	二百三十瓦	六回
十ヶ月以後滿一年	二百瓦	四十瓦	同	二百四十瓦	六回
	二百五十瓦	……	同	二百五十瓦	六回

授乳時間（夜中八時半乃至二時授乳セズ）	一晝夜混合液全量	一晝夜牛乳量
毎二時間	六百四十瓦	百六十瓦
同	八百四十瓦	二百四十瓦
毎二時半	八百四十瓦	二百八十瓦
同	千〇五十瓦	四百二十瓦
毎三時間	千〇二十瓦	四百八十瓦
同	千二百瓦	六百瓦
同	千二百瓦	七百二十瓦
同	千二百六十瓦	八百四十瓦
同	千三百二十瓦	九百六十瓦
同	千三百八十瓦	千〇八十瓦
同	千四百四十瓦	千二百瓦
同	千五百瓦	千五百瓦

牛乳稀釋の方法、　牛乳を稀釋するには豫め消毒し置きたる牛乳を取りまして一回分を小鍋へ入れ適量の砂糖を加へ沸騰させまして後豫て製し置たる煮沸水或は麥煎汁を加へて攪拌し脱脂綿を漏斗の底に布き之を以て混合液を濾過し哺乳器に入温度の加減を試み而して後之を乳兒に與へるのであります牛乳及び煮沸水等を量るにはメートルグラスを用ゆれば最も正確でありますけれども茶匙(カッフイーの匙)及び食匙(スープの匙)を用ゆれば最も輕便にして其用をなします然而茶匙一杯は十五約四瓦食匙一杯は瓦に相當いたします故に譬へば牛乳三十瓦水七十五

瓦の混合液を製するには牛乳を二食匙煮沸水五食匙を量れば宜しいのでありまず砂糖は三盆白單舍利別及び角砂糖等の内何れにても宜ろしけれども單舍利別は腐敗に傾き易く三盆白は料るに面倒なれば角砂糖が最も良しくあります角砂糖は通常の物一個六瓦なるにより其割合にて用ゆれば宜いのでありまず三瓦なれば半分四瓦なれば三分の二を「ナイフ」又は庖刀にて砕きて用ゆるのであります。

（つゞく）

毛髪病の話

醫學士　山田弘倫　談

私は目下毛髪病の事に付き熱心に研究して居ますから、其事に付き御話を致します、禿頭即ち頭部の毛髪の抜けるのにも、種々の種類があります、今之を區別して見ると、大略左の通りです、

一、脂漏性禿髪
二、圓形禿髪
三、黴菌性禿髪
四、病後の禿髪

脂漏性禿髪と云ふのは、字に示す通り、頭部から脂が漏つて、其れが為めに禿げるので、圓形禿髪と云ふのは、先年流行した臺灣坊主、髪の毛が一時に抜けて坊主になるのです、黴菌性禿髪と云ふのは、黴菌に蝕れて禿げるので、是れには又種類があります、第一が白雲、第二が白癬、之は一種のできものです、第三が田虫、田虫が頭に着けば、其れが為めに蝕ひ剝がされる、其外又頭に附く一種のむしがあつて其れが禿頭の原因となる事がある、先般板橋の小學校にあつた禿頭病などが其の類です、病後に髪の抜けるのが能く有る事で、疱瘡、其他の傳染病、又は姙娠後などには禿頭となるものが多いのです。

此中で最も婦人諸君の注意を要す可きは、脂漏性のものです、故に此の脂漏性のものに付ては、殊に精しくお話を致します、脂漏性の禿髪と云ふのは、今申した通り、頭の地から脂即ち『ヤニ』がしめ出し、

其れが爲め毛髪が拔けるのですが、同じ脂漏性の中にも慢性と急性とがあつて、慢性のはジリ〳〵何時とは無しに拔けますが、急性のは急劇に來て、一時にびつくりする程拔けます、其の拔けるのは頭のテッペンに多く、鬢の邊になる程少くないやうです。

脂漏性の禿頭病に罹れば、第一頭の皮膚は如何なる兆候を呈するかと云ふに、是れにも亦た二通りあつて、一は油のやうな黄色の『ヤニ』が出で一は『フケ』が立ちます、此病氣に罹つて、別に何か惡るい氣持ちを感ずるかと云ふに、初めから何とも無い、唯だ髪の毛が無暗に拔けるから、氣の附く位ゐですそれでは如何にすれば、初に於て此病氣に罹つた事を知る事が出來るか、之に付てはフオルピンクス氏が云つた事がある、曰く脂漏性の禿頭病に罹れば、第一頭の毛が短くなる、故に之を知るには、毎日髪を解き梳り、假りに拔け毛が四十本有りとすれば其四十本の拔け毛が、孰づれも六寸以下であれば、病氣のある事が知れると、是れは頗ぶる面倒な話ですが、斯うすれば知れるに相違ない、そして此病氣で拔ける毛は、唯だに短かくなる計りでなく、細く柔らかで、透して見れば透き通つて居る。

是れは慢性の者ですが、急性のになると、頭部を見れば、何と無ふきたなくして、鼠色の黒點があり、又其れに附着して居る『フケ』は鼠色で其の『フケ』の爲め髪の毛が粘り着き、無理に之を剥がすと、厚つい苔のやうな『フケ』が起き、其下へジク〳〵と濕めりを持ち、赤くなつて居ります、之を自分で癒はさんと素人療治に掛け、無暗に洗つたり又油を塗たりすれば、唯だいぢくり廻して病勢を助長する計りで何の効も有りません。

是の病氣の原因は何であるか或は黴菌の作用とも云ひ或は遺傳性の者とも云ひ、或は腹中の病氣に起因すとも云ひ、今日の處では未だ慥な事は分かりません、唯だ此際婦人諸君に御注意を乞ふのは、其の豫防の方法です、先づ第一は毛髪其者の養生第二は毛髪の因つて生せる土地の養生、偖て之を實行するに

は、左の諸項を能く守らねばなりません、

一、營養を適當にする事
一、精神を適度に使ふ事
一、睡眠を適度にする事
一、頭髮を能く梳る事
一、頭髮を能く洗ふ事

頭髮を洗ふには水を用ふるよりも湯を用ふるが宜しく、湯は水よりも血液の循環を良くします又髮を洗らつてから後色々の油を附けるのは反つて良くありません、髮を洗ふのに使用する石鹼は、加里石鹼が宜しい、加里石鹼は、藥舗から加里、酒精安息香酸の三種を買つて調合すれば、どんな素人にでも出來ます、其分量は、

加里　一三〇、〇
酒精　七〇、〇
安息香酸　二、〇

是れ丈けで宜しいのです。



頭部に於ける血液の循環を良くするのは、毛髮病を豫防するに付て最も必要の事です、彼の兵隊の髮を短く摘みつけるのも、矢張り血液の循環を良くすると云ふ必要に基いたのです、血液の循環を良くすれば頭部に『フケ』が溜まらぬ、『フケ』の溜まるのは、何時も毛髮病の起因となるのですから、平生『フケ』を取ると云ふ事に能く〳〵注意せねばなりません、頭

部の『フケ』を去り、併せて毛髪の發生をなすに付ては、平生如何なる藥を使用す可きか、之に付いては極て適當の處方がありますから序に數へて置きませう、即ち、

レゾルチン二〇〇、〇　ラノリン　一〇〇、〇

パラフイン一〇〇、〇

又他の一法は

レゾルチン一〇〇、〇　ヲレーフ油一〇〇、〇

アルコール一〇〇、〇

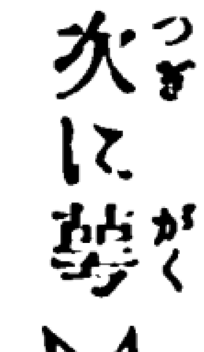
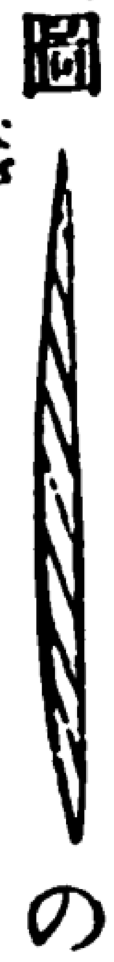
毛髪は婦人諸君に取つては、實に大切なもので、容儀上から云へば、婦人の生命と云つても宜しい位ゐです、故に此毛髪病に付いては、婦人諸君は平生十分の注意と豫防とをして置かれないと、忽ち之に冒され、終には人中に出られないやうな事になります、誠に恐る可き事です。

（をはり）

刺繍

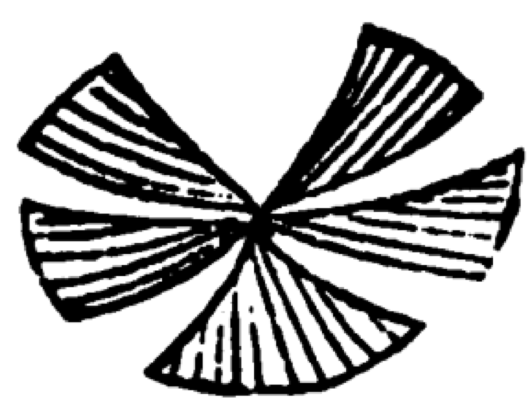
上村百世子

撫子花平糸縫ひ方

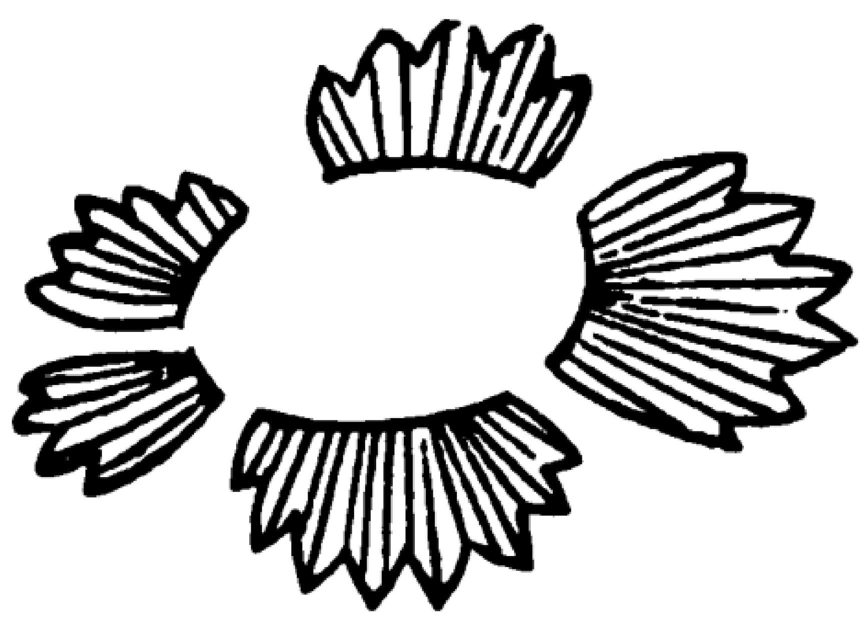
撫子花を縫ひます糸は赤或は時色を用ひまして花を縫ひます葉は前の草色を用ひます花を縫ひますには先づ内側の形ちを白かまにて輪廓通りに縫ひまして一圖の如く致します次に赤色かま糸にて外側を縫ひます二圖の如くです切目の方がよくひろがらぬ物ですから成可く内側の方の針目を込ませる樣にしてかま糸を平に用ひます花瓣の下に在る所は白で立てに縫ひます花は二輪共同じく蕾みは圖の如く赤で縫ひます次に蕚は圖の如く縫ふので有ります矢張り蕾みの蕚も同じ事で有ります花には桔梗の樣にたづなよりをかけます是は赤と白にて前と同じです葉は圖の如くはすに縫ひます

餘り針目が長いとおろしますとうきますけれども短いと勢がぬけるものでありますから適度に致します枝も同じ事で有ります。





一



二

冬の室内及び戸外衛生

(附小兒の養生)　桃花庵主人

極冬の時候となりまして、朝夕の寒氣が中〳〵酷くて、此頃は耐へ切れぬ程の時すらありますから、衛生に注意しないと感冒に犯されたり、又その感冒が原因となつて、種々の病氣を引起す憂もあります故、冬日の室内と戸外の衛生に就きて少しく御話しをする積でございます、善くお守りなさいますれば、先づ病氣にかゝることはないと信じますから、皆樣そのお積りで御一讀を願ひます。

▲室内衛生

住居は寢室便所に至るまで、奇麗に掃除して、その周回の空氣の汚れぬ樣にすべきことは、今更ら言ふまでも無きことでありますが、抑も人は生活の現象として種々の生産物を作るもので、則ち皮膚からは呼吸によりて炭酸を出し、多くの水分を排泄し、又呼吸の内からも一種の臭氣ある瓦斯を發するのみならず、温煖法や採光法によりて、自然に不潔物を生じますから、室内の空氣は、時々新鮮の空氣と交換することが必要であつて、タトヒ如何に寒い日でも、此の換氣法を取らなければならないのであります。然るに此の換氣法には、自然的換氣法と、人工的換氣法との兩樣がありまして、自然的の方は、天井や、床や、壁などから自然と空氣を新陳代謝するので、人工的の方は、戸や障子を開閉して、空氣を交換するのであります、多人數集合の場所又は温煖法を行ふ室内には、不良の瓦斯が多く發生しますから、自然的換氣法のみでは、充分空氣を清潔にすることができませぬから、人工的換氣法を施して、周圍の戸障子を開閉して、新鮮なる空氣を迎ふるのが肝要であります、さうして前に陳べました温煖法と申しますのは、冬期になりますと、四邊の空氣が極めて寒冷になりまして、これに堪ゆることが出來ないから、人工的に温を作りて、體温の平均を求むるのであります、即ち火鉢や、ストウブで室内の温度

を高むるのが、その目的でありますが、たゞ温度を高むるばかりで、これより生ずる有害物を除くことに注意しなかつたなら、利よりも寧ろ害の方が多くなりますから、炭や、石炭の燃燒によりて生ずる有毒瓦斯は、必ず之を屋外に導き去ることにしなければなりませぬ、又この温暖法にもいろ／＼ありますが、ツマリ中央温暖法と、局所温暖法との二つに分つことができます、中央温暖法は、空氣温暖法、蒸氣温暖法、熱水温暖法、温水温暖法などありまして、是等は孰れも室内を汚さずに、一樣に温暖を感せしめますから、誠に此上もない結構なものでありますが、特別の器械と、多額の費用とを要しますから、中等以下の家にては、經濟の點からいつても、家屋の構造からいつても、行ひ難いことでありますから、已むを得ず局所温暖法乃ち火鉢とか爐とかいふ樣なものを用ゐなければなりませぬが、火鉢や爐は多くの有毒瓦斯を發生して、室内の空氣を汚しますから、前申した方法に隨つて、必ず換氣法を行はねばなりませぬ。それ故夜分炬燵にあたりて眠るのは、甚だ有害危險であります、又温暖の程度は生活の模樣によりて、一樣には云へませぬが、學者の說では、左の如く定めて居ます。

一　普通の居室は攝氏の十七度より廿度まで。
二　小兒の居室は十三度より十六度まで。
三　遊戯室は十三度より十六度まで。
四　工場は十七度より十九度まで。
五　病室は十七度より廿度まで。

これが只今の室内衞生の大體でありまする。それから

▲戶外衞生

とは、外出して、身體を寒冷の空氣に曝す時の注意でありますから、體温の放散を調節して、温度を保ち、外氣の寒濕を防ぐ用意をせねばなりませぬ、それには重襲をする必要もありますが、その衣服は温度濕氣の不導體を以て製せねばなりませぬから、成るべく毛織り木綿類を用ゐて、絹布や麻布を用ゐぬ

のがよろしうございます。又此の仕立は身體の各部を壓迫せないやうにして、重襲をしても、充分くつろげることの出來るのが肝要であります、さもないと頸部の如きは、緊搾する爲め、往々血液の循環を不良にして、淋巴腺炎を引起すことがあります、それから色合によりて、太陽の熱を吸收するに、大小厚薄の差別がありますから、室内では兎も角、戸外では、白色がゝつたものよりは、一倍以上の吸熱力ある黒色のものを着るがよろしいと思ひます、また染料に用ゆる色素も、近來は化學的藥品を以て製したものが多くありますから、よく注意しないと、局所の炎症を發したり、中毒を起したりすることがあります、帽子は冬期にあつては、防寒の具ともなり、また塵埃を避くるものでありますから、外出の時には、是非とも被るがよろしうございますが、色は黒くて、量の輕いものをよしと致します。襟巻と頭巾は、覆面繃頸して、天然の寒氣に打勝つことの出來る調法なものであつて、凍傷を防ぐには最も好き方法でありますが、餘り繁々用ゐますことは愼まなければなりませぬ。その譯は、頸部には血管が多くして、温氣の放散を保ち、また皮膚と衣服との間に生ずる温暖の空氣の出で行く所でありますから、人爲の方法を以て、必ず之を温保するには及ばないからであります、又頭巾や襟巻は、一度用ゐると、直に習慣になるもので、之を廢めることが容易に出來ませぬから、自然に皮膚の抵抗力を減じて感冒をひき易くなります、それ故先づ太抵は用ゐぬ方がよろしうございます、足袋と履物とは、足部を壓迫して、運動を困難ならしむるものでありますから、小さい窮屈なものを用ゐてはなりませぬ、靴も同じ道理で、靴下二足を穿くことのできる樣なゆつくりしたものがよろしいです、下駄は桐製のもの、鼻緒は柔かいものを擇び、草履は衞生上缺點の多いものでありますから用ゐぬ方が萬全であります、序でに小兒の外出のことを陳べますが、朝早くや、夕方は抱ても、負つても、屋外へ出すことは宜しく

ありませぬ、衣服を重ねて、身體を暖くしても、肝要な鼻や口は掩ふことが出來ませぬから、風は其處から遠慮なく吹き入つて、鼻感冒、氣管支加答兒などを初め、種々の呼吸器病を引起すことがありますから、能く注意なされて、天氣の好い日なら午前十時から午後三時までの間、戸外へ出て遊ばせることと極めて、其他には滅多に外出させないがよろしうございます、又大人でも少し呼吸器の弱い方は、車に乘ると、氣管支加答兒に罹るものでありますから、まして小兒を車に載せて、遠方へ行くのは感冒にかゝる原因であります、又た小供は四五歳までの間は、大人よりも體温の高いので、大人が五度乃至七度の時にも、小供は七度より八度までの體温を保つて居るものでありますから、寒いからといつて、厚着をさせるのは、よろしくないことであります、肌着などは柔かくて皮膚を害せぬもので作り、毎日か隔日には洗濯して、垢の附かない、清潔なものを着せるのが、宜しうございますが、炬燵などで温めて着せるのは、不必要であるのみならず、往々害になることがあります、冷たいまゝで着せるのは、如何にも寒さうに見へますが、冷たいのはホンの一時のことで、直に體温が宜くなりますから、炬燵で温めて着せて、その爲に感冒を起すよりは、どの位宜しいか知れません、帶は幅の廣い柔かいもので、成るべくユツたりと締めるやうにするが宜しいです、胸部を緊く締めるのは、非常に小兒の發育を害します、又炬燵に寢せること、母親が抱いて寢るのは、斷してやめねばなりません、湯たんぽで温めるのは宜しいが、炬燵に寢せるのは、呼吸器病にかゝる原因となります、要するに衣服の堅いのや、不潔なのを着せたり、又た餘り温くしやうとするのは、病氣にかゝる原因を造ると同じことであるから、善く〳〵注意なさるがよろしい。

少しく、お話が問題外に入りましたが、先づ冬の室内及び戸外の衛生はざつとこんなものであります。

春の料理

女子美術學校講師
石井湧太郎

松竹梅（御重詰）

◎梅、梅あん金飩、

いんげん豆の成べく大粒なものを撰つて用ふるのがよろしいのです、先づ四合程の水に浸して一時間程を過ぎたらば洗つて之れを鍋に入れて水を豆より凡そ一寸も多くして茹るのです、暫らく茹でゝ水を取り替る全く柔らかに成るまでには、左樣、三度も水を取替へるのがよろしくわります、而して充分に茹りたる時に其の湯を少しも殘さず絞りましてから之に白砂糖百二十匁と水一合五勺ばかりを加へて尚之に白味淋三勺と食鹽二匁を入れます夫から文火にかけて其の煑汁の半分程に煑つまる迄で徐々に煑るのです、强火では其の割に砂糖が染みません其の煑上つた時に笊にあげまして其の煑汁をしたみます其所で豆の三分の一丈けを摺鉢に取りまして摺木を以てつき潰ぶします能く摺り潰して此の内に梅びしほを箸の先で三掬ひ程を加へてまた摺り交ぜるので然して前に豆を煑てしたんで置きました汁を此の中に少しづゝ入て摺り緩めます夫れを鍋の中に取つて火にかけて煉りまする。で、餡の樣になる迄飯杓子を以て始終掻きませて居るので夫れがつまりました時に殘りの豆（潰さぬ豆）を入れて尚よく混ぜて冷して置きます。

◎松、松が枝玉子王子の大きなものを入個之を温湯の頃から入れて二十五分間位火にかけて煑抜きまして後ち之を水の内に取つて十分間程冷して置てから殼を剝きます、剝きました玉子は二ッに割つて白味と黄味を分けて別々に皿に取ります而して白味は庖丁で細かに刻みまして、夫れへ砂糖八匁（大匙に一杯と）食鹽一匁（小匙に半分を）加へまして混ぜ合せ裏漉にかけます次は黄味を崩して砂糖十五匁と食

締切期限毎月十五日

繪畫募集廣告

募集規定

一應募繪畫は日本畫たると西洋畫なるとを論せず、又流派材料の如何を問はずと雖も、成るべく時期に適合せんことを要す

一其の素畫なると着色畫なるとは應募者の隨意なりと雖も、用紙の大さは、縱六寸横四寸に過不足なきを好しとす

一應募繪畫は某畫伯に囑托し嚴密調査の上、其中より一等二等の二種を選拔し、當選者へは本社發刊の書籍を贈呈す

一締切期限は毎月十五日とし、當選繪畫は、翌月十五日發兌の女鑑口繪に挿入して發表すべし

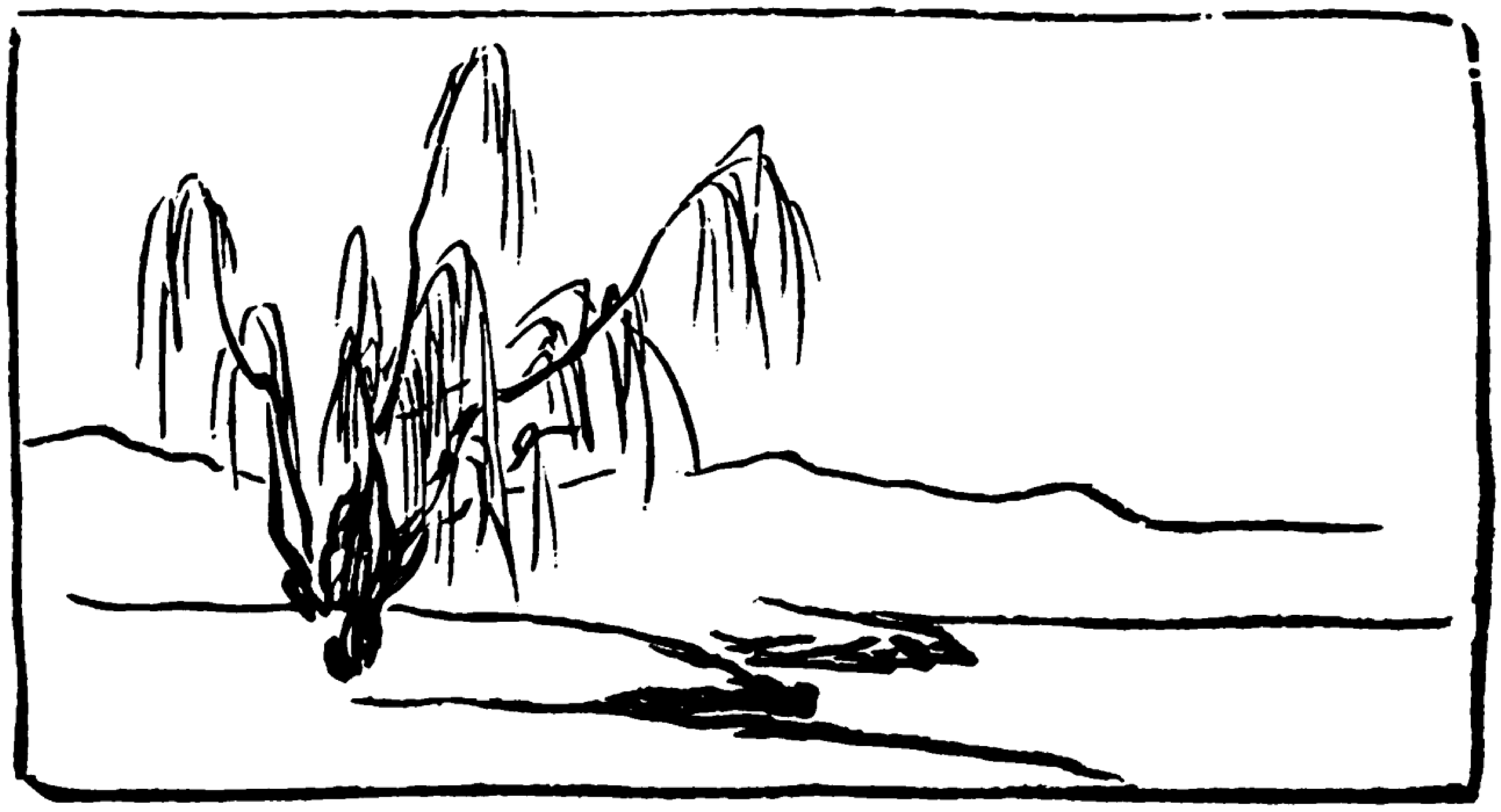
一應募者は左記の切符に住所姓名を記入し、繪畫に貼付し、女鑑編輯局に宛て送付すべし

府縣　市郡　區町村　番地

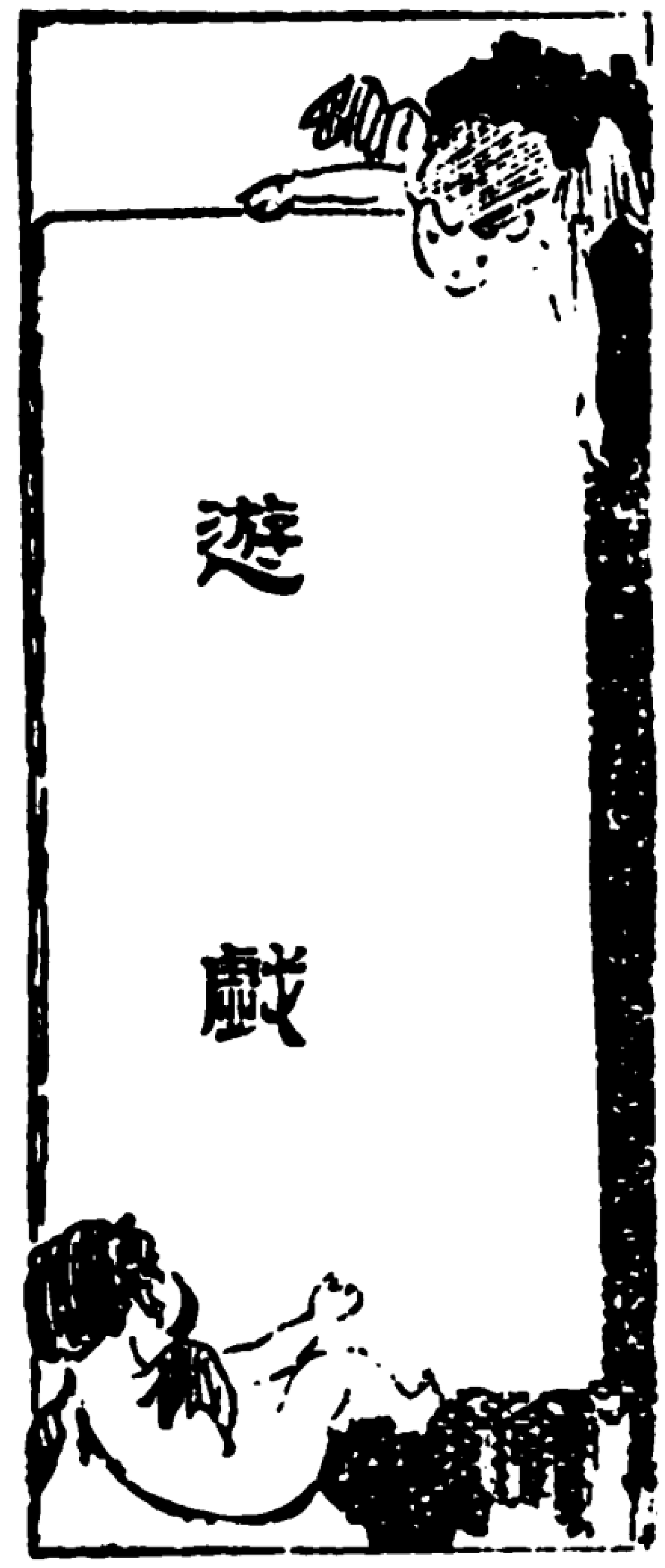
國光社

女鑑編輯局

塩五分を混ぜて白味の跡で之れも裏漉にします之れを布巾の上に白味から平にならし付けまして其の眞中に黄味を細長く丸くして置いて布巾の片端の方から巻きますのです（巻き方をうまくおやりなさい）黄味を眞中として巻いたらば其の巻た布巾の兩端を玉子の動かぬ様に麻糸を以て結びます而して之れを二寸位の幅の板切れの長さ八寸か一尺位の物の上に置いて二本の丸ひ箸を以て其の間を少し離して縦に當てがい箸の兩端を板と共に強く〆て結びます此の如くなしたものを蒸籠に入れて十五分間程蒸します夫から之れを解いて小口から四分位の厚さに切りますと丁度形ちが三階松の様な形となります。



◎竹、裏白椎たけ、之れは椎茸の中位のものを八ツ切て水に浸して置いて柔かくなりました時湯に入れ能く茹だりたらば其の湯をしぼつて煮るのです其の割合は砂糖二十匁、醬油二勺、味淋二勺、水三勺、であります充分に煮染て板と板の間に挾み煮汁をよく絞ります、次に少時其の板の上に並べ置き水氣を乾かせ夫から魚肉の擂り身を作ります、擂身に使ふ魚は身の白ひ魚を用ひます此所にはひらめを用ますひらめが三切身分此の身を取つて骨を去り細かく刻んで出刄庖丁の脊でよく敲き擂鉢で擂りまして擂れたる時に食鹽一匁五分と味淋の煮返し二勺と玉子の白味一勺とを合せ又能く〳〵擂りませ裏漉にかけます然して板に並べてある椎茸の裏に擂身を厚さ二分位に擦り付けて熱湯の内に入れて擂身の白く變るまで湯煮し再び前の煮汁に浸し置き二に切て盛合ます



福引（二）

安藤笹舟

●大八洲　△聖に本。（大日本）

●大和魂　△二本の花。（日本の花）

●八咫烏　△綿糸。（金鵄）

●牛若丸　△御艸紙。（御曹司）

●關帝廟　△唐紙。（支那の神）

●人の性　△膳。（善）

●村時雨　△齒染粉。（葉を染める）

●源朝臣　△饅頭。（滿仲）

●時の鐘　△手鞠。（敵へてつく）

●楠正成　△軟膏。（藥品）（楠公）

●厂來紅　△毛糸。（鷄頭花）

●話上手　△拍子木。（氣をあわせる）

●森蘭丸　△胡椒。（小性）

●大沙漠　△鰆。（サワラ）

●屋形舟　△柳箸。（柳橋）

●紀元前　△太鼓。（太古）

●古遊君　△箸立。（橋立）

●福の神　△塵紙。（拭くの紙）

●堅い木　△菓子。（樫）

●梅の薫　△梅の香。（食品）

●日の出　△干菓子。（東）

●浄瑠璃　△辛粉。（聴くと涙がでる）

●夜の雪　△貯金箱。（知らぬ間につもる）

●支那人　△松脂。

●手品箱　△雲州蜜柑。（皆な種がある）

●淀の城　△菜二把。（浪花）

（以下次號）



雜録

花物語

田中花朗譯

(一) 雪の夜語

寒い／＼冬に成りまして、野邊も山路も、田も畑も、綺麗な鳥が毎も囀ずつてゐた、隣の屋根も、艶麗な花が絶間なく咲いてゐた庭園も、一目銀の世界と思ふ位雪が積ッて、夏の夕燒を眺乍ら、面白く遊んだ小河も、早や部厚な堅い氷が張つて終ひました。美くしい花も此の寒に堪える事が出來ないで來ん春迄は柔らかな芽に包まれて眠つてゐるでせう。

大晦日の空は冴え渡り、寒月は、雪と照り合ふて、四邊は、、、パアッと光り輝き、丁度眞晝の樣で厶います。暮行く年を送る爲か來ん初春を迎へる爲か、朔風の吹き荒むのも厭ひなく、風のまに／＼、左にあほられ、右に吹かれ、見るから怪しい小さな、乙女が四五人、月を圍んで、空を駈り、氣を踏み、節面白の唱歌を謠つて、愉快さうに舞ては踊り、踊つては舞うてゐます。

夜は更けるにつれ、月の明は益々冴へ、五彩の玉のそれかとばかり。目の醒める樣な輝を夜の隈を通して下界の何處にも投げてゐます。やがての十時の鐘が陰々と、かすかに餘韻を傳へたかと思ふ間もなく、

「新年が來てよ、もう春だわ、嬉しいねえ。」

と異口同音に叫びつゝ、空の乙女は、若草の堤を滑り落るやうに、地下に降りて來ました。何れも、雪より白い、綾の裾の長い衣を被つた、漆黒の髮を垂らした、一目乍らも氣が晴々する位綺麗な姫達。

取分け利佐子姫は一番綺麗な姫で、申す迄もなく美くしい襟飾をつけ裳裾にも、頭にも、腕にも、背に

も……身體一面に露の小玉の飾を散してゐます。裳裾のさばく度に白！赤！青！金！銀！の五色を漂はして、輕く雪を踏み、乙姫と云ふ妹と、二三人の朋友と手を引合つて、猶且、聲高く歌を謡うて、森の中へ入つて參りました。

（三）　歌の聲

併し森の戸が堅く／＼閉つてムいますので利佐子姫は力限りに戸をとん／＼お敲きなさいまして、

「櫻花さま、お家！櫻花樣／＼、ゐらしッて？！」と玉を轉すやうな聲で呼立てますと、櫻花は長い寢を醒し、綠の若芽と美くしい柔らかな葉を開いで、やがて見る／＼枝ともなく、梢ともなく、幹も葉も隱れるばかり、乙姫達の頭の上にも森がぼやける位鬱葱した、美くしい花を雨より繁く降せ、しだる枝の糸櫻、霞の罩むる八重櫻白き一重の山櫻、蕾乍の遲櫻、色の鮮な一重の枝ぶりのよいのも交ざつて、今日を盛の春衣を着飾り。戸を開けて、靜々出て參りました。

「櫻花樣お目出度」と姫達が挨拶致しますので、櫻花夫人も、

「お目出度、」と銀の鈴をふるやうな聲で、

「皆樣何を御馳走しませう。何が欲いの！」

と申しますと、乙姫は可愛らしい聲をして、

「もう新年に成りましたから、雪の下に眠つてゐる花を呼び寄せてくださいまし。私一緒に踊つて遊ぶんですから。ねお母樣」と賴みました。

併し風は飈々と、さも寒さうな音を立てゝ、氷りつく雪を吹いて、丁度鵞毛の飛び散るやうでムいます。

「あの風の音を……お聞なさいよ。戸外は寒くつて寒くつて、花も心嬉しく咲かないから、お前の賴を聞てあげる事は出來ません。だけれど、夜の明けぬ中に、私の力で四季折々の花達と面白く遊ぶ樣にしてあげませう。其でもよいでせう。」と櫻花夫人が親切に申されますので乙姫達は大層喜びまして「有難う……さうして被下まし。」と互に手を取合つて、喜

び勇んで、

「花よ、花よ、香ばし花よ、
開けよ、我等の踊ると共に。
花よ、花よ、美くし花よ、
來りて共に、謠へよ舞へよ。」

との歌を朗な聲で、謠ひ乍ら踊つてゐます。

晦日の月は益々冴え夜半の風は針を含んだやうに止間なく吹荒んでゐましたが今しがたより葉打の音もしません位に已で終ひまして其の上皎々たる寒月さへ、春は朧の月夜のやうにや丶霞んで參りました。

（三）　踊らなくッて！

「白梅さん！白梅さん！何處にゐらしッて!!!」と利佐子姫がお呼になると。雪の下から、

「こ丶だわ、こ丶にゐるのよ……雪の下ですわ。」と答へ乍らお友達の白梅は、姫達の様に白い綾の衣を着て、身體から氣が爽々するやうな薫をさせて、雪の扉を押し開けて出て參りました。乙姫は白梅の前近く進み寄り、

「お目出度。一緒に踊らなくつて？」

と勸める言語の終らぬ前、白梅は早も、姫達と手を取り合つて、嬉しさと、樂しさの餘り聲を張り上げて謠ひ乍ら踊つてゐます。白梅は今しがた姫達の踊つてゐます跫音を聞て、一時も早く踊つて見たいと心をはずませて雪の下から出て參つたのです。

斯様に皆で樂しさうに踊つてゐます、足下の雪を押分けて、紫雲英は、紅燄る頭をさし出しましたから、利佐子姫はすかさず、

「ゐらつしやいな紫雲英様、一緒に踊りませうよ、ね、ゐらつしやい。」と切りに勸めなさいますと、紫雲英は眠むさうな聲で、

「もう春に成りまして、……お丶寒いこと、……這麼に寒いんですもの、拙踊れないわ。」

と氣が進まない様子ですから、利佐子姫や、乙姫や、白梅等は、切りと勸めてゐます。

利「よ紫雲英様、紫雲英様つてば、」

乙「紫雲英つてば。」
白「踊りなさいな、ね、那様に寒かないんだもの。」
三人「ね、ゐらつしやいよ……。」
紫「だつて寒いんだもの、這麼に手が冷けつちまうじやありませんか。」
乙「あら……那麼お婆様のやうな事を云つて、……可笑わねえ。」
白「心配する程寒かあ無いわ。」
利「さうだわ、……踊つてゐると、少許も寒かあ無いんだもの、拙等は、夜が明けると宮殿へ歸つちまうんですから、其迄一緒に踊つて被下な。ね後生だから……。」
三人「滅多に風邪を引しや、しませんよ、寒い風が吹く迄にお家まで送つてあげますから。」
と皆で親切に勧ますので、紫雲英も、喜びまして聲を張り上げ姫様と一緒に手を取合つて踊つてゐました。
すると土筆も目を醒して太皷をたゝき、若草は笛を吹き、桃は鼓で調子をとり芍藥も海棠も、さては牡丹、菜の花も寄り集つて、琴を彈ずるもの、ヴアイオリン奏づるもの、ピー〳〵ドン〳〵、ワイ〳〵と謠ひ囃して息もつかずに踊り廻り、樂しげに、年の終の儚なき神を送り、目出度春の元旦を迎へてゐます。

（四）花の勤

餘り踊つた所爲で、稍々疲が出ましたから皆は暫く踊をよして休んでゐました。すると紫雲英は、
「姫様！」と一言。さて「唱歌や踊の面白いこと、這麼に面白いことゝ初めから知つてゐましたらもつと早くから來ましたのに、私眞個に惜い事をしましたわ、……お友達を呼で來てもよござんすか……さう……じや直ぐに呼んできますわ。」
と、やがて蒲公英と舜花を連て參りましたので、
利「おや、蒲公英様、お目出度……貴孃はいつも春の離別に誘はれてゐらすのに、悲の使にしては、餘

り優すぎるはねえ」
と四近を眴し、蕣花に向つて、
「おや……蕣花様もゐらして、貴様は晩の花を彩つて、夏の暑もいとひなく澤山な慰藉を施しなさるさうですね、頼もしい蕣花様だこと、」と切と喜んでゐますと、蒲公英は、
「私は悲しいお使になるんですが、妹の雪の花こそ、末の樂の多いものです。」
と申し上げますと雪の花は、其可懐聲を開て、
「申し上げるも畏れ多い事ですが、妾こそ春の魁をするんですわ、……ね、紫雲樣。」
と云ひ乍ら恭しく姫樣の前へ參りました雪の花のいじらしさに皆の花は、
　花の使、春の使。
　春の使の雪の花
　霞の衣、雪の帶、
　美しき、優しき雪の花。
と一勢に囃しましたので、澤山な他の花は、此聲を聞て目を醒して、急いで姫の前へ駈て參りました。
一番早くかけて來ました、菫は「皆樣お目出度、」と丁寧に挨拶をして、又、
「私は菫と申すもので、忠實の使ですが、皆樣どうぞ思召して。」と含恥乍らも確乎と申しますと、利佐子姫は莞爾なさいまして、
「さう……貴孃は忠質の使ですわ。そして又眞實と樂との代表者ですよ。」との言葉も終らぬ内、雪の花は罌粟と福壽草と百日紅とを連れて參りました。
「私は世界に、安全と忍耐を與へるんです、だから私を家へ飾つて置くと、大變福が舞込んですとさ。そして、よく心が變る忍耐のない人を勵ますんですわ。」と發のはつれをかき上げ乍ら物語るのは福壽草です。で、百日紅も瘢走つた聲で「私は……」と前置して、
「妾も滅多に福壽草樣に劣はしないわ。」
と力みますと罌粟は、やがて、紅の燃える樣なショールを脱いで、險な目で四近を瞻し、

「人を慰藉るのは私の役ですわ。だから私は人を慰藉て、希望を固くさせやうと思つて此世に出て來たのよ。」
とさも高慢て申しますから、敗ぬ氣の菫は、隣にゐる雪の花の袖をひいて「罌粟樣の高ぶる事！何でも忠實で、眞心を罩てゐますと、其でいんですわ。」と囁てゐます。

（五）雪の褥

斯樣に多くの花達が中よく、樂しげに話し合つて、もう大分疲勞も無くなりましたので、夜が明けぬ前に、思ふ存分散々踊らうと相談してゐますと、突然に、
「私は自由の代表ですわ。」と確乎した朗な聲を立てて出て參りましたのは、柳です。續いて菊と薔薇とが手を牽き合つて靜に參りまして、利佐子姫の前へ出て申しますには、
「敬愛なる姫樣！妾二人は、愛の代表者で厶います、愛こそ誠に貴いもので愛が厶いませんければ、喜も樂も厶いません。」
「さうです、愛を表はすにはお二方に及ぶ者は滅多に厶いませんよ。」
と内向勝に靜々出て參つたのは雁來紅。



とやかうしてゐる內、微乍らも、花束の樣な旗、旗の樣な花束を、高くかざして、銀の雪の世界を彩つて、遠くから、
「私は貧困の代表者です。愛に和した貧困の代表者です。だから甚麼に苦しい思をしても衷心はいつも春の樣で優美ですわ。」と叫びつゝ走つて來たのは扁

蒲なのです。
「私の愛は露の情の干ぬ間なんですから那樣に人樣を慰められませんわ。私ア何より其が殘念んですよ。」とさも哀れつぽい聲で、訴へる樣に言つて參りましたのは、撫子と石竹の二莖。
「あら、那樣事を……此の目出度席で……。姉妹はさう〳〵御心配なさいますな、私は力の及ぶ丈けお助もし、お力にもなりますから。心置なく朝方まで遊んでゐらつしやい。」
と白梅は有繫は年をとつてゐる丈け、親切に勞はつて、利佐子姫と乙姫との前に參りまして、
「もう、東が白むにも、左程の間も厶いませんから早く櫻花樣にお目通り致しませう。」
と、姫樣を前にたて丶澤山な花達は後から、ぞろり〳〵續ゐて參りました。
櫻花夫人は、一々花達にお目通りなさいまして、「這麼に寒いのに關はないで、よく〳〵來てくれた事」と大層お喜びなすつて、澤山の御褒美を被下つたのみか、尙も親切に、
「さあ〳〵早く、お遊びなさい、さうしてゐる內に、夜が明けて了ひますから。皆で風邪をひかない樣に中よく遊ぶんですよ。」と申されました。
其から花達は大勢で樂しさうに、舞踏し。輪になつたり、散ばつたり。此處にも一群、彼處にも一群。何れも劣らぬ、朗な玉を轉ばす樣な聲を立て丶踊つてゐます內、いつしか身體が疲勞まして、思はず知らず寢入つて終ました。
お二人姫樣は、其儘臥床へ運んで行き、元の通り雪の褥を着せて、やがて喜の歌を唱ひ乍ら、月の光を辿つて、さも輕々と天上の宮殿へお歸りになりました。
……年の終の愉快さよ。……年の始の目出度さよ。

（完）



水戸の婦人（五）

東臺小隱

皆川氏の忠婢

威公の時幕府天下に令して耶蘇教を嚴禁せらる、水戸藩士皆川藤右衛門も或人の法を犯して該教を信せし罪に連座して獄に下されしが不幸にして獄中に死せり。禁教の法は其家族に及ぶの常なれば軈て其三兒を捕へて獄に下しぬ、先是皆川の妻病で將に死せんとするに臨み三人の兒を召仕の下婢に托し何卒我身に代て養育なし呉れよと遺言して果てける、此婢氣慨ある者にて其家に留まり鞠養尤も至りけるに今此の大變に遇ひ、主人は獄中に死し三兒共に獄に下されしかば婢は悲泣して已まず、己れも與に獄に入らん事を請ひしも役人等許さゞる故、婢涙と共に陳じて申す樣此の三人の幼稚人々は先立れし主人より妾に托されしものにて其聲猶耳に留まれり、且つ三兒皆幼稚なれば妾の傍に侍るなくんば死し給はんこと旦夕にありぬべし、妾座ながらにして其死を覩んよりは寧ろ三人に先つて死せんには如かず、若御慈悲により從て獄に入ることを得ば妾の幸何事か之に如かんと、至誠面に顯はれしかば役人も其言に感じて之を許せしゆゑ相共に獄に赴きぬ、觀る者感嘆して流涕せざるはなかりしと、婢獄中に在て三兒に奉仕すると二十餘年の久しき終始一の如くなりしかば、威公其節義を賞し、祿を賜ひて人に嫁せしむ。又藤右衛門の子源太夫堯重は家婢節義の故を以て寛文四年罪をゆるされ歩行士となり、元祿元年祠堂番となり、子孫傳へて今に至ると云。（舊誌、皆川氏家譜、參酌）

賤しき家婢の身を以て主家滅亡遺孤獄に下さるゝの大變に當り、節義凜然として渝ることなく、舊主の遺孤を獄中に奉ずる二十年の久しきに至る、恐らくは古の忠臣とても多くあらざる所なるべし、威公之を賞して歸する所あらしめ、且つ皆川氏の後を祿して婢の志を成さしめ給ふ、其至仁

宏量東照公の風あるを覺ゆ。

笠間氏幼君を輔導す

笠間氏は名をきやと云ふ、笠間政員の妻なり、政員の歿せし後は後宮に給事して老女となり良公より命せられて幼主治保君(文公)に奉仕せり。文公幼なき御時嬉戯を好み、或は木偶を弄し、三弦を彈じ給ふ、氏深く之を憂ひ、侍臣徳田庸と心を同ふして輔導し、如何にもして此戯を廢止せしめんと工夫の末、庸は自ら謠曲及び能を學びて公に勸めしかば、公是より謠曲を好み俗間の鄙謠を止めらる、又庸か熊阪の能を舞ひ、眉尖刀を揮ふて縱横に奮擊するを御覽せられ、勇ましき事に思召されて能の御稽古あり、遂には武藝を嗜ませ給ふに至りぬ。公十六歳にて良公の後を襲け給ひしか頗る酒を好ませらる、笠間氏諫めて申す樣、先代の御失徳は職是によれり、公には宜しく御愼みあるべしと、憚る所なく諫しめ參らせ、猶庸をして酒誥を講せしめければ公遂に酒を止めらる、公又嘗て加留多の戯を好ませ給ひし故、笠間氏の考案にて蒙求千字文を書して骨牌に代て之を献せり、公後文學を好み、德業海内に顯はれ、尾紀二公と與に幕府を夾輔し、朝野倚賴して天下の柱石と爲すに至りしは、庸と笠間氏の力なり。(侍坐危言)

君を善に導くには其々手段なかるべからず、然らされば忠言も耳に逆らひ徒らに死して益なきのみか、君主に惡名を負はしむる者古今其例に乏しからず、此笠間氏の如きは龍逢比干の心を以て、蘇秦張儀の術を行ふとも謂ふべきものならん乎。且其功を贊るに徳田庸あり、其事頗る院本先代萩の政岡と松前鐵之助の爲所に似るは一奇とすべし。

香取照女の孝行

照女は茨城郡小川村の人、香取氏の女なり、父は閑介良恭と稱して水戸の運送手代となり、人と爲り誠ある者にて歌を詠じ物書ことを能せり、照女幼なきより衆に異にして假にも世の童女と戯をなさず、よ

く父母の戒を守り、手習讀書にのみ心をゆだね、やや人となるに及びて親に事る道恭しく、貞信和順にして形容づくりも當世の流行に習はず、凡て人に親しみを求むる事もなく、唯ひたすらに父母の側に在て衣を縫ひ食を調し、二親の心を慰ぐさむるに意を盡せり、文化七年十一月と云に父歿して後は童女の教授を業として母を養ふと彌愼めり、せは〳〵しき朝夕の營の中にも父の靈を祭ること又生に仕ふるに同じく、献物など朝暮に怠らず、翌年の其月迄は正しく精進潔齋して少しもたゆむことなく、折には人の贈物或は庭前の草花菓子など初めて花さきたるまさかに實る物をばこま〳〵と求め、携て墓前に手向とし、月々の墓參は風雨霜雪と雖も聊か怠ることなし、常は門外に出ることも稀なるに、忌日の勤は斯の如し。又父の冥福を祈らん爲に自ら法華經を書寫して菩提寺に納む、其筆を執る日は殊に精進潔齋し、八軸の書寫を畢る迄三年の間、其謹愼尋常ならず、郷黨の人皆照女は實に三年の喪をつとめ其行狀古人に耻ざる者なりと云合へり、家もとより貧しければ母の衣服も美しきにはあらざれどもよく穢をさりて常に清淨なるを着さしめ、裁縫の業をゆるがせにせず、又物書ことは亡父の筆法を守り、歲未だ廿歲に滿ざるに世の婦女にはまれなるべき筆跡なり、教授の道も懇に衆をいざなへば教を受る童女等朝夕のふるまいみだりがましき事なく、皆同じ心に相昵み互に信を盡せり、其孝貞の行狀郡廳に聞えければ郡廳事を具して水戸府に告げ、物を賜ふて其節を賞す、實に文化十年の事なり、郷黨の人其傳を作り上木して國內に公にす。初め世の人香取氏の名家なるを知れども其詳細を知る者なし、照女が傳を作るに及び其家を捜りて家系幷に古文書十餘通を得、爰に至て始て父祖の名をあらはせしと云(照女紀事)世の照女の傳記を讀むもの或は退嬰を以て之を嘲る者もあらん、然れども近時の女學生中には彼の所謂虎を畫て成らず却て狗に類する者少なからず、寧ろ照女の謹厚にして過失少なきに採ん哉。

辰年の回顧錄

半佛生

明治三十七年の今年は、實に辰の年に當ります、明治聖代の辰の年も、元年の戊辰から今年の甲辰に至る迄、都合三回を重ね、今年が其の第四回目です、斯の辰と云ふ年は、我々日本臣民が永世肺腑に銘じて忘る可からざる芽出度い年なので、明治元年の戊辰の事を思へば、聖德の廣大無邊にして、海岳も啻ならざる事が知れます、今試みに既往に遡り、戊辰に於ける出來事の梗概を追想して見れば

○此年に德川慶喜大政を返上された○天皇南殿に御し五事の御誓約があつた○江戸が東京と改まり之と同時に親政の府となつた○天皇御位に紫宸殿に即かせ玉ふ、聖算十七、年號を明治と改め一世一元の制を定められた○車駕東京に幸せられ始めて東京が帝都となつた○此年に皇后陛下の御冊立があり又天長節の儀が行はれた

往古來今是れ程芽出度い年は無いのである、其次ぎの辰の年は如何にと云ふに、是は十三年の庚辰で是年は政論の非常に沸騰した時代で、種々の出來事が其間に演ぜられた、之を繰り返へして見ると

○愛國社大會を大阪に開らき、社名を國會開設願望有志會と改め、片岡健吉、河野廣中等九萬の有志を代表して、國會開設の事を元老院に建白した○政府は已む無く集會條例を發布した○板垣退助岐阜に於て相原尙褧に刺さる○車駕山梨三重に行幸○東京大阪暴風大雨

斯くの如く隨分騷々しい年であつた、其次ぎは如何ん、是は二十五年の壬辰で、是年も亦た政黨騷ぎがやかましく、品川彌次郎氏が内務大臣となつて、大ひに選擧干涉を試みた時代である、其年の出來事は

○衆議院議員臨時選擧が行はれた○品川内相此選擧に對し大ひに干涉を試みた○品川内相罷めらる○帝國議會停會を命ぜられた○兩院議權の解釋を異にし親裁を仰ぐに至つた○伊藤博文内閣首相と

なる○大審院長弄花事件起る

以上明治年代の過去に付て見れば、辰の年は强がち跳ね上がると云ふ譯でもあるまいが、概して活潑な事故の多い騷々しい年であつた、然らば今年の辰の年は如何あるべき、騷々しくば十分に騷々しかれ、事あらば魚鱗の如く紛起せよ、沈靜は社會進歩の道にあらずして宴安は實に鴆毒である。

其れから又進んで物數奇にも、德川氏の時代に遡り、辰の年の出來事を取調らべて見ると、安政三年の丙辰は隨分多事な年であつて、其年には英米露の軍艦下田、長崎の二港に來て、頻りに通商貿易を求めたが、國論一定せずして、今にも外國との戰爭が起るかと、朝野安き心も無かつた、此年に老中堀田正篤外國御用取扱となつた、幕府が蕃書調所を飯田町九段坂に置いたのも此年であつた。



更らに進んで弘化元年の甲辰は、十二代家慶の治世で、平穩無事、天保三年の壬辰は、十一代の家齊で、此年に鼠小僧及び賴山陽が死した文政三年の庚辰も家齊の世で、別に記す可き程の事も無かつた、文化五年の戊辰（十一代家齊）は頗ぶる多事な年であつて江戸には大洪水があり、幕府が蝦夷の經營に着手したのも、此年で間宮倫宗がカラフト、シベリヤの探險を遂げたのも此年であつた、歌人の橘千蔭が又此年に死んだ。寛政八年の丙辰(十一代家齊)は無事で、天明四年甲辰十代家治の時、開國の大達物井伊直孝が大老となつた、此年新番佐野政言なるもの、若年寄田沼意知

を殿中に傷つけた。
安永元年の壬辰(十代家治)寶曆十年の庚辰(九代家重)共に江戸に大火があつた、寛延元年の戊辰(八代吉宗)元文元年の丙辰(同上)無事、享保九年の甲辰(同上)此年に英一蝶、近松門左衛門死し、細井廣澤幕府に召された。
正徳二年壬辰六代家宣の時、新井君美君命により、オランダ人と問答をした、元祿十三年庚辰(五代綱吉)水戸烈公が薨ぜられた、元祿元年の戊辰延寶四年の丙辰、寛元四年の甲辰共に五代綱吉の世で無事承應元年の壬辰四代家綱の時、浪人別木庄左衛門林戸右衛門三宅平六、藤江又十郎等亂を起して、捕らへられた、寛永十七年庚辰(三代家光)無事、寛永五年戊辰(同上)長崎の耶蘇教徒を罰す。
元和二年丙辰二代秀忠の時徳川家康薨ぜられ、本多正信、池田利隆相次いで卒せられた、家康に東照大權現の號を賜はる、此年煙草の流行漸やく盛んなるを以つて之が栽培及び賣買を禁ぜられた。

慶長九年甲辰(二代秀忠)無事此年に黒田如水が死なれた。

(をわり)

夢がたり

松濤 伀

昔から初夢といふ事をいふが、之に就て古來種々の話がある。
多くの人々は知つて居らるゝであらうが、彼の源賴朝の室たる平政子は、妹の吉夢を買ひ取つたために、遂に天下の覇者たる賴朝の妻となることが出來たのだと云ひ、又彼の豐臣秀吉の母は、一夜日輪懐中に入ると夢見て、秀吉を受胎したと云ふが、斯のやうな夢の話が宇治拾遺などにも載つて居る。
彼の大納言伴善男と云へる人は、佐渡國の郡司が從者であつたころ、或夜京都の東大寺と西大寺とを踏跨いで立つた所の夢を見たので、翌朝覺めてから餘りのをかしさに、其事を妻に話すと、其妻は日頃

心得の惡い婦人であつたので、今の夢を判斷して、此は大方良人が股を引き裂かるゝのであらうと悟り、斯々と良人に話すと、善男は非常に落膽し、何か兇事がありはせぬかと萎れ返つて居た。すると案の掟、郡司の處から早速出仕せよとの呼出しに、さてこそ我身は罪せらるゝ事かと、氣は進まぬながらも往つて見ると、郡司は熟々と善男い顏色を永見た後、其方は出世の前兆たる吉夢を見たが、惜しい事にはそれをよしなき者に話したゝめ、遂に終りを惡くして了つたと云つた。さては意外なる郡司の詞に、善男は先づ安心をして居ると、間もなく身は京都に出で、禁裡に仕へ、累々昇進して大納言の榮職を辱なうするに至つた。が、軈て惡心萠して應天門を燒きし科に依つて、流罪に處せられたと云ふ事が同書に見える。

又世に吉備大臣と云つた吉備の眞備は、親の國勝が未だ吉備國の郡司で在つた頃、一夜ある夢を見たので、翌日夢を占ふ女の許に、其夢を占はせに行くと、我より先に來て居た者がある。それは國司の息子何某とて、是も昨宵の夢合せに來て居たのであつた。で、眞備は此息子に會つては面倒だと思つたから、密かに一室に隱れて彼の夢は甚麼夢かと偸聞きをして居つた。とは少しも知る由なき何某は、自分が見た夢を女に打明けて卜ひを乞ふと、其女判ずらく、此夢は上々吉夢であつて、貴郎は乾度大臣に昇りたまふといふ前兆でありますと述べた。何某は之を聞いて大に喜び、早速纏頭に衣服を脫いで女に與へ、勇むで我邸に立ち歸つた。

入り代つて吉備の眞備は、女の前に來て云ふに、今の人の夢を乃公に賣つて貰ふことは能得まいか？と、女の云ふには、若し貴郎が其處で、今の人が言つた通り申さることなら、買ふことが能ましやう！是に於て眞備は先刻國司の息子何某が言つた如く、寸分違はず述べますと、女は、それは至極上々吉夢であつて、貴郎が必ず大臣に昇りたまふといふ前兆でありますと答へた。で、眞備は大に悅むで、衣服

を脱いで女に取らせ、勇むで歸つて往つたが、後果せるかな眞備は、唐へ留學を命ぜられ、歸朝の後は大臣にまで昇進し、又國司の息子は夢を取られて了つたゝめに、一生下司で終つたとある。

これは又初瀬の觀音に、何卒福を授けたまへと願つた人の夢に、觀音が現じて、汝は今世に德の無き者に生れ來つるなれど、怠らず毎日の祈願なれば、少しばかりの德を取らせん、汝明日疾起き出で、最も初に眼に入りし物あらば、必ず其を拾ひ取れ！との意味を告げられた。で、其人は大に喜び勇むで翌朝疾く起き覲しに、只一筋の藁が其所にあつたから、早速それを拾ひ取つて表外へ行くと、一匹の虻が何處よりか飛むで來て、五月蠅く蒐るので、ソツと其虻を掴み、件の藁の尖に結えて木の枝に括りつけ、路を彼方に歩むと、途中某公卿の君達に出遭つた。君達は其人が手にせる虻を見て、從者に命じ、彼の男の持ち行くものを取らせよとあるので、從者は命のまに〳〵其人の側に來り、其虻を呉れと云ふ、元より惜しくもなき物ゆゑ、其人は快く其虻を枝に結えた儘贈つた。すると君達は喜むで、其禮として大きな蜜柑を三個其人に與へた。其人は之を貰つて又行くと、今度は向ふから來る貴婦人があつて、咽喉が乾いて水を求めるが其所邊に無くて困るとの話、其人之を憫れむで、持ちたる蜜柑を貴婦人に與へた。貴婦人は喜び之を受けて渇を凌ぐ事が出來たので、其禮として布三反を其人に贈つた。それから其人は布三反を持つて又向ふへ往くと、或場所に馬が斃れて居るに、驚



いて能く見るとなか〳〵の名馬。で、其主を尋ねて馴れた馬を此布一反で買つて呉れと頼むだ所が、早速承知して呉れたから、其處で一心になつて觀音を口に念ずると、忽ち其馬が蘇生反つたから、直に其馬に乘つて道を急いだ。軈て或村の入口まで來ると、其所には今しも何方へか旅立うとする人の家があるので、其所へ往き、若しや此馬を買つては呉れぬかと尋ねた所が、丁度幸ひ欲しいと思つて居た所だからとて、早速相談が纏まつて、其人は馬一匹のために、其家の田地三町歩ばかりを我手に入れる事が出來た。で、其人は大悦び、これ全く觀音のお陰であると、夫から其家に住ひを定め、田地を耕し、一生最と安樂に此世を送る事が出來たといふ話がある。

若しそれ這個片々の物語ながら、能く〳〵味ひたらんには、尠なからず興ある事ならんと、其一二を斯くは物しつ。

（をはり）

女優の化粧法

（カーマンセラ孃の化粧談）

▲意匠を凝らす　化粧は女子の嗜みですから米國の婦人は化粧に就ては色々苦心しますが巧拙に依て美にも見え醜にも見へます殊に私共は隨分熱心に研究致して居りますけれど何うも苦しんだ割に拙劣で困りますが私が大阪の博覽會で興行中に一日大阪の貴婦人方に化粧して居る處を御覽に入れたことがあります、ケレども未だ日本にない化粧品があるので遣つて御覽なさいとお勸め申す譯にも參りませんでしたがマア此樣な順序に化粧品を使用うので有升。

▲化粧の苦心　最初素顔へ塗けますのはクリームの練つたので日本の花筏より少し軟かに出來て居ます、之れは私が工夫したもので米國にも賣品には御座いませんが之れを顔へ萬遍なく塗り兩方の掌で磨込み濕つたタオルで拭取つて仕舞ひます、次ぎには練白粉で之れは矢張りクリームが混せてある丸い

コスメチックのように出來て居ますが之れで顔を塗り、又其次ぎには煉紅を兩頰へ刷き頰へ一面に薄す り塗込みます之れは肌を肉色に見せる爲です夫れが濟むと桃色の白粉を顔一面に塗け絹スポンジで磨るのです此度は紅粉を兎の足で塗りますが之は白粉が黒ずんで見ぬ注意であります。

▲愛嬌を添える　顔の色を化粧するのは之れで終です此齊木筆は眼の上間縁から下間縁を彩つて眼尻を長く引くのです斯う見ると眼が大きく見えた上大層愛嬌が付きます、黒のコスメチックがありますが之れは火で煖めてドロ〳〵になつた處を上睫毛と下睫毛へ着け夫れから兩方の眉毛へも塗ります化粧いたしますと眉毛が白粉に埋つてしまうから眉毛の顯著りする爲に致すのです此黒コスメチックを睫毛へ塗りますのは熟練しませんと眼球を火傷します故沈着て遣らないと怪我をすることがあります。

▲目元口元と鼻　まだ此れ丈けでは全く化粧は濟ませんナカ〳〵面倒なものでしてまだ眼元へ紅をささなくてはなりません夫れが濟んだら口元へ紅をさすのです之れは日本とは少し趣きが異つて日本の婦人は下唇へ紅をさすばかりなれど私は上唇へも紅をさします御覧下さい斯ういふ工合に中指いさきへ紅をつけて上唇の中程へ一寸着けるのですが内部へ濃くぬるようにします下唇も中央へ一寸着けるのです斯うすると口元が可愛らしく見えましよう次には鼻の穴ですが之れへも紅をさゝないと黒く見えて誠に見惡いものです、先づ顔は之れで悉皆お化粧は濟みました今度は頸ですが之れも前のようにクリームを塗つて夫れを拭取つて粉の白粉を着けます

▲美人の評　之れでお化粧は出來上りましたが手で觸つても日本の化粧のようにはげる事は御座いません、又之れを落すにも雜作のない事でクリームを塗つて拭けば元の素顔になりますが此お化粧の仕方を大阪の某紳士の妻君から是非傳授して呉れろと態々手紙を寄越した方があります、鬘は二通りあつて前鬘に後鬘で孰れもピンで留めるのです、私がお

化粧をして鬘をつけますとヨク戯言方がありまして お前は美人だなど〻云つて下さいますが鬘を取つて素顔になりますと褒めて下さる方もありませんです詰らないお咄しですがお化粧は大切ではありませんか。

▲滑稽な咄　大阪に居るとき博覧會の麥酒屋の女中を前の化粧法で悉皆お粧りをさせ私の冠る鬘を被せ西洋服を着せましたら誰れも日本の婦人と見た者はありません鼻の格好などもお化粧の仕方で高く見えます、現に同じ麥酒店の女中でさへも見違へて居ましたが鬘を取つてお粧を落したら元の麥酒店の女中さんとなり驚いた方があつて一寸滑稽でありました。

（をはり）

太陽の話（甲辰元旦稿）

山岡超舟

天の戸に朝寝はあらじ初日かげ

と麥林舍乙由が云ひけん如く、寂寥沈靜たる殘夜の色も、やがて東天紅と鳴き立つる鷄の初聲より次第にうすらぎて、いつしか新年の山の端ほのぼのと明け渡れば、東海の波に洗はれ出づる旭子の、忽ち我が帝國全州に日足を延ばし、其の餘勢は高麗唐土におよび、瞬時間に東半球の全面を照らして、眼界みな新なり。

さし出るこの日の本の光より　　宣長
高麗もろこしも春を知るらん

去年の暮より待ち設けて立てたる門松も、今朝は殊更みどり濃やかに千歳の色を含み、家々の門戸に掲げし日章旗は、初日の影に輝きて麗はしく、先づ陽光を拜して、茲に明治三十又七年の元旦を迎へぬ。

後村上院御製
いづる日の春の光はあらはれて
年たちかへる天のかぐやま

年々歳々同じ日影にしあれど、國運の年と共に旺盛におもむけば、彌やが上にも彌や芽出度、是れひと

へに、列聖の積威、聖皇の稜威によること、今更申上ぐるも畏ければ、たゞ謹みて、陛下の聖壽無窮を祈り奉り、靄々たるまどゐに屠蘇酒を酌み、雜煮餅をいはひて、諸人と共に國家の萬歲を祝ひ奉る。

ゑみ榮えのぼる日影を始めにて　　弥夫
物みな清き今日にもある哉

年立ちかへる空の景色、曇り勝なる去年とは變り、麗かに晴れ渡れば、賤が垣根の中だにも、雪間の草匂やかに色づき初めて、霞ゆく山に木の葉も打ち煙り、何所ともなく、梅匂ひて、獅子舞、鳥追、凧の唸弓、羽子つく音、門禮者、さては昔ながらの風俗みやびやかに、節おもしろく誠に目出度う候ひけると、皷を鳴らして萬歲を祝ひける年の始めの豐けさ人の心も自ら延らかなるは、偏に初日の出の賜にあらざるはなし。

あら玉の年たつ今日は心さへ　　知紀
身さへきのふの物としもなし

されば祥瑞著しき朝暾を拜すると同時に、太陽は如何なるものなるか、又如何にして吾人の住家なる地球に、日光を撒布するものなるかを、聊か新年の賀辭に代へて、其の概略を摘んで諸媛に呈すべし。抑も太陽は、惑星と同じく、一碧玲瓏の空際おのづから、一定の軌道に沿ひて轉行し、殆んど二十六日を以て一回轉するものなれども、そは我が地球上の人類が、容易に見得べくもあらず。尤も日出、日沒は全くこれに關係なく、地球の回轉によりて生ずることは、地理學を講習したまふ諸媛の、已に知らるる所ならん。吾人が肉眼にては、太陽も朱盆の如く小さく、或は大盥の如く、其の視力によりて大小を異にすれど、眞の大さは驚くべき一大圓體にして、直徑八十六萬一千四百哩を有し、我が地球直徑の凡そ一百九倍に當り、地球面積の一百八十二萬六千倍ありと云ふ。今假に地球を八十日間に一周する旅行者ありて、なほ太陽を一周せんとせば、殆んど二十四年の歲月を要すべく、又地球を以て三寸徑の小球となさば、太陽は當に三十二尺徑の巨球となすべく

其の比較的距離は三千尺の遠きに及ぼすべく、其の重量の如きも、地球に三十一萬五千倍すべきなり。而して地球は太陽を去ること、九千二百九十六萬五千哩の距離に在れば、吾人が天高く仰ぎ見て、眼に朱盆や、大盥の如く推知せらるゝも、敢て無理にはあらざるべし。西暦一千六百十一年に望遠鏡を以て天文學者ガリレヲ及びファブリタスの二氏が、殆んど同時に太陽面の諸所に、無數の黒點を發見せし以來、日に月に進み、今日に至りては、其の運動形狀及び其の配置の狀況に至るまで、能く了知するに至れりと云ふ、人智の發達まことに驚くべきの極みならずや。蓋し黒點は太陽面上に、一様に分布するにあらずして、或は多き所あり、或は尠き所あり、其の數も年によりて増減を生ずるものにして、其の増減は磁力の變化と同伴するは、疑ふべくもあらず、太陽の回轉を測定するには、必らず此の黒點の運動に依らざるべからざるなり。太陽を組成せる物質は殆ど我が地球を組立つる物質に異ならねど、只表面の外圍は、高熱の瓦斯を以て掩はれ、此の部分には鐵、銅、亜鉛、ニッケル、ソヂャムなどの如き種々の金屬も、悉く瓦斯體となり存在し居るものにて、此の瓦斯體こそ遠く隔りたる地球にまで、光線を與へ温熱を給する靈妙なるものなれ。尤も太陽の形狀性質に付き、詳述せんと欲せば、第一フォトスフエー、第二黒點、第三ファクユリエー、第四クロモスフエャー、第五プロミネンス、第六コロナの六條につき、順次講せざるべからざれども、新年早々理屈



めかすも、如何と思へば、菅の根の春の日長にゆづり、茲には驚くべき光線の速力を一言すべし。

地球の周圍二萬四千哩を一周するに、一時間二十哩の滊車に乘じて、晝夜間斷なく走るも、正に五十日を要すべく、之れに約十倍して、即ち五百日を費せば、地球より月世界に達するを得、之れより約四百倍なるを、太陽までの距離とすれば、五百年の長き歳月を經ざれば達すべからず、然るに光線は是れに反して僅かに八分間を以て達すと云ふ。おそらくは森羅萬象中、最優等の快速なるものといふべし。

宇宙の廣大無邊なるは今更いはずもがな、太陽は即ち此の宇宙の間に、太陽系と稱する一團體を組織し其の中心にありて、八個の惑星と、百三十二個の小惑星と、十八個の陪星などを周圍に配付し、其れ等と共に絶す運動をなしつゝあり。なほ太陽系につきては、述ぶべきことゞも尠からざれども、餘りくだくだしければ、わざと省きぬ。

あはれ火の禮拜、水の禮拜、山川草木禽獸虫魚をすら禮拜せし、頑是なき古代の國民が、枝を交へ草を結びて棲息する頃より、麗はしき光輝を發表する太陽の偉大に驚きて、神とし崇めて禮拜せしも、洵に所以なきに非ざるなり。

たなつもの百々の木草も天照す
日の大神のめぐみ得てこそ　　宣長

實に日光の恩賜は、吾人々類にとりては、直接に間接に、片時も其の惠に浴せざるはなく、人生の樂事幸福、總べて其の源を斯に發するを思へば、須らく其の德をたゝへ、以て毎朝感謝禮拜すべきなり。

仰ぎても畏きものは天てらす
ひるめの神のみ影なりけり　　濱臣

假りに若し太陽をして、一日其の光と熱とを放つことを忘れしめば、如何に恐るべく、悲むべき光景は目前に生じ來り、山の蒼々たるも、水の泱々たるも、美なる花も、靈ある人も、其の他の萬物も、何に資して生存するを得べきか、美なる物は枯れ榮ゆる物は凋み、笑顏失せて快樂去りぬべし。若し又數日の

間、其の課業を怠らしめば、萬物の破壞は掌を反すよりも當に容易なるべし。然れども太陽は、我れ等を幸福ならしめんため、二六時中此くの如く輝き渡りて、光と熱とは間斷なく送られつゝ、更に又地軸一轉すれば、麗かなる初日の出を拜するの嬉さよ。

日の光てらさゞらめや天地の　　太平
ありの限りのあらんかぎりは

あはれ屠蘇酒の機嫌に、姫方も此の樂しき初日影を詠じたまずや。（をはり）

米國だより

シヤトルにて　澁谷馬頭

今回入港の旅順丸便にて着きました女艦に、「音樂と家庭」と云ふ論が見えましたから、私も當地の音樂界の見聞を二三申上げて御參考に供します、

世界一のソリストの來米

◎英國ウエルス居住の唱歌師其名を Adelina Patti と申します婦人は、先般來米國各所を經廻つて、此冬シヤトルにも立ち寄ると云ふ事で、今から大層な評判で御坐います、唱歌會は、例の大劇場で催される事で御坐いませうが、入場券が大抵十弗と申しますと、我が二十圓で御坐いますから、私共はチト困却致します方で御坐います。

◎先日ヒラデルヒヤに催された節には、非常の人氣で御坐いまして、入場券を買ひまするに、前日の朝から、會場の前に詰めかけて、夜通しに長く繩になつて居て、（汽車の切符を買ふ時に一人づゝ長くならぶやうに）やつとの事で、一枚を手に入れたと云ふやうな有樣で、御坐いましたと、新聞は傳へました

◎唱歌師と云ふ名を聞きまして、直ちにオテロ孃などの如く、若い美人であるやうに想像されますが、此アデリナ、パーテ婦人は、最早五十路の坂を越えました御年寄りで御坐います、又貞奴婦人など丶違ひまして、普通の藝人ではなく、勿體なくも伯爵婦人と云ふ高貴な身分で御坐います、唯斯道の爲めに

米國くんだり迄招待に應じて、御出向きになりましたので御坐います、米國人に取つては、十圓でも二十圓でも、入場劵は高くはないので御坐ます。
◎其樣な高貴の御方なら、報酬なしにたゞで歌つて御あるきかと申しますと、其所は英米人の勘定高きを知らなければなりませぬ、アデリナパーテ婦人の一夜の報酬は五千弗、即ち我一萬圓とは隨分で御坐いませう、或人が計算しました四分の一音符一つの歌ひ賃が十五弗、即ち我が三十圓になりますと。
◎此所まで書てしまひました所へ、タイムス新聞が來ました、取りあげて見ましたら、ニユヨークからの電報が載つて居ます、今日即ち十一月二十八日發電です。
『アデリナ、パーテーは昨二十七日夜當地（ニウヨーク）某劇場に出席する約束の所、其時刻に至り、入場劵賣上高三千百八十弗しか集まらぬ故、パーテー婦人は出席する事を断られました、そこでやむを得ず、與行の元方二人して一千弗づゝ自腹を

切つて、やう／＼の事出席して貰ひました、かれこれの談判に十五分間おくれまして、正味一時三十分間コンサルトがありました云々』
とあります、亞米利加人が萬事現金主義だから、向うでも現金に出ましたのですか、又は双方とも現金主義のかけあひで御坐いましたか、何れにしても、我々日本人の眼から見ますると、面白い出來事で御坐います。

音樂と食事

◎論說中に就て見ますると、記者は家族一同食卓に就く時に、室の一隅から洋々たる音樂の起る有樣を理想にされて御いでゞす、併し當地では、音樂はおもに食後に奏します、そして食堂には、常に樂器を置いて御坐いませぬ、當地大學の女子寄宿舍の食堂に、音樂を奏する音が聞えますが、あれは食事が濟みまして、舞踏の始まつたので御坐います。
◎我が國では飲食中に歌つたり、立つたり踊つたりします、私は之は贊成致しませぬ、そんな事を一切

食事後にはしたいので御坐います、そして食事は或る一定の時間を限つて、チャンと仕舞ふやうにしたいので御坐います。

◎京橋ビヤーホールでは美人手踊かなんぞを餘興として、飲客に見せます事になりましたさうですが、それに似てそれより下等な者が、當地に澤山御坐います、之をビイルダンスと申します、委細の事は皆樣にお聞かせ申しても、御爲めになる事では御坐いませぬが、とにかく音樂を以て、舞踏を以て、否とよ女を以て、飲客を引くは上臈ならぬ社會の常で御座ませう。

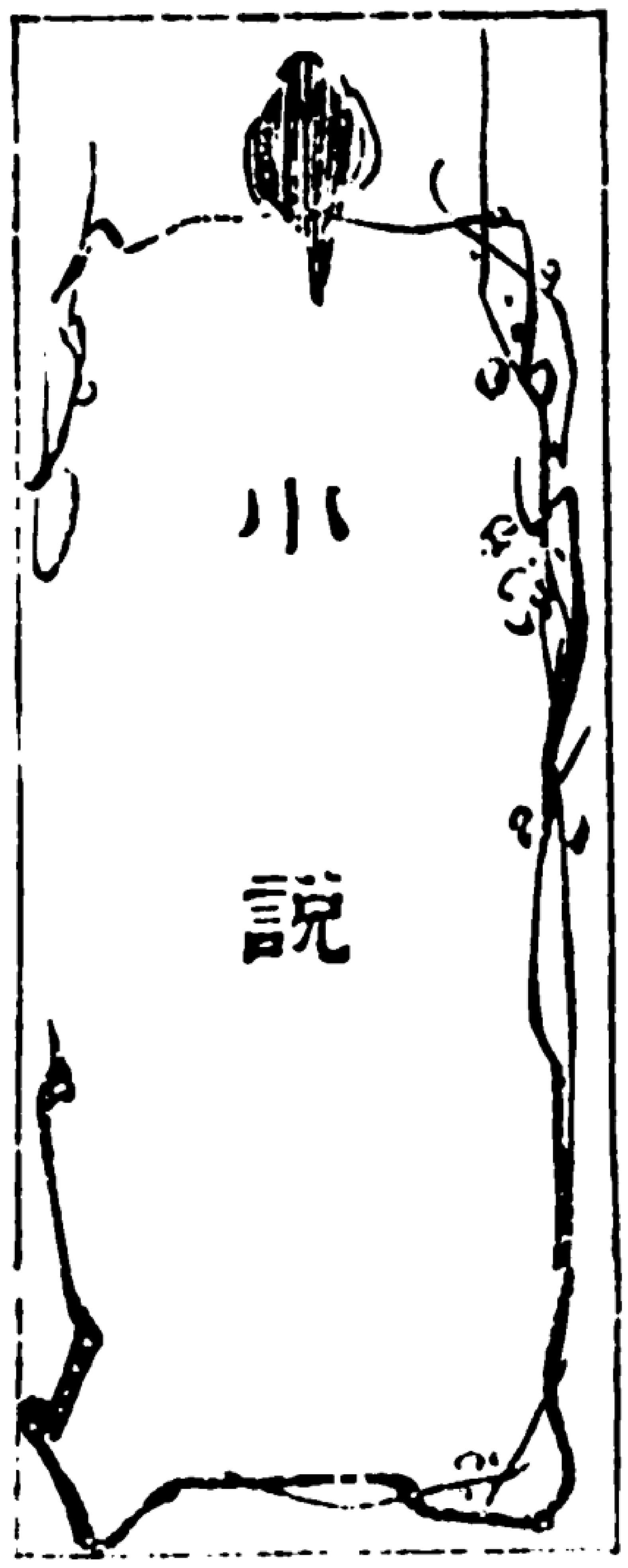
家庭とピヤノ

◎樂器と云へば種々ありますけれども、當地では(西洋諸國も同じ事でせう)太抵の家庭に、ピヤノの備付のない所がない位で御座います、音樂の心得のない人の家庭でも、其客間には立派なピヤノが、寂しさうに据ゑ置かれて、朝々の下女のハタキの音なふよすがとなつて居まする。

◎ピヤノの代價は、日本よりはヅット高價で御座います、下等の品で我が貨幣の三四百圓以下のはないやうで御座います、上になりますと、一萬圓以上にも、のぼります、併し米人の考へでは、ピヤノを贅澤品とは思つて居ませぬ、是非なくちやならぬ家具だと心得て居ます、左樣ピヤノは大抵家具屋に賣捌きます、其家具屋からストーヴや、寢臺を買ふやうな、積りで買ひますので御座います、代價の拂ひは十中の八九までは即金ではなく、長期の濟し崩しで御座いますから、買ふ人は便利です。

◎日本製ピヤノが、英國へ盛んに輸出されるやうになつて來たと新聞に見へました、左樣かも知れませぬ、尙ほ一層低廉に仕上げて、內國にも普及するやうにありたいもので御座います。

◎近頃流行の歌曲御通信申上たいけれども、歌曲は印刷するに面倒ですから、心にまかせませぬ、此次の土曜か日曜の晩に、女子大學生の寄宿舍の舞踏を拜見に出かける約束をしました。



初紅葉（つゞき）

新星

『お袖や、妾大變に痩せたのねエ』と、白魚の指で、片頰をソッと撫でながら、何か氣遣はし相、腰元お袖を顧みた美人は誰あらふ、國木宮子孃であつた。

お仰せの通、半月の裡に空の模様の變行き、頓と寒氣を增した様に、令孃が豐けき頰はケッソリと、肉落ちて、傍目にも憐な程細りとしたのである。

けれど年增のお袖は愛嬌口叩くに非ず、

『ハイ、お痩せ遊ばした様で御座います、けれど

も素からお姫様は、お上品な質性でゐらつしやいますから、凄い程お上品に見えますわ、好う御座いますよ、あの殿が嘸吃驚遊ばすで御座いませう、オホホッツ』。

『嫌ッ、亦戲弄ふのだもの……』と鳥渡、睨む眼附をしたが、ホンノリ頰を染めて、火鉢にたぎる鐵瓶を、チッと見つめたいぢらしさ。

是れも戀故と、思へば、お袖は胸が迫るのを覺えたが併し、

『お姫様、眞實で御座いますよ、今更袖に態裁をお飾り遊ばします様では、余りだと存じます、日頃のお姫様にもお似合ひ遊ばさぬ、妾お恨みに存じます』。

『妾、何も隱しはしないワ。』

『否、お隱し遊ばすのですよ、よう考へて御覽遊ばせ、全體此處は目黑の不動前ぢや御座いませんか、此大國家といふ料理屋へお出で遊ばしたのも、近頃御心痛遊ばすのも、皆岩倉男爵の爲めでは御座いま

せんか、あの殿をそれ程までに思ひつめてゐらつしやいましても此袖に、それも他人は知らぬこと、姫様思ひの此妾に、お恥し相に遊ばす位では、今日殿様がゐらつしやいまして、サア日頃の思ふた事をおつしやろふとしても、到底出來ませぬ、千日の苦勞も水の泡と消える道理で御座いますから、も少し掟り遊ばせよ』と、お袖が怨むも、叱る様にいふのも、皆主想ひの心から、と合點して富子は侘ぶる調子、

『知つてよ、妾一生懸命に掟りしてゐるのだもの……………』、といつたが亦悄氣歸つて、『けどもねエ、妾上氣せて不可ないワ………』。

如何した理由か、男爵の事を聴く度に、いとゞ身に泌む秋の風。

『それは姫様、誰も恥かしいもので御座いますから、お無理とは存じませぬ、けれど最少し御掟り遊ばさぬと、あれ程心配しました此妾が、第一勢がないぢや御座いませんか』、お袖はグッと力を入れて

『さうねエ、では掟りして丶よ』と、自ら御心を押靜め給ふのであつた、が氣に懸るは今日の首尾。

『それは左様と、まだ……………あの……………、ゐらつしやらない様だねエ』、いと恥かし氣に、『お前眞實なの？』。

『まアお姫様の、お疑ひ深いこと、何んの妾がお戯弄申して宜いもので御座いますか、妾は貴姫様の御傍におつき申して居りました時一寸御病氣の原因がわかり兼ねましたけれど、其處は年の功とやらで、秩然と貴姫様のお心をたしかめて、そして岩倉様の事をお聴き申して、それは丁度好い御縁と存じましたから、お殿様へ申上げて、善は急けで吉日に、御婚禮の式擧げいたす様に取計はふと存じましたのを、貴姫様がお止め遊ばすので、それでは恥をかゝぬ爲め、先様とお交際遊ばした上、お互のお心も打解けてからのことにいたしませうと、此十日は夜の目も寢ずと御心配申上げたので御座います、それで男爵家へ探偵を入れて、天長節の翌日漸々、

不動様へ御散歩がてら、御参詣遊ばすといふことを聴着けて、二度も三度も馬丁をやつて確めたので御座いますもの、ハイ、今にゐらつしやいますよ、アノもう十二時過ぎで御座いませう』と、語る折しも轆轆と遠雷の響。

『オヤ、参りました、参りましたよお姫様、それ馬車の音で御座いませう、否あれにきまつてをります、目黒へ馬車でくるものは滅多に御座いませんから、屹と殿ですよ……アラそんなにお逃げなすつて、何んですよ、戯談では御座いませんよ………さアお立ち遊ばせ、あのね、先へ廻はつて、不動様へ御参詣してゐらつしやる方が………』と、急き立てられ、今更姫様夢心地。

ソワ〳〵して、風通の衣裳の上へ、紫被布をバラリと懸けて、お袖にひかれ、縁端から庭をぬけ、落葉を踏むで不動前。

軈がて岩倉男爵は馬車を、門前に留めて只獨り悠々とゐらつしやいましと、客呼ぶ姉様連の前を通り、不動尊の石段を登り、社殿にぬかづいて、偖苔寂れたる石柵に椅りかゝり、秋の啓示に接すべく、天の彼方を仰いだのである、老松森々として聳え紺碧の空、清く高き馬の嘶、瀧の音も澄むで秋浅からぬ色神々しき氣の泌み渡る其處に偉大なる力わり竈焚く下女のお參さへ、秋としいへば何んとなう悲しう覺ゆるに、況して彼の枯野に似たる文野に立つて、蠻勇なる國民を制し、利己的動物に温き血を與へたる大詩人の、哲學を想ひ、人生の果敢なきに想到りて、呆然たるは自然の理。男爵は今日俗界をのがれて、栗飯過ぎし目黒へ來て、此美に接したのであるが、何か悲し相に悄然としたのである。

これより先、富子は恥ろふて進み兼ねたが、お袖に押遣られて、静に男爵の方へと進んで、思ひ切つて聲をかけた、

『あの………失禮で御座いますが……』。フと振返ッた男爵は愕とした、『ハア』。

『あの、失禮で御座いますが………岩倉様では御

座いませんか』、ソワ〱してゐる。男爵は解し兼ねる面色、『ハア〱』といつて、熟々と見いつた。三日月の眉、面長の上品な絶世の美人は、耳朶まで紅うして、『最うお忘れ遊ばしたか存じませんが、妾過般演藝會で一寸……お目にかゝつたのですよハア』。

左様いはれて思ひ浮むだ、未だ名は聽かなかつたけれど、絶世の美人を演藝會で見たことがある。否其時世の中には美人もゐるものだと感じた程の美人は今眼前にゐるのだ。

そこで、『ハア、左様でしたな、あるです、お目にかゝつた事があるです、左様だ……………どうも失敬』と頭を下げた。

『其際は誠に失禮致しました……』、と富子は漸く會釋する。

『否、失敬しました』。

お袖はホット安心して、

『お姫様、妾は一寸、煙草入を忘れましたから、取つて參じますよ』と氣をきかし、二人の方へ會釋して去つた。

『何んですか、その……今日は御參詣でしたか』。

『ハア、遊びかた〲參詣いたしましたので……貴君も』。思ふ様に物がいへぬ。

『左様です、散歩して來れば好いのですか洋行一件で、ツイ遲くなりまして、馬車の參詣です、ハッハッハ』、輕く笑ふ。

『左樣で御座いますか……………秋の景色は、宜う御座いますねェ』。

『好いですなア』。

戀に哲學は無い、冷靜なる哲理的小說の本家元の岩倉詩人も、惚々と此美的に見惚れたが、不遇何所の令孃であろふ?といふ念を生じて、『先日はお名前を承はる隙が無かつたですが……失禮ですが、エーお名前は』。

『妾?、妾、國木富子と申しまして……』、『エッ、國木?國木富子樣ですか』、眼を見張つて茫乎。

冨子は解せず『ハア、國木冨子』。
『左樣ですか』。
つか〳〵と寄つて、其手を執つた。
『君が國木樣ですか、まア、談がある、此方へ來給へ』と、全く狂氣の體で、令孃を無理遣りに、左手の紅葉林へ引張込むだ。
冨子は夢心地のさめやらで、不思議に胸を躍らしてゐると、男爵は悄然として首うなだれるのであつた。幾度か嘆息し、幾度か空を仰ぎ、さて語るらく、『君聽いて吳れ給へ、僕は君の家を訪問しやうと思つてゐたのだ、君、君は吉田仙一を知つてるでせう？』
『ハア、去年死くなりました吉田、あれは、妾の出入米屋の一人息で、學習院の二年級までいつた賢い人で御座いました、妾よく存じて居ります』。
『其秀才子が、何故自殺して死んだか、御存じですか、サア其死んだ原因を……』。
『否、存じませぬ』とかぶり。
『唔、成程、左樣だ、左樣だろふ、廣い此宇宙間で彼吉田が死去の原因を知つてるものは、恐らく一人、僕一人だろふ。僕は今も今、彼と手をたづさへて不動山の美を語り、自然の美をたゝへた三年昔の事を想ひ泛べて、徐ろに無限の情に打たれてゐる所なのです、彼は其時慥ういつたです、實に平民はなさけないものだと、それから半年もして、立派な遺書、それは哲學の研究に力が足りないで遂に世を悲觀して死すと書たもの……それをのこして自殺して了つた、吉田は僕が無二の親友、弟としてゐたのです、そして今僕一人生のこつてゐる、僕は實に悲しいです……其理由の發見——それは其後、彼が僕に殘してくれた日記を讀んで知つたのです、君聽いて吳れ玉へ、渠は或美人に焦れ死をしたのです、戀の病に斃れたのです、其美人は華族で、而かもお主筋といふので、遂に落膽絕望、人生を果敢なんで、自殺したのです、勿論相手の美人が其心中を知つたなら、屹と哀れんだに相違ないが、全く知らなかつたものと見えるです……僕は一時親

友を失ふて失望、人生を悲觀して、渠の跡を逐はんとしましたが、一朝大に悟る所あつて哲學を硏め人生問題を解決し得たお蔭で、自殺をやめて、其捨てた命を社會のためにつくさむと腹をきめたのです、命を延べて居るけれど、渠吉田は平民の悲しさに、自殺の浮名を流したのです、其戀人？、それは國木富子孃です』。其眼にはうるはしき涙を一ぱい堪えてゐる。

『エッ』と吃驚、富子は眞靑になつて、顫えてゐる。

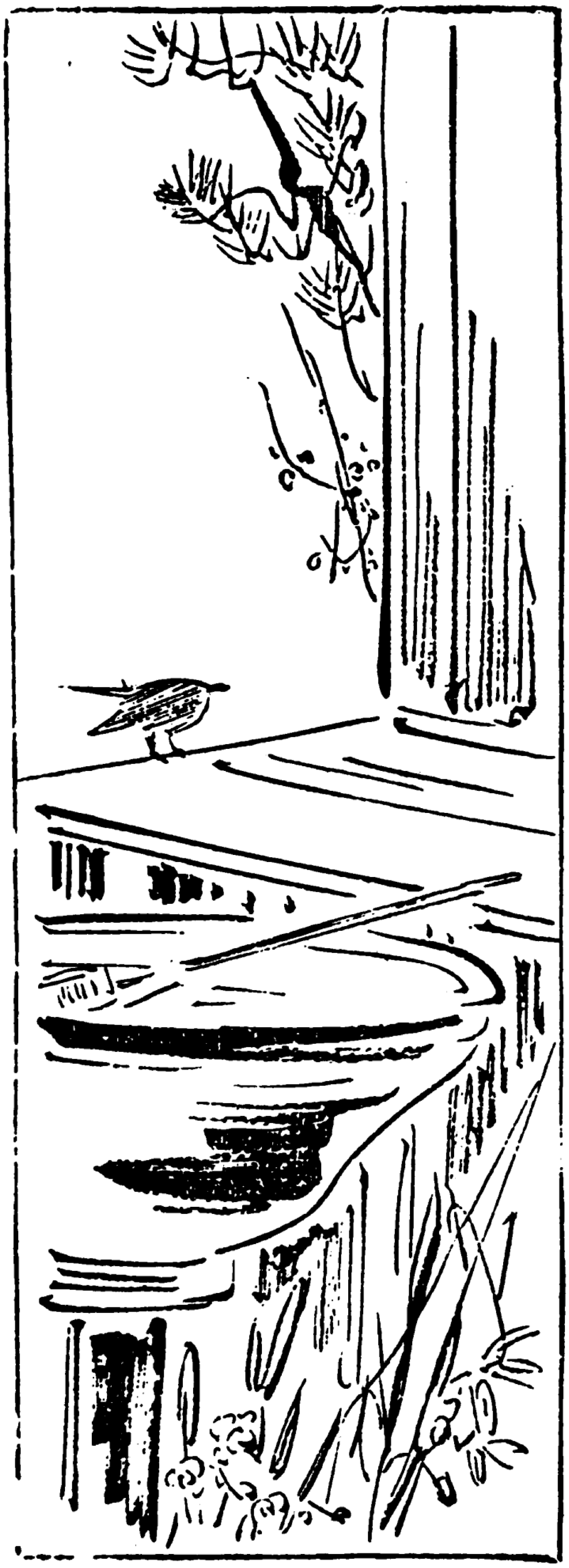
『君、彼を哀んでやつて呉れ玉へ』と、玉なす涙ハラハラと、男爵はよろめいた。

例令男爵が孃の眞靑になつた事情を、知つた所が、果して親友の戀人の戀を叶へ得るであろふ？。

⁂

雪降る冬の近くまゝに、散るや紅葉のチリチリと。

（完）





宮中月次御歌會詠進寫

筏上霜

高崎正風

そまかはのみなかみいかに寒からん
　くたすいかたのしもましろなり
鍋島直大

白ゆきをつみくたすかとみるばかり
　いかたのうへにしもぞおきける
本居豊穎

よしの人かはべにすけるかみよりも
　いかたにうすきしものいろかな
黒川眞頼

つなぎおきしいかたに霜やふりつらん
　くろきもしろくけさぞみゆなる
津輕承昭

ちりつもる木の葉なからに筏ふね
　おくしもしろしたにのそまかは
松浦詮

いかたしのたもとも氷るそまかはの
　いくよのしもかのせてさすらん
渡邊清

みなかみの寒さしられてさしおろす
　いかたのうへにしもおきにけり
小畑美稲

かはかみはいかにさえけんさし下す
　いかたのうへにしもぞおきける
町尻量衡

あさほらけおく霜しろしおほゐかは
　はやせのなみをくたすいかたに
梅溪通治

さしつれてくたすいかたの霜しろし
いかにさゆらんはつのみなかみ
竹屋光昭

もみちはもなかれつくして大井かな
けさはいかたにしものはなさく
前田利鬯

大井かはつなくいかだにときならぬ
はなをのせたるけさのしもかな
藤井行德

谷かはのあさかせさえてさしくたす
いかたのうへもしもおきにけり
山本實庸

さしすてしいかたの床にねるさきの
みのけもさむくしもふりにけり
唐橋在正

水とりのあそびしあともみゆるかな
いかたのうへのしもふかくして
水野忠敬

さしくたすいかたの上にむすびけり
かはかせさむきけさのはつしも
清岡長延

あらし山もみちばちりてかはつらの
いかたのうへにしもぞおきける
柳原愛子

あさまだきいかたのうへの霜ふみて
さをさすしづのみやこほるらん
常盤井堯熙

いかたさす川かせいかにさむからん
さをのしづくもしもとこほりぬ
藤枝雅之

つなきたるいかたのうへの霜みえて
あさかせさむしふゆのやまかは
小原適

大井かはゐせきのなみのおとさえて
けさはいかたにしもぞおきける

（以下次號）

敎の庭

一月十五日發題

正三位子爵　黒田清綱先生撰

（菊池武則先生代撰）

待春

天

本郷區森川町一番地　青木たま子

身にそはる年もおもはてたちかへる
　はるをおそしとまたれけるかな

地

大和　栗山たか子

春なまつこゝろいそきてうすかすみ
　たゝぬそらさへなかめられつゝ

人

肥後國菊池郡城北村　徳永廣子

わがやどのうめの初はなさきしより
　うぐひすきなくはるそまたるゝ

甲

肥後　徳永多瑠子

立かへる身にそふおいはしらすして
　ちかつくはるをまつそたのしき

埼玉　横田秋子

いたづらにことしもけふにくれ竹の
　ひと夜はかりのはるそまたるゝ

埼玉　前野壽賀子

白ゆきとともにふりゆくみにもなほ
　またるゝものははるにそありける

乙

老ぬれはおさなこゝろにたちかへり
　はるまつほかのものおもひもし　東京　三好珍子

いつしかと濱にひそみたる魚さへも
　こほりのしたにはるをまつらん　東京　積山きやう子

おとめ子か春まちかねてつくはれの
　ひとよふたよとはやなりにけり　埼玉　前野ふさ子

風さむみひらかぬうめのはなこよみ
　長閑けきはるをまたぬ日そなき　備中　大橋廣江子

あつさ弓はるのひかりないつしかと　東京　松村あさ子

母のやまひ癒へなん頃ときゝしより
日かすかそへてまちわたるかな　東京　敷島うた子

老ぬれはみにそふとしを知らすして
ひたすらはるのまたれぬるかな　壬生　岩岡壽子

ゆひ折りて春待つほかはなかりけり
はな咲くはるをまたれぬるかな　壬生　森田みと子

霜ゆきにうつもれはてしわかやとは
わか身にとしのよるも知らすて　肥後　千々波橘子

さく花のはるのあしたぞまたれける
うめのはなさくはるをこそまて　肥後　岡山登壽子

空たきのにほひをこめて爐のあたり
とふひとまれのふゆかれのやと　筑前　中島たけ子

ゆきつもるのきのうめか枝見る毎に
こゝろのとかにはるを待つかな　東京　林環子

野に山にふゆかれはてしくさもきも
うくひすきなくはるそまたるゝ　三河　服部廣子

待わともおのつとはるはくるものを
ゆきのしたにやはるをまつらむ　東京　林蘭子

春をまつこゝろはかりはわらはへの
まつにたへえぬわか身なるかな　三河　鴨野くわ子

はなとりの春のさかりそまたれぬる
むかしもいまもかはらさりけり　三河　本多きさ子

すみかまのけふりを見ても山さくら
かたやまさとにふゆこもりして　三河　河合ぬひ子

はなにかすまむはなをこそまて

丙

ふたつみつ軒にかをりをとぢられて
のきはのうめもはるをまつらん　丹後　木村義子

我にはのうめもはるをや待ちぬらん
おくしもさむききのふけふかな　東京　森まさ子

人みなのこゝろのみかは草もきも
もえいつる春のひかりをやまつ　大阪　柳田金子

冬ふかみゆきをいたゝくうめかえも
おなしこゝろにはるをまつらん　河内　竹内敬子

父きみのすひつのもとにあさな夕な
はるまちかほにねこのねむれる　大阪　牧野英子

かすみたつのとけき春をまつかえに
ふるあはゆきのはなとまかひて　東京　椎野秀子

うめかえにつもるあはゆき花とみて
はるまつころのおもひてにせん　東京　椎野蕭子

年のうちにほころひかゝる梅のはな
はるたつあさやひらきそむらん　東京　椎野鋭子

のとかなる年のはしめもものたらぬ
こゝちせられてはるをまつかな　名古屋　木下鶴子

日あたりの梅のはつはな咲きしより
のとけきはるのまちとほきかな　名古屋　木下春子

なにとなく今年も惜しゝさりながら
またこんはるのまたれつるかな　秋田　小島いわ子

世を捨てゝうきよの外にすむみにも
はなみんはるのまたれけるかな　秋田　梅村きよ子

行く年はをしとおもへとまたさらに
たちかへりこんはるそまたるゝ　秋田　和田りつ子

あらたまの年をむかふるかとまつの
はる待つけふそたのしかりける　横須賀　上田露子

まちわふる人のこゝろにさきたちて
はるしりそむるうめのはつはな　東京　すゞしろ子

つもりたる伏屋のちりをうちはらひ
長野　小泉みつし子

垣の中のうめは三つ四つ咲きつれと　うなゐとゝもにはるなまつかな　長野　山本嘉子

春ちかくなりにけらしなしらゆきの　はるはいく日なまつへかりける　東京　篠田圓子

おくれぬなみよのならびと梅の花　うちとけてなくうくひすのこゑ　東京　淸水はる子

またさかぬうめのひと枝手なりきて　かなるはかりになりにけるかな　東京　山本茂子

厚こほりとさすみなとにふなびとの　はなもろともにはるなまちけり　備中　大橋錸子

梅かゝはにほひそめけりうくひすも　ふゆこもりしてはるやまつらん　島根　岩倉なな子

なち山はかすみやたつとあさことに　おなしこゝろにはるなまつらん　吳　和佐千鶴子

あらたまの年たちしよりいとゝしく　待わぶるものなそれもあらなくに　北見　中川伊代子

春まてはゆめにまて見るこのさむさ　はな見んはるのまたれけるかな　三河　成中みゑ子

しらゆきのかけはきこそれとのも山も　にはに白らゆきつもりなるなり　下野　佐竹仲子

まちわふる心もひさしはるくれは　やゝ立ちそむるはるけしきかな　下野　佐竹仲子

わかにはのゆきにうもれしゝしら梅の　のへのちくさなともにあそはん　東京　荒井満武子

每の日もきのふとすきてはやこゝに　はやさきかけにはるなまつらん　東京　荒井農久子

花のさくはるとおもへはみにつもる　くるはつはるなまつぞうれしき　秋田　古瀬愃子

　としもわすれてまたれけるかな

ふゆながらふゆのそらとも思はぬは　はるまつけふのこゝろなりけり　秋田　古瀬隆子

あつさゆみ春まちころもぬふほとは　うなゐこゝろにうれしかりけり　但馬　田尻保代子

さひしけの冬のあしたもはやすきて　はなさくはるのまちこかれつゝ　東京　荒井せい子

こそまちし春もいつしかくもかすみ　いくめくりしてもまつそたのしき　下野　長　しま子

つこもりのみ山かくれのもゝとりも　のとけきはるなさそやまつらん　下野　若林とよ子

待つ春ののとけきかけはかはられと　としふるまゝにしのはるゝかな　下野　長島とし子

寒さなもおしてめくむやうめのはな　はるまちかほにふくみいてつゝ　東京　荒井けい子

きのふけふ一しほまさる寒むさには　うらあたゝかきはるそこひしき　東京　荒井幸子

草も木もはるはさかりのときなれや　われらもはるにあふそまたるゝ　東京　荒井千代子

けふあすと花ゆゑはるなまちなれは　ねてもまくらのやまめくりしつ　東京　石川薫子

うなゐらか花見ころもなぬひなへて　おなしこゝろにはるなこそまて　沖繩　仁保しま子

なるゆひに梅うくひすとたのしみの　いろ音かそへてはるなこそまて　松山　上原のふ子

このふゆのかれ梅になくうくひすも　はるまつらしきいまのひところ　三河　白井よし子

孫に手なひかるゝおいも野へに出て　こまつひくへきはるなこそまて　三河　永井さい子

まつこともかきなりにけり君か世は　山口　村上操子

としはかへれとはるのたゝれは

あつさ弓はるやおそしとうくひすの　たゝひとこゑをまたれけるかな　陸前　前田河千年子

栗こまのやまのしらゆきまちかれて　かすみそめけりはるやきつらむ　陸前　前田河千年子

少女子かはるまちかれてけふもまた　ゆきまのわかなつみにけるかな　陸前　前田河みさを子

咲いつるはるまたれけりいつよりも　のきはのうめにはなのみゆれは　東京　河田いし子

春待つとおもふこゝろにさきたちて　のき端のうめやさきはしめけむ　埼玉　横田やな子

をゆひをり日數かそへてはるまては　みつよつなゝつうめさきにけり　埼玉　横田音羽子

いつしかとゆきまの梅もわかことく　うくひすきなくはるをまつらん　和泉　福原蓋子

ふりつもる雪のうちよりたちかへる　はるをこそまてさとのをうなは　肥後　佐々小琴子

谷の戸にふるゆきしのくうくひすと　おなしこゝろにはるそまたるゝ　肥後　德永萬壽子

立かへるはるをおそしとまとのとに　つはきのはなそまちかれてさく　肥後　佐々有鄰子

冬の日のみちかけれともやかてくる　はるをまつまはひさしかりけり　美濃　吉村せん子

よも山野かけたるかすみくみてみん　をさまるみよをいはふさかつき　兵庫　原田ひて子

うくひすも竹のあみ戸に羽たゝきぬ　おなしこゝろにはるをまつらん　陸奥　工藤とし子

かきくらし雪つむまとのくれたけの　うきふししらてはるをまつかな　三河　榊原てる子

柴の戸にはるやまつらんにはのうめ　ゆきのしたにもつほみけるかな　大和　栗山儉子

降りつもる雪またふかきやまさとは　はるの日かけを待たれぬるかな　相模　岡部もと子

梅のはなさかぬうちよりこにさして　うくひすのなくはるをまつかな　長野　岡田千鶴子

軒ちかき野うめのあたりゆききえて　はるまちかほにうくひすのなく　信濃　伊藤道子

いとゝしくはるそ待たるゝ此ころの　ゆきのけしきを見るにつけても　壬生　森田ふて子

春來れは花も咲かんと老のみは　うなゐとゝもに待ちにけるかな　下野　菅沼鐵子

春こよと身にとしなみのかさなるも　知らてやひとのいはぬ日もなし　下野　菅沼淑子

老の身のこゝろはかりはいつもなほ　かはらてはるをまちにけるかな　下野　すが子

月に日においのそふとはしりなから　くるはるまたぬとしなかりけり　秋田　梅村きよ子

子らまため此こもりさへなか／＼に　かたれよのへのはるやたのしき　京都　坪内りき子

きへやらぬ雪まなからにうめのはな　はるまちわひてにほひぬるかな　横須賀　岩橋化子

梅のはなさきつる見れはまちわふる　はるやいく日もへたてさるらん　長野　山本直枝子

とりとりの設をしつゝひとみなの　おなしこゝろにはるをまつらん　神戸　名なし子

はかなしやみにとし波のよるとしも　知らてやひとのはるを待つらん　壬生　岩佐久子

華族女學校教授 井上頼圀先生撰

おもしろきもの一つ二つ

天

麹町三番町　石川薫子

あけぼのゝ春たつ空のけしきこそいとをかしけれ、日章旗は新柳疎梅の隙よりヒラ〳〵と靡き、戸毎にならぶ松飾りは千歳の翠を添へて色ます〳〵深く、人の心もおのづからのどかに見ゆるぞをかし、ましてまちにまちし少女等のあまた打集ひ追羽子に嘻々として心も空に、むれ遊ぶなどさすがにあきらけき春ののどけさ見えてをかし、くろきかほわやしう白きものもて色どられたるをの子目もさだかならぬまでぬりたて、むくつけき藤男のしろきものぬられしをもえしらぬ顔にあなたこなたへゆきゝすなどいみじうをかし、夜に入ればたれかれあまたつはもの打まとひかるた双六なんど取り出しつ源平二手にと別れ言の葉にこそ出さねかたみにまけじおとらじと心に念じ、必死となりて戰ふも又面白し、敗れかゝりし敵方の血眼になりて逆寄に鋭くせめ入り玉ひ一枚なりとて許すべきかはと爭ひさわぎ、やがて勝敗の决せしとき、かのとき斯くせばかくはもろくも敗れざりしものを口惜しき事したりなど、云ふもなか〳〵をかし。

花の頃は又面白し、三日見ぬ間の櫻狩氣もはるかに櫻樹林をなせし中などすゞろありきしつ、たがやさしき筆のあとぞやあなたこなたへあまた短冊ゆひつけられしをたづねありくなどいづれも〳〵なにとはなくそゞろをかしき事にこそ。

地

大阪東區平野町三丁目　桝田益子

鳥羽繪の女。彌生の空、麗らかに晴れたる日、思ふどち山ぶみなしたらん。小春の長閑なる、秋もはたよし。汐干狩に、こよろぎの磯邊あたり、あさりて思ふ儘に、櫻貝拾ひえたる面白さ、言ん方なしや。ボート、自轉車なんどの、競ひ乘りすなるを、知る人なしに見てゐたらんよ。花やかにいで立ち、吾こそはと思ひ上りたるが、敗を取りたらん、いとにくし。月明きに、梅が香薫りて、澄み渡りたる笛の音の、幽に聞えたる、面白さは更なり、遠里小野迄も、

おくかれつべう覺えらるゝよ。歌留多遊びに、勝ほこりたる人、おかん處を知らずやあるらん。徒然とながめゐたるを、親しき友の、久しう逢ざりつるが訪ひ來て、何呉と今昔の物語りして、思はず夜を更したる、斧の柄も朽ぬらんよ。父君の姉人なんどに、言ひさとさせ給ふを、乳兒の疾く聞取りて、まはらぬ口に大人しう、まなび出たらんよ。腹立つ物から忍ぶとすれど中〳〵に、ふきも出しつべう、はて〳〵は一つ聲に、うつはりの塵も、散りぬべし。岩のはざまを、疾く下り行く筏舟。釣魚に妙なる人の、見るまに多く得たる。小説物の、やう〳〵興に入りたる。

人

作者不明

門松に新たなる年をむかへ萬に賑はしき曉月もはや中ばになん軒ばの梅にも朝鶯の初聲きゝてよりいとどのどかなる此庭におさなき妹は羽子の音おもしろげに遊びくらしたそがれの風寒さになん家に入ねと母君の給し時己が親しき友の三人參り給ふに我まづはしり出てよくこそ來ませ朝の程より待てそと火桶のそばにいざなひ過にし歌留多遊のおもしろきなど語合てそ香は珍らかなるすさびをなんこれはかれはなど定めあへるに香の遊びこそ興深からめと母君の給へば夫よからんいざとて香道具とり出し祖母君香元にて老松若竹などゝ札につれ母君友どち妹まで席定まり折から春の競馬香こそならべし駒のいさましく試より本香すゝみ行に我黑方の足がきおそく赤方勝ならめいかにやと心せくまに末の折据に我方に足早くうれしくも黑方勝の記線己が前にこそ我が方のよろこびに引かへ赤方の友どちいと面なげなる思ひやられて上氣やし給はめ庭の夜の梅もすてがたくをかしければと打連てやり戸明てながむれば十六夜のおぼろ月み空に高くなん

伊豫　宇高松子

四季をり〳〵の遊、詩歌管絃なども、然ることながら、汝等とは事かはりて、面白きは心なきうなゐらが遊び戲むるゝ樣にぞある、りんごの如く福よかなるほゝには罪なき笑みを湛へ、星の如き眼は平和と喜びの光に滿ち、石竹の如く愛らしき唇をもるゝ無邪氣なる言葉よ、見るだに聞くだにいとろうたきを、まして其遊び戲むるゝ樣の、なかしさよ、母の物さしは、いつの間にか愛馬となりて庭に引きまはされ、赤き括り枕は小さき肩に上りていとし子とかしづかる、其いふところなす樣は大方父兄母姉などの見眞似聞まれ、さては己等が譽められし

こと叱られしことなどなぞくりかへすめる、然れば教育の道に心深かき方々はこれに重きを置きて、其性質家庭の樣など思ひはかり給ふ便ともなし給ふとか、然るはいかにおもしろくおはすらん、今一は冬の夜長を埋火かこみて老人達の若かりし時、さてはいわけなかりし折のわるあがき面白かりしこと、なかしかりしこと、あるは世のうつり變りなど語り興じ給ふを側聞きするこそあかず面白けれ、是等は唯におもしろし、なかしと聞くのみかは、已等が世を經る道の誡ともなるべきことのいと多きを、かく已は思ひ侍れど一片の花を見てだに美しとめづるがあればはかなしとかこつもあり、同じ秋の夜の月に向ひても泣く座頭の妻あれば、望月の缺げたることもなき我が代に思ひくらべてほこり樂しむ人もある心々の世の中、姉君達はいかに思召すらんかし。

呉　和仕千鶴子

遠近のたつきもと云ひけむ山中にはあられど、わがせこの御國の爲に船出しける後は、かしのみの、獨居なれば新玉の春をし迎ふれど、小松ひきにも出でやらず。世の樣も、日每の新聞にて僅に知らるゝのみなり。されば、ことふりにたれど、去にし天長の佳節に、おもしろきものを見出しけれ。久方のみ空は、長閑に晴れ渡り、喇叭の響、ほつつのれと共に、港入せし艦の數々、滿艦飾をなしたるが、朝日の影に色はえて、いと美し。かゝる樂しき今日を病院に病みます友の夫は、いかにさう〳〵しうおはすらむ。いざ慰め參らせんとて、友と共に海軍病院を訪ひぬ。此に數多の飾物あり、時ならぬ櫻花のさきみち飛子花、ゆかりの色あてやかに、あるは、菊の色々匂ふばかりなる中に「東洋の風雲と題したる、そが下には、もゆるが如き緋の毛布の、何やらん、姿もわかぬ物の上にぞ、はふりかけたり。思ふに表には美はしうなし、裏には針なや持つらむ荒鷲の、はびこりを示せるならむ。はた爆烈彈のごと、いつ、破裂せんとの意なるやと思ひき、矢竹心の益荒雄の、作りなせしものからに、いと、おもしろかりき。

長野　松澤まづ子

此度我愛する女鑑にて「おもしろきもの一ッ二ッ」といふ題を得しかば、いでやと筆とりて、思ひおこせば、此有難き大御代に生れあひてたらちれの御親に仕へ奉る身の、春の花、秋の月、冬の雪も心のまゝにめでははやす、其折々の樂しさを、今更に一ッは思ひうかべしぞ、又なくおもしろきよ。學びのやの、師の君達が、智育、德育のみならで體育にも心そゝがせられて、催し給ふ運動會こそ、なかしけれ、大學、中學は得知られど我村の小學校のよ。わかきは七ッ八ッより大きも十五を越さぬ、男の童、女の童が、打まじりて、かたみに負けじときそふ程に、師の君遂は心して「審判官」をつとめ給ひつ、やがて勝負は定まりしか。負けたる子等は、朝顏の朝日に得たへでしをれし如く見るからにあはれなるに引かへて、勝ちたる子等の花のかんばせ、笑みのつゆさへやどして師の君より賞をたまはる中に思ひがけなくも、我いとしの弟の交らひたる、一入おもしろく見らるゝよ。

筑前　中島たけ子

空行く雲を止むてふ音樂の妙へなる音を聞くも面白し。はた天人の天の羽衣ひるがへすてふ舞の手ぶりを見るも面白し。しかはあれどこの妙なる音樂の調子に合せつゝ、おのが舞踏を舞ひ得たるおもしろさはいかでこれを見また聞く人の面白さに比すべきやは。さても思ひ合するはおのが知り人に狂言の道に年功の老人ありけり。此人年功なるにも似ず其業いと拙ければ見る人常にのゝしりけり。したしく交る友のえ堪へで、其業止めよといへば首を打ふりておのれ此業を樂しむは人を喜ばしめんとにあられば、人のたのしむとたのしまざるとは我知る處にあらず。おのれだに樂しからば足れりとて今も尙止めざりけり。我と同じきたぐひにや。

橫須賀　岩橋花子

過にし春の立ち初めし日なりけり、都の大路行く道すがら、何やらん笑ひさゞめく聲の聞えければ、ふと立ち止まりて見やれば、男子、女子、劣らじと、羽子つきかはすなりけり、何れも顏には白きもの十字

に畫きてあやしき姿、中にも二八の乙女、高まけ艶やかに花のかざし嘻ばしく、適れつくりなせし花の顔、無憚や今受けし羽子落せしとてしろ／＼と塗りまはされて、恨めしげなる様、哀れとも又なかしかりき。又これも元旦の事なりき、友四人程打集ひて、今朝の祝ひの雑煮の餅幾つたうべしなど、はしたなく話しの序で聞きかはしたりしにその内にて姿、容貌、勝れし友の三人の友が合せし數な一人してたうべしに驚ろきあきれ、さてはそがやさしの顔にも似合しからぬ振舞にことて打興じたりしも中々になかしかりき。

東京　篠田圓子

新年は追羽根歌留多双五六などまづ面白き事のはじめなるべし、春は若草つくし摘み、秋は茸狩り栗拾ひ、木の葉がくれ草間がくれに思ひかけずも見いでたる、持てる手籠に染しさも、あふれて似る物なう面白からまし。猶冬も夏もとり／＼におもしろ草の種はつきぬ物から拙なき筆に餘りくだ／＼しく書きつらねむも煩はしければ、記者の君のの給はせ給ふ如く中に一つ二つとりいでゝあげつらはむ。

まづ雪のふりつむ景色こそみやびかにていと面白き物なりけれ。廣き野山はいふも更なり。日々目なれたる宿の前栽の眺にてすら常とは更に品變りぬ。木毎に其の形こそかはれ。枯木常盤木の差別なく皆白妙の花さきみちて、あかず面白きに、まして石燈籠にふりつみたる姿は又たとしへなく面白し。童らが寒さも忘れて造りなしたる雪達摩の庭の片すみにいとむつかしげに、にらまへたる、みる人自らうちゑまれぬべし。やゝふり怠りけるよとみれば又忽ち密にふりきて中空より風吹にちりかひ亂るゝ様は天つ女神の手玉なもてあそぶにやと、いと面白し。ゑひたる人の姿も中々におもしろき物から例の限りあれば餘り長きもとて雪の景色のうちとけぬまに急ぎ筆おきつ。

三河　廣中みゑ子

新らしき年となり市の中はなんとなくにぎやかく。郵便夫も年首の手紙にいそがしくあちらこちらと飛でまはり、滊車は停車塲に付き滊車よりおりる其人な車夫はおひかけ／＼て、其車にのる人も有り又歩も人もあり、御定宿の看板のかゝりし家より出で來て此の滊車にのる人もある、それ／＼おりる人ものる人もありて世の中もおもしろき物と思ば猶又おもしろし我身も山家にすまゐするなれど、我住む山家な都と思ひたれどこの町に來て見れば、我が住む山家よりも都と始て思はるゝばかり、我家に歸るなわすれて此町なあちらこちらと見廻して我住む山家も都なり、落葉の音は好く聞こえ雪見の人は白衣となりて彼の山や此山、寒さを忘れて雪見する、春は櫻の花も咲き梅も咲くなり鶯の初音な聞きて、雪な見て花見の人もおもしろく花に浮かれて酒くみかはし、三味も引き氣も浮べておもしろく、山家とは言ひながら夏は濱邊に近くして白帆は沖に見ゆるなり、此所に見ゆるは螢ひかり夜は螢に露もあり、おもしろく歳な暮し。何な言ふにも山家なれば常には淋しと思はれて此町も歳の始ににぎやかし常は此れ程迄にもなかりからんと思ひながら、又淋しき山家な指して歸り行くなり

肥後　佐々有鄰子

立かへる春のはじめは、何くれとおもしろきものゝ多かるに、わきて自轉車にのりて郊外の競走もあり、鞠なとりて學校内の遊戯もあり、是は男子にひとしきわざなれども、地球上にしては海國なれば、女子といへども、尙武の業こそいよいよつとむべきなれ、そもそも開國以來神武の敎ゆきわたりて、宮のなとめも、山の賤女も斧とりては心なれり、梶とり水棹あやつりては、和魂なきたふといふなる、島國民なれば、朝夕なしへなうくる姿どもゝ、皆々尙武に心なゆだねつれば學校の遊戯も男にまさる藝こそおもしろけれ。一朝ことあらば、銃なかたにし馬に鞭うち、額に矢は立とも、脊は見せじと、晝夜心の柱ふとくつきたて、萬國の海外に名なあらはさんものぞ、あなよろこばしき大御代なり、いと心よき時節なり、今日の遊戯のおもしろさにかくは、、のしつ。

神戸　名なし子

人々各顏の、異なるが如く、其心も亦、同じからざるべし、されば

かしと思ひ、おもしろと感じ、はたまた悲しと、かこつ事もさまざまならんかし、いでや己がおもしろしと思ふことの一つ二つを筆にせんか、

口もまわりかねる幼兒の、舌切雀、猿蟹合戰などのおとぎ話、よく覺えて眞面目に語りいでたるいとおもしろく、覺えずほゝゑまれて、同じ事、幾度きゝてもあかずをかし、

遊戯いとおもしろし、己がするにても、人のするを見居ても、團体の競爭、個人の競爭いづれも、寒き夜火桶側へに、習きて文を友とするこそおもしろけれ、殊に古今の歷史をひもときて、一々心に會得せらるゝ折は、火桶の火の灰がちになり手も足も冷へ渡れど、心の中燃え立ちて益々おもしろく目いよ〳〵すみて、おもしろしともいとおもしろし、

（人位文章の作者の住所氏名至急御報知を乞ふ）

新春

熊本縣葦北郡佐敷尋常高等小學校

四學年　鵜田よしの子

行く年月のいと早くて、今はしもいと芽出度き明治三十七年の新たなる春をむかへぬ、戸毎に揚げし旭の御旗は麗かに立昇る初日の影に映し、萬戸の竹や千門の松は豊けく治まる御代の千代に八千代に變らざる綠の色をこまやかに、軒端に〆繩かざりつ、都も鄙も押しなべて、貴とき賤きの差別なく、家族皆打寄りて屠蘇酌み交し、畏くも我が大君の萬歲を祝したてまつれば、大空高く鳴く鶴も、君が齡を警きて最と目出度ぞ聞かれぬる。古語に一日の計は、早朝にあり、一年の計は元旦にありといへり、されはわれ等も此新年と共に學術に技藝に勉勵し大御世の惠の露に答へまつらては、爭て明治の女子たる甲斐あるべき、誠にかくばかり喜ばしき元旦に遇ひぬれば、拙なき筆に墨そめて聊か祝の辭を記しぬ●

巖上松

正六位　西内成郷

動きなき巖に生ひし松なれは
　御代のためしにひくへかりけり

香川縣仲多度郡吉原村
私立松岡病院長　松岡小太郎

托根巖上自輪囷　翠盖重々老愈新
石丈木公好知友　悠々相伴萬斯春

動きなき三代の例と常盤なる
　松は巖に根さしそめけん
　　　　　　　　和住千鶴子

君か代はいはほに生ふる老松の
　ときはかきはにさかえゆくらむ
　　　　　　　　福原すみれ子

うごきなきいはほの上にそゝりたつ
　松こそ君のすかたなりけれ
　　　　　　　　中川伊代子

千代へてもかはらぬ松のみさをゝは
　ひとのこゝろとなすよしもかな

わか庭のひともと小まつこのころは
　ゆきしろたへのはなさきにけり
　　　　　　　　小田千代迺子

有明の月の光りし清けれは
　影見し水そまつ氷りける

讀者の回答(女鑑發兌回數に就て)

◎わたし月に二回といふのが如何にも嬉しくこん度來るのをたのしみに一生懸命記者樣方が心をこめて御記載して下さつたものを讀んでゐますのに月に一回なんてほんとに御うらみ申しますよ、わたしなんでも月に二回のに贊成します．だけれどももしも月一回といふのになつたらどうしましやう實にあんじられますわ(三浦、花子)

◎私しは吉田よし子孃の通り月二回に贊成します、さうして小說はどし／＼記載して下さい(岡山縣、人見清子)

◎私は月に一回の方が大贊成で御座います、そして口繪も記事も澤山にして頂戴、又時々臨時增刊を出版して下さい尙申し添へますのは宮里三木枝子樣の靑をいつも出して下さい(女鑑永讀女)

◎わたくしはどこまでも元通りを贊成いたします、友とてもなく學校にも參らず外出も致されません身には、こればかりは待遠で御座いまして此上發刊の遠くなりましては、たまりませんそれに女學世界や婦人界のやうに紙數ばかりおほくなりますと、むだな記事ばかり多く御座いますから半も見ません中に秋風がふきます、それに他の雜誌の歌は新派とやら、いやな言葉のみで私などには少しもわけがわかりません、此頃大坂の友よりさう申して參りましたから女鑑の歌の庭をしへまして御座います、何卒／＼撰者先生は高尙な今迄通りの歌風の方を願ひ上ます(大井村みよしうつ子)

◎謹で女鑑記者に申し上げます、妾は一回二回說の事に就いては隨分頭を痛めまして、種々と利害得失を考へ知己朋友にも聞いて見て出版事業に經驗の有る人にも聞きましたが、如何しても全然一回にして材料を豐富にし記事を精選して行くのに勝ることはないです、全體二回といへば勢ひ記事等も杜選になりはしないかと思はれます。(千葉、一紅女)

◎二回說は全然反對です、一回にして而して眞面目に體裁よくして貰いたい(群馬、花女)

◎是までの通り月二回として、記事を豐富に成さるやう御願ひ申します皆樣どうか二回說に御贊成遊ばせ(東京、天野朋子)

◎此度女鑑に付是迄の如く、一ヶ月二度の發行と一度の御發行との御說うれしく拜し參らせ候、私の存じよりには一ケ月一度の御發行に御改め至極よろしからんと存じよ〳〵し(東京、松村とし子)

◎私は月二回說に贊成いたします、頁數寫眞など少くても宜いです一回では待遠です是非ともこれまでの通り二回に(東京、村井ゆき子)

◎妾は山間僻地に佗び住居して居るものですが、何だか二回だと何時も輕卒にしげ／＼參るやうに感ぜられて、重味がない樣で有難く思はれません(甲斐、一賤女)

◎妾は女鑑發行の回數に付き二回の方に仕て戴き度いのです、兎角一回となりますと紙數も多いものですから、首尾讀み盡さずに放つてしまゐます、よく讀んだといたしましても每號手前の記事などは前號の記憶不確實となり趣味減却して仕舞つた所へ參る樣な譯で、かれこれどうしても月一回の方へは贊成は出來ません(羽前、大谷きく衣子)

◎妾は雜誌が大好で取り分け女鑑が大好で、此れに賴つて勉强して居る者ですが何分學識が淺いから、スラ／＼と讀み且つ其精神を味ふことが出來ないで、ユツクリ讀み度いと思つて居るのに二回だと未だ前號の記事の好く分らない內に早や後のが來て、遂に有耶無耶のうちにドチラも書棚に突き込むで棄てゝしまう樣になります、どうか月一回にしてユツクリと讀むことが出來る樣にして下さい、(廣島、花岡糸子)

◎一回說に大贊成です、其のかはりに普通片々たる一回雜誌の不體裁に陷らず、成るべく女鑑たる從來の面目に耻ぢない樣に仕て下さいまし(靜岡、大岡ふく子)

◎月一回にして四季に增刊して下さい(とみ女)

◎妾は女鑑讀者の一人でござります、每月一日と十五日の參りますのが樂みに待つて居ます、妾は女鑑を何よりの友人と致して居ます然るに此度月二回の處を一回發行に遊ばすとか、實に／＼驚き入ました月二回の今でさへ待ち遠しくッて、三回にでも仕て欲い樣ですのに一回

だなんて實に驚きました、妾は月一回發行には大の不贊成で有ます多の諸姉方も大方は妾と同樣の思で入らせられる事と存じます（愛讀女）

◎頁數及び口繪の多くなるのはよろしいが、發刊數の減るのは嬉しくございません、寧ろ此上に増刊が願ひ度い位です、刊數多ければ、自然記事も新い譯ですから、尙ほ願ひ度のは、高尙にして學問的なるどこまでも、婦人の讀物として、女鑑の名に背かない事であります、（横濱飯島淳子）

▲記者曰く御注文の御精神は慥に相分りました、勿論どちらに成つても女鑑は女鑑たる体面を保つて行く覺悟です

◎女鑑發兌回數改良するや否に付ては、私は從前の通り毎月二回發兌を可とす（無名氏）

◎一回發兌に大贊成です大方の諸姉方何卒御贊成下さい、一回になりますと何かにつけて便宜でせう、早い例が月並兼題投稿の如きも何時も〳〵後を追ばれて面白き趣味も出ない内に書き放して、期限に遲れぬ樣にと心急きて投稿するから、只だ苦しむ計りで有ります其れでも期日の間に合へば宜いが、郵便等の都合にて不幸にも後るゝ樣な事が有りますからどちらにしても月一回發行がよからふと思ひます（熊本岩田市子）

◎妾は學科の余暇に雜誌を閲讀するので有りますから、月二回では却つて困ります、又彼の續きものなどの如きは氣永く見ることが出來ませんから何卒一回にして、訴切のものを澤山に順序正しく掲載して下さいまし（松本化）

◎貴社女鑑此度の御示し二回にてさへいと待遠く候を一回とは贊成致しがたく候いよ〳〵高尙なる家庭教育婦女のつとめ學術に渡りていみじきを撰ばれ二回乃至三回にてもあらん事こそ願はしけれ（三河てい子）

◎偏りなき田舍人の心からかは知られどわらはゝ是迄の二回にこそ心引かれ待れよし其頁數一倍せんも熱誠上一回は猶二回に如くましくやまして其待ち遠ならんは何事にも増りて心うかるべしと思ひ侍るかして（福島佐藤ゆき子）

◎私は東京の入河薫子に大贊成であり升月に二回が三四回になる方が宜しき樣存じます月一回は何卒御やめ下され度れんじ上り〳〵（福岡鏡山増代子）

◎私は女鑑を雜誌中の女王と思つて愛讀する一少女ですが此度の御相談に依りまして申上ますと御社に種々の御都合も御座いませうが令更二回を一回に切上けるのは他の雜誌の風を眞似る樣で何んだか流行を追ふ如く思はれて妙でありません從前の通り二回に御願ひ申上ます女王なる女鑑よ變なき愛を以て妾等が師となりて永遠に導かれんことを祈ります（愛讀の少女寒み）

◎私は左の通り思ひますから月二回發行を望みます

一、女鑑を貴賤の別なく可成多くの婦女に讀ませそして女德の發達を圖らうどするには是非一册の定價を廉くする必要がある

二、紙數多ければ多少從忘の意が生じて來ます

尙序に今後は成可多く古今賢婦人の傳記を掲げて戴きたうございます（岩代伊藤の君子）

其他成否のみを申越されたる點數を前回の分に合算すれば左の如し

千八百五點　一回說

千六百八十二點　二回說

乃ち一回說の方二回說より多數なること、百二十三點でありますから御約束の通り多數決の方法に隨ふて斷然

一ヶ月一回

發兌と極め次號は來月十一日**紀元節**の日を卜して**大々的改良を加へて**發兌いたしますからいよ〳〵御愛讀を願ひます、序でながら讀者諸嬢が此の問題に就きて熱心に贊否を表して下さつた御好意を感謝いたします

彙報

○英國皇后の美事

（鼹鼠帽流行の由來）

巴里新聞によれば巴里貴婦人間に於ける今冬の新流行は鼹鼠の皮を以て製したる手煖なるがこは或る有名なる裁縫師が此程倫敦に在りし際英國皇后陛下が右の手煖を用ゐ給へるが非常に見榮ありしにより此風を巴里に移さんと思ひ立ちたるによれるものにして然かも皇后陛下が斯く特に鼹鼠の皮を用ゐ給ふに就てはいみじき美談ありそは陛下は豫てより民を思ふ御志深く曾てウエールス地方にて鼹鼠の農作物を害することの甚だしきを聞召され毛皮商に命じて鼹鼠の手煖を製らしめたるに忽ち貴婦人社會の流行となりそれより鼹鼠の害大に減じたる由にて爾來ウエールスの農民は非常に陛下の德をたゝへつゝありといふ

○初の宮仕

京都は聖護院町に中神四郎といふ人あり江州膳所の士族にして妻菊江との間に長男武雄（十二）と女房江（十三）といふ二人の子を擧けまた同居せる伯母は水口春子とて今年七十九歳目出度き長壽にて四郎夫婦を我子の如く武雄や房江を孫の如く愛しみ一家常に風の吹き座り居れりこの老嫗春子は十五歳の時禁裏に上り十八歳の時より孝明天皇の御姉君敏宮に仕へていみじく御心にかないそれより二十年ばかりの後敏宮は桂宮を御相續あそばされければ春子も亦御伴し老女として桂宮に仕へけるがその後桂宮殿下雲隠れさせたまひ御相續絶えしかば春子は宮内省より特に隱居を申しつけられて今なほ健全に御代の惠を仰ぐな

りけりされば この老嫗故桂宮殿下の御佛事は言ふも更なりその他やんごとなき方々の御佛事には列らずといふ事なく取りわけ皇后陛下京都に行啓の節は必ずまゐりて御機嫌を伺ひ有難き御言葉をさへ賜はりしこともありけり去年　兩陛下第五回内國勸業博覽會場へ臨御のため大阪に行幸啓ありその際京都に御駐輦ありしかば春子は例によりて數回御機嫌を伺ひ奉りその都度に房江を伴ひて内々皇后陛下に拜謁を許されたる事もありけりとなりされば房江も幼きより老嫗春子や母菊江の行儀作法をおのづから見習ひ廻らぬ舌に宮言葉をさへ交へ宮仕への眞似事などして遊びけるがやう／＼大人びゆくにつれて雲上を慕ふこと頻りなれば宮内省にても房江の志ざしを聞き及びかつは春子が昔の忠勤も棄て難しとて去年の十二月房江に宮内省出仕の御沙汰ありまだ年ゆかねば躾十分ならず春子も菊江も最初そればかりは氣遣ひしが房江の喜び勇むにやがてそれも打忘れて支度を調へ房江は或る人に伴はれて急に東京に上りぬさて間もなく御膳係を命ぜられしかば老嫗の面目母の喜び譬ふるに物なくこの少女いかなる宿世やありけん明治二十五年一月一日の出生にて即ち辰の年の辰の日に產聲をあげたるぞ返す／＼も目出度き、梓弓春子の心こめて育てし花の房江、九重の玉敷く庭に咲き榮ゆるさま思ひやるべしまた母の菊江は明治元年に生れて今年恰も三十七歲これも目出度し十七歲の時より久邇宮殿下へ姫宮附に仕へ奉りやんごとなき邊の作法をよく知れりとなん因みに房江は京都市第一高等小學校二年級まで學びし者なりまた春子は近き年まで頭髮は葵髱にて參内又は式事の節には必ず袿を着たりとなん故英照皇太后の御入内の時禁裏にありし女官にして今なほ存在ふるはこの春子刀自の外京都にわづかに二人ばかりなりと

○米國婦人の同情

米西戰爭の際看護婦協會長たりしドクトルマギー女史は先頃高平駐米公使を訪ひ日露若し開戰するに至

らは米國看護婦隊を提げて救護の勢を執らんとて左の書狀を添へ申出でたる由米國民が如何に日本に同情を寄せつゝあるか以て之を推するに足るべし

ドクトルマギー女史書簡譯文

下名は開戰の布告に際し日本陸軍の病傷者看護の補助をなす爲め閣下を通じて米國看護婦隊の服務を貴國政府に提起するの光榮を有し候

右看護婦隊は完全なる設備を有し且つ二年又は三年間病院内に住居し實地の看護に從事するを要する我看護養成學校を卒業し加ふるに卒業後職務に大なる經驗を有する婦人のみを以て組織せらるべく候而して右の看護婦の有する經驗の一部は米西戰爭幷に菲律賓及北清事變の際合衆國陸軍の常役によつて得たるものに有之隨て彼等は陣營の生活に慣れ軍規に嫺ふものに有之候

軍醫總監スターバーグ氏直接指揮の下に下名が看護婦隊を監督せる數年の間に於て我陸軍に任用せられた看護婦は其數約二千に達し候而して千八百九十八年に服務せる六百名の看護婦は米西戰爭看護婦協會に屬する者に有之同協會は三年以前に設立せられたるものにして下名は其會長たるの名譽を有し候

今回申出候看護婦隊を組立つべき看護婦の數に關しては閣下の御意見と米國人民より受取るべき寄附金の多寡とによつて定まるべきは勿論の儀に有之各看護婦は必要に應じ少くとも六箇月間服務のとに約束可致候下名は殆ど開戰の布告あるや否最も外科的熟練を有する數人の看護婦を同伴して出發することを得べく爾餘の看護婦は必要に應じ電報を以て呼寄せ得べきことを御注意申上候尙ほ下名等日本到着の時より宿所及び食料は日本政府より供給せらるゝことゝ思料致候下名は本件合衆國人民の友誼的表彰が貴國政府の嘉納及び允許を得んことを最も熱心に希望する者に有之候敬具

千九百三年十月二十九日

（千八百九十八年乃至千九百一年合衆國陸軍

アクテイング、アッシスタント、サージヨン
陸軍看護婦隊監督)

アニタ、ニユウコム、マギー

駐米日本特命全權公使殿

○大阪區役所の女吏採用　大阪北區役所に於ては戸籍謄本調製寄留簿の記載學齡兒童の調査及其他諸般の計算事務を取らしむる爲め女子採用の規定を新設し市長に建議したりと云ふ

○看護婦名譽金牌を受く　日本赤十字社看護婦川村もと子は北淸事變の際廣島に在りて佛國傷病兵の救護に從事せし廉を以て曩に同國大統領よりオフヒシユーダカデミーなる記章を贈與されたるが今回重て名譽金牌を我が外務省を經て同人に贈與されたりと云ふが同牌は危險なる場合に在て献身的仁愛事業に從事したるものにあらざれば贈與されざるものゝ由にて純金七匁餘ありて精妙なる彫刻を施し餘程貴重なるものなりと

○得難き寡婦　高知縣安藝郡津呂村字新町松井熊太郎妻やく(卅五)は十年以前嫁し來たりし者なるが二人が仲に姉くに弟春馬の兩人を舉げ睦じく暮す中熊太郎の死去せしより其身を家の柱とし如何なる困苦の來らんも二人の子供を育てんと晝夜の別なく野に山に得耐えぬまでも働くを親類緣者は若き身をあの儘にして置かば却つて家の瑕ともなる事の起らんも圖られねば今の中入夫して家を立てさせんこそ好けれとの相談にて屢々やくに勸むれど更に心を動かさず必死と稼ぎては姉と弟の教育に怠らねば其後何かと勸むる者もなくなりたりやくうるさからすと喜び茲に十年の長き間を其手一つに何事も人に賴らず佛事の如きも相應に營み姉は小學を卒業し今は機織り裁縫の事を教へ弟は尋常四年にても組長とまでなるに至り家計は良人の存在中よりいとゞ豊となり居るより前に譏りし人さえも後家の鑑と譽めそやすに至れりとなり

○模範學校新設の計畫　我邦教育の現制度が小學

校は一般に小學校獨立の目的を以て子女を敎育し其卒業者の進んで中學校又は高等女學校に入學するの便否に就て深く留意せざるを遺憾なりとし寺田勇吉湯本武比古氏等發企となり今回精華學校なるものを設立し修業年限を十一ヶ年乃至十二個年とし尋常小學に始り高等小學第二年程を終了して五ヶ年の中學校又は高等女學校の學科を履修せしめ進んで高等敎育を受けんとするものヽ爲めに一個年の補習科敎育を受くることを得せしむべく即ち一貫したる敎育を施す方針にて來年四月より開校する豫定なりと

◎富山縣の貞婦　富山縣高岡市横田町田中幸四郎妻ミヨと云へるは明治廿六年同家に嫁ぎ來りてより姑と夫とに事へて孝貞怠らず去三十年夫幸四郎不治の難病に罹るや家計貧困家に一厘の餘財だもなく倏ち糊口に窮したるにぞ身の軟弱なるをも顧みずして晝は某所の職工に雇はれ夜は市に出でヽ蔬菜を鬻ぎ以て活計に資したるのみならず適々米價騰貴に際するや自ら減食して夫に奉じ且つ毎夜遠方の祠堂に參詣し身を以て夫に代らん事を祈り寒風膚を劈くの時尙水垢離を敢てして熱誠に祈願する處ありしが、事偶偶同縣知事の聞く處となり先日賞状に添へて金五圓を下賜せられたりと

◎老夫婦の誕辰祝ひに金銀の鯛を贈る　靜岡縣駿東郡靜浦村といへば畏くも東宮殿下の御館の在る邊に隣りて春は桃鄕の桃の花秋は香貫の山の月、松靑く砂白く常に富士の雪を仰ぎ眼のあたり田子の浦の靜けき波を見渡すなど實に尉と姥との捿ふべき村なるが其處に植松鶴吉(六十一)妻お君(五十七)とて愛たき夫婦あり鶴吉は暮れの十五日生れお君は矢張暮の廿五日の生にて毎年師走の廿八日に二人の誕生日を祝ふことになし其の時には如何なる不漁にても二尾の大鯛を調へるを例としたり左るにても去年も師走の二十七日に至りて同家にては翌日の祝ひの用意に忙がはしきが朝より風吹き荒みて市に一尾の鯛をも見ざりければ夫婦は吉例に缺けたりとて大に氣にかけ其の朝より人を走らせ固より貧しからぬ家なれば金に明

して索めさせたるに其の夜になりても一尾の鯛さへ索め得ざるに老夫婦は力を落し居たりしに茲に静浦村のうちにて獅子ケ濱といふに住める漁夫吉松（十八）といふ青年あり一人の母の病めるを養ひて孝行類ひなく孝行漁師の呼さ近村に聞えたるが此の夕風の荒める中を静浦の濱先なる布島といふ磯に綸を垂れたるに忽ちにして鈎に懸りし魚こそあれ引き揚ぐれは櫻の花を綴り成したるごとき鱗の色美くしく眼の下二尺に餘る大鯛の潑溂として揚りたれば吉松の喜び言はん方なく捉へてこれを籠を投じ又も鈎を投げ入れたるに少時にして又た釣り上がりしは矢張二尺に餘る大鯛の鰭の色銀を展べたるごとき光りあるは先なるは金鯛後なるは銀鯛とて世に稀らしきものなるより直に植松の翁の家に持ち行きたれば老夫婦の喜びは一方ならず多分の金を與へ且つ祝の席にも侍らせ馳走して歸したるが孝子はこれが爲め例年になき豐かの年を送りたりと云ふ

○松山婦人慈善會の組織　私立松山幼稚園の爲めに先年設立せられたる母乃會は年々開きし慈善市の收益金目下現在百餘圓ある由なれば今數年間は幼稚園の經費補助として寄附するを得べく近き將來に於て同幼稚園は市立となる筈なれば旁た今回母乃會は解散することゝなし同會員は更に松山婦人慈善會と云ふを組織せりといふ其規則左の如し

松山婦人慈善會規則

第一條　本會は世の不幸者及び癈人にして他によるべなきものを救護するを以て目的とす

第二條　本會は松山婦人慈善會と稱し當事務所を榎町私立松山幼稚園内に置く

第三條　本會々員を分ちて左の二種とす

（一）通常會員（女子にして會費として毎年金壹圓を納むるもの）

（二）贊助員（男子にして本會慈善市の際五十錢以上の寄附をなすもの）

第四條　本會は多少に係らず有志者の寄附金を希望す

第五條　本會へ收入したる金圓は確實なる銀行に保管せしむるものとす

第六條　本會の目的を達せんがために左の事業を行ふ

一總會　毎年三月之を開き役員の選擧會務の報告事業の狀況等の報告及慈善市開催準備の評議等をなす

一慈善市　毎年四月之を開く

一親睦會　毎年十月之を開く

第七條　本會に左の役員を置く

會長一人　會務を總理す

幹事五人　會長を補佐し會務を分掌す

評議員十五人　重要なる事件に關し會長の諮詢に應ず

第八條　會長は幹事會に於て德望あるものを推薦し會員の承認を得るものとす

第九條　幹事は會員の互選とし其任期を三ヶ年とす但再任するも妨なし

第十條　評議員は會員贊助員中より會長の特選とす

第十一條　本會は必要に應じ委員を設け又は臨時會を開くことを得

第十二條　此規則は會員三分の二以上の同意を得るにあらざれば變更することを得ず

附　則

第一條　寄附金者へは金額の多少に係らず謝狀を贈與す

第二條　救護方法を左の如く定む

(一)救護の程度は甲乙の貳種に區分す

(甲)他に依るべなき老幼者

(乙)己の怠慢によるに非ずして薄命に陷りし者

(二)會員は常に救護すべき者に注意し現況をよく取調べ幹事に申告すべし幹事は會員の申告により幹事會を開き金員の惠與額を定め會長の裁可を仰ぐものとす

第三條　幹事會は毎月一回之を開き評議員會は必要の場合之を開く

○空前の大手術（心臟の縫合）　英國ハックニー居住のジョンロングと呼べる男は昨年五月倫敦病院に於て心臟縫合の手術を受け不思議にも生命を取止めたるが近頃同人を訪へるデイリーメールの代表者に對し同人の語れる直話は左の如し

去五月三十日の事なるが余は途上に一泥醉漢に出會し如何なる機みか兩人忽ち格闘を始めたるが件の漢は小刀を閃かして打蒐かりし故余は避けんとする途端此時早く彼は余が心臟の中央を刺通したり當時余は格闘の爲め呼吸の激しき折柄なれば痛を感ずる暇もなく眩暈して倒るゝや否や忽ち人事不省に陥りたり後にて聞けば其折駈付けたる醫師の言によれば余は三十分ならずして絶命すべしとの事なりしが取敢へず倫敦病院に送られて外科醫ファーニバル氏の手術を受けたるが氏が檢案の結果心臟の傷は勿論肋骨三枚は切離され剰さへ胸骨の一部をも切去られ居たり兎に角同氏の力により首尾能く傷口縫合の手術を終へたり其際氏は程なく恢復すべしと事もなげに傍人に言放ちたりと當時余は昏睡し居たる爲め其模樣を記臆せざれども余の重傷を見たる人々は何人も醫師の言を信せざりしに果して醫師の言に違はず余は幸にも二ケ月の後全治退院するに至り退院後の氣分も全く從前と異なる處なし其後醫師の檢診に依ば只心音に於て多少常人と異なる點を認るのみなりと

明治三十七年 女鑑月並兼題豫告

二月
- 歌　富士山
- 歌　餘寒月
- 文　雪中梅園に遊ぶ
- 文　春日局の傳記を讀みて

（二月分一月廿五日〆切）

三月
- 歌　旅行
- 歌　春雨
- 文　春季運動會の記
- 文　月夜櫻花を賞して

○新刊書目（紙面の都合により批評は大號に讓る）

青年議會	八期	東京市神田區千代田町	帝國青年議會
婦女新聞	一八七、八	東京牛込區東五軒町	同新聞社
商家の友	二〇	同京橋區南鍋町	時事新聞社
女子の友	一四八	同神田區鎌倉町	東洋社
婦人と子ども	四卷一	東京女子高等師範學校內	フレーベル會
慶應義塾學報	七二	同芝區四國町	同發行事務所
うらにしき	一三四	同本郷區	尙絅社
をんな	三卷一二	同麹町區下二番町	大日本女學會
むさしの	二卷一二	同赤坂區福吉町	東洋文學會
大日本婦人教育會雜誌	一六〇	同表町	同會事務所
六合雜誌	二七六號	同芝區四國町	日本ゆにてりあん弘道會
新聲	十一編一號	同神田區錦町	新聲社
東京經濟雜誌	一三〇六、七、八、九	同京橋區彌左衛門町	經濟雜誌社
成功	三卷四	同本郷區弓町	同雜誌社
音樂の友	四卷八	同下谷區仲徒士町	樂友社

大八洲雜誌	二〇九	同神田區三崎町	大八洲會
國學院雜誌	九卷一二	同麹町區飯田町	國學院
家庭雜誌	二卷一	同京橋區新湊町	由分社
初等教育教材研究	一卷三	大阪市南區	大阪府師範學校々友會
女子新聞	四八	東京市京橋區有樂町	同新聞社
時好		東京市日本橋區駿河町	三井吳服店
中央公論	十八年一二	東京市本郷區駒込西片町	反省社
愛國人	四五號	同麹町區下二番町	同發行所
財團法人大橋圖書館	第一年報	東京市上六番丁	大橋圖書館
みやこどり		東京市日本橋區駿河町	三井吳服店
讀書界	二卷一	東京神田區裏神保町	富山房
蝶の寬法	全一冊	同	同
日本女子大學校學報	二	東京市小石川區高田豐川町	日本女子大學校
圖案	二十一	東京築地	國光社
文學	二卷一	東京市京橋區築地二丁目	國光社
美姫遺蹟	全一冊	日本橋區本町三丁目	金港堂
日本文法	同	同	同
女子の心得	同		富山房
女子教育	第一號	神田區錦町	明治書院

女鑑大擴張

毎月一回

一日發行

讀者多數の希望により毎月二回の發兌を改めて壹回發兌としたる我が女鑑は此の際進んで毎號二百頁內外を有する大雜誌となして口繪等をも精選すると同時に紙面に大改良を施して從來設備せる各欄の外更に演壇、社會及び遊戲の數欄を加へて益々高潔なる趣味と實益とを供給し猶つて女子道の爲に貢獻し女子教育の爲めに盡瘁して十數年來一貫の宿志を貫徹せんことを期し來二月十一日紀元節の日をトして改良の第一卷を發行し聊か讀者諸子の厚顧に酬いんとす是れ女鑑が昨年來計畫せるところにして今やこれを現實にするを得たるものなり其各欄記事の梗概を擧ぐれば乃ち下の如し

●社論　（一片歌々の微衷を發揚して女子社會の参考たらむことを期す思慮周到文字簡潔也）

●論叢　（内外諸大家の寄稿によるもの議論卓越文章巧妙實に女子界の燈臺女學生の羅針盤たり）

●史談　（東西理想女子の傳記及逸事を掲げて一般の模範となし又歴史上の資料を供す）

●學藝　（優雅典麗なる和文漢文及び簡易なる英語に註釋を施して机上の研鑽を資く）

●社會　（女子に關する凡百の社會情態を明にして時勢風潮の一班を知らしめんを期す）

●演壇　（名家有益の演説を速記したるもの也恰も會場に臨みて其人に接し其聲を聞くが如し）

●家庭　（修身齊家養老育兒等を始とし家庭の百事を説明し衛生料理裁縫等に至る）

●遊戲　（遊戲百番の名稱の下に各種の遊戲を連載して清新潔白趣味ある娯樂を與ふ）

●雜錄　（以上各欄に屬せざる諸般の記事を集む學校及女學生の批評等も其内にあり）

●文林　（宮中御歌會を始とし其他近世名家の和歌文章新体詩等を載せ斯道の模範となす）

●教の庭　（諸嬢の文章和歌を募る才藻煥發百花の園に入るが如し選者は黑田先生、井上先生）

●彙報　（雲井の御消息より田園村落の情況に及び現今の孝子節婦賢母貞婦良妻の事を載す）

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候



御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

細川十州先生序文　三輪田眞佐子刀自著

女子の本分

第十六版出來

彩色摺表紙大和綴菊版美本全壹冊定價金廿五錢郵稅金六錢

發行所　東京橋區築地二丁目廿一番地　電話新橋特八八●●二六九二番　株式會社　國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

堀内新泉著

少女讀本



花月雪の巻

全三冊定價各十八錢郵稅各四錢

先づこの書の特色は、第一嬢さん達のためになるお話ばかりを集めたのと、第二には面白いのやら、悲しいのやら、又勇しいのやらいろ〱あるお伽話の中に、みな一〱修身の教のこもつて居るのです。その外まだ面白い唱歌もあれば、球歌などもありますが何れも世にありふれたものとは、丸でかはつて居りましてこの度著者が親切に皆新しく作つたものばかりでございます。

松川覺州著

結婚と家庭

四六倍判三ツ切

定價金拾五錢

郵稅金四錢

結婚と家庭！是れ未だ解答を與へられざる一大問題なり抑も兩性結合は天の大倫。男女相愛は人の常情。誰れか又之を防遏するを得んや。然りと雖も淑女必ず吉士と遇はず。才子必ず美人と配せず。是を以て或は失戀に泣き或は破鏡を嘆じ、終生孤閨を守りて。厭世の人となる者古來其類多からずとせず。是れ豈人生の最大不幸にあらずや。著者の麗筆を以て此の大問題の解決を試み。近く證を取り遠く例を引き。縱橫論議して毫も憚かる所なし希はくば青春妙齡の士女、此書に據りて以て、相愛の結儀を擧げ和樂の家庭を構成せば、始めて人生の眞福を享くるを得ん歟。

藤野天城著

女子小觀

四六版洋裝

定價二十錢

郵稅四錢

發兌元　東京築地　株式會社　國光社

明治廿五年二月二十日 第三種郵便物認可
毎月二回一日十五日發行 第拾四年第貳號
明治二十七年一月十五日發行

東京築地株式會社國光社印刷